

富士

富士

3

柿沼日明 著

白蓮大聖人御伝

富士

3

小説
富

士

第三卷・目次

	大仏殿会議	一
一	・	一
二	・	八
三	・	一五
	てんやわんやの座談会	二三
	富士山埋経	三一
	諸宗勝つか日蓮負けるか	四五
	蒙古第二回目の国書到来	五九
	雨の祈りの争い	六七
一	・	六七
二	・	七七
三	・	八五
	竜の口	九五
一	・	九五

大仏殿会議

一

「本日はおいそがしいところを皆さんご苦労さんでございました。これで、ご案内を申ししたところは、全部が全部ご出席でございます。御僧侶の方は、御住職自身がお出席のところと、代理の方がご出席のところがありますが、大体において、ご存知のことと思しますのでご紹介を略しますが、本日は、事が重大でございますので、檀家総代二名のご出席を願いました。主だったお方をこちらから順に申し上げますと、建長寺の檀家総代のお方、それからこつちが極楽寺の檀家総代のお方、あつちが寿福寺の檀家総代のお方、その隣りが浄光明寺の檀家総代のお方、つづいて、多宝寺の檀家総代のお方、そして一番最後にありますのが、これは人数が多いですが、いろいろと本日のお手伝いの意味もありまして、かくいう、当山大仏殿の総代世話人でございます。どうぞよろしくお願い申します。ついては、始めに多宝寺の御住職から「邪教を葬れ」と

いう講題で、譚々の御法話があることになっております。そして、それが終わりましたら、質疑応答といったような形でご相談を申しまして、最後に決議をしまして、その決議に従って、鎌倉中の全仏教は行動を起したいと念願しておるのであります。時間がございませんで、さつそくに、多宝寺さんの「邪教を葬れ」という講題に入るべきでございますが、主催者として、本日の会合の主旨を説明させていただきたく存じます。

本日、お集りを願いましたのは、最近に、またまた鎌倉の町々を騒がし始めましたあの日蓮坊主のことでございます。申すまでもなく、かの日蓮坊主は、弘長元年の五月十二日に伊豆の伊東に流されまして、まあ結構な案配だ、よかったよかったとお思ひになつたのは、私ばかりでなく、この席の方、全部がそうお思ひになつたろうと思うのであります。しかるに、何故か、幕府は、弘長三年の二月にはこれを赦したのであります。恐らく、私どもの想像では、日蓮坊主は前非をくいて、他宗の悪口はいうまい、彼が専売特許の折伏というのであります。折り伏すとかきましてしゃくぶくと読みます。くわしい説明は多宝寺さんから改めて拝聴することにいたしますが、近頃は皆さん方も、ようやく折伏という字がよめるようになったと思ひます。中にまだしゃくぶくなんていう人もおりますが、これ程、日蓮坊主はこの鎌倉に折伏をはやらせた本人であります……

ええつと、話が折伏ということで、私も実はこの折伏にはさんざんやまされておりますの

で、ついつい話が横道にそれまして、まことに失礼いたしました。すなわち日蓮坊主は、他宗の悪口をいうたのが理由で、伊豆の伊東に流されたのでありますから、まさか流罪を許されたからには、おそらく絶対に今後はよその宗旨の悪口はいわないであろうと思っておったのであります。私もそうだろうと思っていました。その証拠には、彼の日蓮坊主は、伊豆から許されて帰った、弘長三年の二月からは、鎌倉から姿をけしまして、いづれかにいつてしまいました。そして、鎌倉の町々寺々には、昔ながらのありがたい念仏の声が流れておったのであります。しかるに、今年文永五年になりますと、再び彼の氣違ひ坊主は、鎌倉の町に帰ってきて、以前にもまして、辻々に南無妙法蓮華經の旗をたてて、

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

諸宗無得道 墮地獄之根源

と、がめきたてたのでございます。流罪にあつたような氣違ひ坊主のいうことでございますので、もはや誰も耳をかすものはなかりと、こつちもたかをくくつたのであります。なかなかそうはいかない。世の中には変わり者というものが何時の時代にもおりまして、氣違ひ坊主の手下が、さき程申し上げました折伏といううるさいことを申しまして、私共の檀家をさわがせております。一例を申しますと、もつたいたなくも、北条時頼さまが精魂こめておつくりになった、当

寺の大仏さまさえも、いくら拝んだって御利益があるものか、こんなものはやめてしまえ、ぶつこわしてしまえというひどい奴さえおるということをきいて驚いたのであります。まさに暴力宗教と申しましようか。文化もなにもあつたものではありません。野蛮そのものであります。なにしろ日蓮坊主の信者の奴等は神棚はいらぬ、法華経以外はみんな邪教であるというて、一切の御札は全部焼きすてる、仏像は偶像だから全部ぶつこわしてしまえという、まったく氣違いの宗旨であります。仏像もいらぬ、神社も必要ないといいましたら、この鎌倉の町になが残るでしょう。材木座、魚座、銀座といった商店街のみではないでしょうか。商店街だけが鎌倉の文化でありましようか。いいや、違います。二百年、五百年たつてごらん下さい。今の町民の消費生活は何一つ残るものなく、残るものは神社であり、仏閣であり、仏像であり、神像であります。これらを焼きすてる、ぶつこわせ、拝むなどいうのでありますから、暴力宗教と命名しても、少しも差しかえかおりません。私も大変興奮しまして、主催者としての開会の辞をとりまちがえまして、なんだか演説じみてしまいました失礼いたしました。ではこれから、多宝寺さんの「邪教を葬れ」といった講題でお話を願いたいと存じます」

拍手が一しきり大仏殿の書院をふるわせた。鎌倉中の主だった寺の住職と檀家総代があつまつて、もちろん檀家総代は傍聴人といった資格ではあるが、由比浜辺にほど近い深沢の大仏さまで、これではわからないだろうが、今日という鎌倉の大仏さまのお寺での会議である。

今日の会議は大げさにいえば、鎌倉仏教徒会議といったところであつた。時は、文永五年の十月の末である。

「私が只今、ご紹介にあずかりました多宝寺の弁明でございます。本日は「邪教を葬れ」ということについてお話を申し上げたいと存じます。本題に入る前に一寸、何故、本日このように沢山の皆様方のご出席を得なければならなかつたかと申し上げますれば、「邪教を葬れ」というその邪教とは、何んであるかも自からわかるのでございます。それは本月の十一日のことでございます。彼の日蓮法師は、彼のいわゆる折伏の手紙を鎌倉の寺々に差し出したのであります。寺々とは、ここにお集りの建長寺さん、極楽寺さん、寿福寺さん、浄光明寺さんそしてここの大仏殿さんと私のところ、多宝寺でございます。この外にも、彼は神社奉行の宿屋入道殿と、執権職の執事たる平左衛門尉殿と、彼の唯一の権力者となつたのむ北条弥源太殿と、そして馬鹿と氣違ひにこわい者はないと申しますが、恐れ多くも執権職北条時宗殿にすら、折伏の手紙を出したのであります。何故、こんなことがわれわれにわかつたかと申しますと、彼日蓮法師が、自分でこのことをいつておるのであります。すなわち、折伏の手紙を、以上の十一か所に出した。ついでは一か所にあつまり、評定相談して御返事を下さい。出来れば、公場対決をのぞむというのでございます。お上みが、汚がれ者として、伊豆の伊東に流した彼の日蓮であります。そんな流し者と、われわれ官職の僧位にあるものが、同席するのも恥ずかしいのに、よくも公場対決を望むなぞと口

はばつたいことを申ししたものであります。これは、到底できないことを知って、奸智にたけた彼の日蓮法師が、つよがりにしつておるものとか考えられないのであります……。

先程、大仏殿の御住職から、折伏についてはこの私から詳細な説明があろうといわれましたから、一寸折伏ということについて申し上げますと。折伏というのは、破折屈伏の義とか、折破摧伏の意味でありまして、これはあくまでも布教の方法でございまして、宗旨とは違うのでございませう。ですから日蓮法師の実は一手販売ではなく、念仏宗、禪宗、真言宗、律宗、どの宗旨が用いてもよろしいのでございませう。これからのち、折伏がどうしても流行するのだ、それでやってくれと、檀家から注文がありますれば、私どもも折伏をやつてもよろしいのであります。すなわち折伏の折伏であります。すなわち勝鬘經というお経には、折伏に応ずる者には折伏を、撰受に應ずるものには撰受をとという経文がございませう。普通は悪人を折伏し、善人を撰受するといふ言葉がございませう。一切の人を悪人とみなすか、または善人とみなすかの相違が、折伏と撰受の別れただと考えるのであります。

さて、折伏ということは、このくらいにいたしましたして、先に進みますと、彼の日蓮が何故十一か所に手紙を出したかと申しますと、彼は文応元年の七月十六日に狂気の書ともいふべき、立正安国論を幕府に提出いたしました。

彼は、この安国論を提出したために、四十三日目には、彼の松葉谷の家は、三千人の念仏の門

徒によつて包圍せられて、焼きうちをかけられたのでありますが、この時日蓮を討ち洩らしたことは残念なことでありました。今になるとまことに、鎌倉仏教徒にとつて、痛恨事でありました。しかしながら、千葉方面に逃げておつた日蓮が、つぎの年の弘長元年の五月、鎌倉に性こりもなく出てまいりましたので、実はこの座におられる、鎌倉の有力なる諸山の御住職の方々のなみなみならぬ運動によつて、日蓮は伊豆の伊東に流罪ということになり、われわれは、安堵の胸をなでおろしたのであります。しかるところ、どういふわけか鎌倉当局は、われわれに一言の相談もなく、殺してもよい彼の日蓮を三年たつと許したのであります。今に事がおこるぞ、今にわれわれ鎌倉仏教徒に害を加えるぞと、ひそかにおそれいたのであります。ついに、これが現実となつたのであります。すなわち、これが、本日ここにお参集を願つた重大事なのであります。

皆様もご存知の通り、本年の正月十八日、大蒙古国より国書がまいりまして、国民一同の悩みのたねとなつておりますが、彼の日蓮は、この国民一同がおそれている大蒙古国の国書こそ、彼が安国論で予言したところの、他国侵逼難であると大いに騒いでおるのであります。みようによりますと、彼れ日蓮こそ大蒙古国のまわし者、大蒙古国の間者ではないかと思われるような節が多々あるのであります。さて、法華経の力によつて、蒙古国の攻めくるのを予言的中したから、法華経とわれわれの依経と、どつちがすぐれているか問答をしようという、子供だましみたいいな

ことをいつておるのであります。それを十一か所にも出しまして、つよがつておるのであります。狂人とともに走るものは狂人と申しますから、相手にはなれませんが、ほおつておいても僧侶はそれでよいでしょうが、檀家の方々信者の方々に迷いを起すものと思ひまして、ここで、根本的なことをお話し申し上げれば枝葉末節はいらないのでありますから、「邪教を葬れ」と題して、私がしばらく皆様方の時間をいただきたいと思つてあります。」

多宝寺の住職弁明はいよいよ本題に入る前に汗をぬぐつたが、思ひなしか鼻をぴくぴくさせたのも面白かつた。

一一

「さて、いよいよこれから「邪教を葬れ」という本題にはいります。先ず何故、日蓮法師の教義が邪教であるかと申しますと、それは、あまりにも現世利益をときすぎるといふ点であります。彼等宗徒のいうところに耳をかたむけますと、仏教の話をしておるのか、お医者の話をしておるのか、あるいは、金儲けの話をしておるのか、まるつきりわからぬというような状態であります。御利益、御利益のI点ばかりであります。そんなものは、仏教ではありませんと、ここにはつきり申し上げておきます。仏の教えとはなにか、二つに分けて申しますと、自力聖道門と他力淨

土門でございます。一切衆生に皆仏性ありといいながら、何故、一切衆生は生死の巷を輪廻して、この三界の火宅をいでないのでありましょうか。自力聖道門の教えによるが故であります。他力浄土門による往生浄土門こそ、この三界の火宅をのがれる秘術であります。専修念仏がそれであります。

ええつと、一寸話しが、むずかしくなったように思いますので、もつとかみくだいて申し上げますと、念仏の教えで申しますと、われわれは、この世の中にお客さんで来たのではないぞと、教えるのであります。未来の成仏こそ肝要、来世の往生が目的であると、悟らせるのが私どもの教えであります。このわれわれのすんでおるところは穢土と申しまして、五逆十悪の人びとのすむ汚がれたところであります。一刻も早く、この汚がれたところをはなれて、阿弥陀さまの浄土に生まれるのが、われわれ念仏を唱えるものの念願であります。現世の利益などをとくのは、もつての外であります。救われようとするその気持をもつものが、もつての外と昔から戒められております。救われようとす、その気持をすてなければ、真に救われるものではありません。

仏教の根本は、浄土に往生を願うことにあります。現世が苦しければ苦しい程、来世の楽しみは大きいのであります。

病気が治る、金がもうかる、などもつての外であります。

この世の中の苦の種一切が、阿弥陀さまの許にゆく往生の種となるのであります。

病気はしない、貧乏ということがこの世の中に一切ないとするならば、誰が阿弥陀さまを拜みましようか。往生を願う人は、一人もいないでありましよう」

「日蓮法師の流れをくむ、南無妙法蓮華経と唱える人びとがいうところの、現世利益一点ばりというところが、いかに邪教であるかということが、少しはおわかりになったかと思いますが、念仏を唱える人は祈ってはならない、願をかけてはならないと申しますのは、われわれは一切を阿弥陀さまにお任せしておるのでありますから、貧乏するのも仏さまのおぼしめしであり、病気になるのも阿弥陀さまのおはからいであります。すべては、阿弥陀さまにおまかせきつての求道乗船の旅でありまして、自分からああしよう、こうしようと思うのは、間違いもはなはだしいものであります。ところが、日蓮法師の説くところは、これとまったく逆でありますから、邪教だといわざるを得ないのであります。阿弥陀さまの世界に生れることが唯一の幸福でありますのに、この幸福を否定しまして今、われわれがすんでおるこの現世に、幸福を擲もうとしておるの愚をやっておるのであります。

南無妙法蓮華経と唱えて折伏することによって、病気もなくなる、金ももうかる、幸福になるというのが、日蓮法師の垂流であります。そんなことが果して本当に考えられるでしょうか。しかも、今少し日蓮法師のいうことに耳を傾けてみますと、彼はとんでもないことをいつておるのであります。

「昼夜朝暮に弥陀念仏を申す人は、業はめでたしとほめて、朝夕毒を服する者のごとし」と口をきわめて念仏の悪口を申し、悪口ばかりではなく念仏無間地獄抄とか、題目弥陀名号勝劣事とか、当世念仏無間地獄之事とかいう書き物まであるくらいであります。いやはやどうも、手におえぬ悪法師であります。

誰が考えたとお釈迦さまが、自分で自分が地獄にゆくようなお経文を、おときになる筈がないではありませんか。このところをよくよく考えていただきたいのであります。

しかもでございます。これは話が多少政治むきになりますが、民百姓のありかたでございます」

弁明、実はといたい程に声をひくめて、話をつづけるのであった。

「民百姓が、現世の生活の幸福を願って、後生を忘れたならば、国の政治というものはどういふことになりましょうか。実はこれは重大な問題であります。日蓮法師の邪教を葬れといわれる根本は、ここにあるのであります。現世の幸福のみを、民百姓が願いましたならば、民百姓ははたらかなくなるであります。この世の中に、お客さんに来たのではないぞ、働け、働けとというところに百姓は、牛馬とことなることなく死ぬまで働きつづけるのであります。死んだら、極楽の浄土に、お客さんとなってゆけるのであると教えるところに、百姓が働くのであります。百姓が働かなければ、領主は年貢米のとりたてがでえず、年貢米のとりたてが出来なければ領主

は家の子郎党を養うことができず、従つてこの鎌倉の幕府とても安泰にしておることが出来ない
のであります。鎌倉幕府の安泰さは、朝に夕に阿弥陀さまの名号を唱えて、働け働けと、蔭にま
わつて号令をかけておるわれわれ念仏の僧侶の力に負うところが大きなのであります。そこがわか
つておればこそ、この鎌倉中の七大寺といわれる名利も、堂々たる伽藍も等しく鎌倉のお上みが
こしらえて下さつたものばかりではありませんか。

禅宗について申し上げますならば、禅は武士の宗教であります。そこでは、武士に一切は空であ
ると悟れと教えております。執着すべきものは世の中に一切ないと教えております。こう教え、
こう悟らせております。そうであればこそ、一朝ことあつて戦場に出た武士が、桜花のごとく、
きよく散ることが出来るのであります。君の御馬前にいさぎよく命をすててこそ、武士といふこ
とができます。命を鴻毛の軽きに比すとはよくいわれることでありますが、この武士に執着が少
しでもあつたならば、命をなげだすことは出来ないであります。さてこそ、一切は空だと悟
らせるのであります。禅家の一切の公案はすべてこれ、空だと悟れということにあります。この
武士に現世の利益をとく、現世の幸福を教えたならば、どうなることか考えてみて下さい。さ
あ、大変なことになります。武士が死ぬのをいやがります。命をおしむ侍が戦場にいつて、勝利
を得ることが出来るでしようか。おのずから明らかなことであります。君主は、君のために命を
おしめぬ侍を求めます。名を惜しむということは、命を惜しまぬということなのであります。君

主は、自分のために、命を惜しまぬ武士をたんともたねばなりません。そういう武士を沢山もつた君主が強いのです。従つて、命を惜しまぬ武士を養成しなければならぬのであります。その養成を極力やっておるのが、実は禪宗なのであります」

「鎌倉中に禪宗の寺の多いのも、実はこの理屈にもとづくのであります。真言宗はと申しますならば、これはもつと実用的であります。真言は禪家が命を惜しまぬ武士を養成して、戦場において勝利を博しようとしている時に、もつと早く勝利を博しようと考えております。すなわち、敵の大將がころりと死んでしまえば、戦争なんかは、戦わずして勝利であります。これを真言宗はねらつておるのであります。すなわち真言が祈禱仏教といわれる理由が、ここにあるのであります。敵將を祈り殺して、戦勝を博そうとするのが真言であります。昔は、戦争してもなかなか大將の姓名を発表しないといわれました。大將の名が分りますと、すぐそれを真言の寺に御注進して、祈禱をやるからであります。祈りがきかないようにと、わざわざ自分の名に穢れ磨とか糞磨とかつけたといわれております。姓名があんまりきたないので、祈りがきかないのです。ええと、大分話が長びきまして脱線したきらいがありますが、日蓮法師のこない以前の鎌倉仏教界は、まことに僧侶の名にふさわしく和をもといといたしまして、同一歩調をとつてきたのであります。生まれる時は、安産を真言宗さんにおたのみする。長じては、武士は禪宗さんで精神修養するが、やがて死ぬ時は誰でも同じく南無阿弥陀仏さんでおくつてもらうといった調子で、ど

の宗旨もどの宗派も仲のよいものでした。

しかるに、ここ十年來、日蓮法師が鎌倉にきてあの四箇の格言と称する

念仏無間 禪天魔

真言亡国 律国賊

といい立ててからは、われわれ僧侶の方はまあ、狂犬の吠えるくらいにしか思わないのでありますが、どうも檀家の方はそうもいつておられず、例の折伏とかで日蓮法師の弟子や檀那たちに痛めつけられて、お互同志の中にひびが入って、どうもわれわれ宗派同志が、疑心暗鬼の心持ちがするのでございます。この際、ここで大いに親睦を計りまして、日蓮法師の垂流たちの折伏を封ずると同時に、出来ることなら、一度島流しにあつたあの日蓮坊主の首を斬つてもらうか、それができなければ、流されたならば、まだ一度も帰つて来た人のないあの佐渡島に島流しにしてもらいたいと思うのであります。そうでもしなければ「邪教を葬むる」ことは到底できません。

日蓮を佐渡の島に流すことが、本題の「邪教を葬むる」の結論だと思つてあります」

弁明の、日蓮を佐渡に流せという結論は、大仏殿の書院をふるわす程の拍手喝采であつた。

多宝寺の住職弁明の講演が終ると、大仏殿の執事がすぐに立ちあがった。

「ええつ、以上をもちまして、多宝寺の御住職の御講演を終わりました、只今より、自由質問にはいります。なんでもよろしいですから、自由に質問していただきます。解答者は、今までは御講演をお願いしまして、おつかれとは存じますが、やはり、多宝寺の御住職をお願いをいたしたいと存じます」

パチパチと場内から拍手があがって、あまり大きくない大仏殿の書院は聴衆者で一杯であった。

「では、講師に質問いたします。先程の御講演によりますと、日蓮法師の教えは、あまりにも現世的である、御利益、御利益といひすぎると、申されましたが、この点について質問いたします」

「はい、お答えいたします…」

と、弁明が威勢よく答えると、

「一寸まって下さい。今のは前おきでして、これから、本当の質問に入るところでございますか

ら……」と質問者がいったので、場内は思わずどっと笑いくずれて、今までの緊張した気分が一寸ほぐれたような案配であった。

「では、どうぞ…」

解答者に、うながされて、

「私の考えを申し上げます。現世的な利益はいけないと申されますが、そもそもです。わが国において、寺として最古を誇る大阪の四天王寺の建立は、いかなる原因で創建されたかと申しますと、欽明天皇の朝に、わが国に仏教が渡来しますと崇仏派と排仏派の二派に分れたことは、みなさまご存知の通りであります。その崇仏派が、物部守屋との戦いに敗れんとした時に、聖徳太子が、四天王すなわち東方の持国天王、西方の広目天王、南方の増長天王、北方の毘沙門天王に、もしこの戦いに勝ったならば、お寺を建立しますからと、戦勝を祈願したのであります。太子の念願がかなって推古天皇の二年に建立されたのが、すなわち四天王寺であります。寺のそもその建立が、戦勝祈願というような、きわめて現世的なことから発願されておるのであります。また、かの有名な法隆寺は、どうしうわけで建立されたかと申しますと、これは、用明天皇が御病気になるれまして、心たのしまなかつたので、御言願をたてられて、この病気が治りましたなら、お寺をたてて薬師如来を安置いたしますとお祈りしたのを、推古天皇と聖徳太子が、その御遺志をついで法隆寺を創建されたのであります。すなわち「推古天皇六年、太子詔を奉じて、

「勝鬘經」を講説せられ、その布施として、播磨揖保郡佐多の地五十万石を受け、これを伊河留^{いかわる}我本寺、中宮尼寺等に分納され、法隆寺造寺費となる」とあるのであります。なお、金堂薬師如来坐像、高さ二尺七寸、光背（仏像の背後の光相）高さ二尺六寸三分これが法隆寺創建当初の金堂本尊でありますが、その光背に、天皇の御病氣を治さんがために、薬師像をつくと、先程申し上げたことが、きざまれておるのであります。また、推古天皇三十一年に、聖徳太子の御遺命によつてつくられた法隆寺の金堂の釈迦三尊の光背にも「当に、釈像尺寸王身を造くる、この願力をこうかつて、病を転じて寿をのべ、世間に安住せん」ときざまれておるのであります。寿をのぶとか、世間に安住するとか、極めて現世の利益を願つて仏像をつくつておるのであります。特に推古天皇の二年、天皇は聖徳太子や大臣蘇我馬子に詔勅を下して、仏教を興隆せしめたために、臣下以下群臣にいたるまで、競つて仏舎を造営し、これを寺と称すとありますが、その年に出来た釈迦仏の光背の銘に「現存父母の為に、敬して金銅の釈迦像を造り奉つる」とあつて、すなわち現存の父母とあつて、菩提をとむらうというのではなく、今現に生きておる父母のために、現世の福を祈るために仏像をつくつたと、光背にきざみこんだのが、今に残つておる程であります。これらのことを考えますと、寺も、また安置する仏像も、すべて現世の利益を願うということが出来ておるのであります。その後今の世にいたるまで、寺の数は一万一千三十七所、神社は三千一百三十二社と一説にいわれますが、これ等の神社仏閣はすでに戦勝か、当病

平癒かで、かならず出来ておるのであります。それ以外の理由で、寺や神社が創建されたということは先ずないといつてよいのであります。こうなってくると、日蓮法師があまりにも、現世利益を説くということを非難するのはよろしいのですが、ふりかえつてみて、自分の宗旨はどうか、現世利益は一寸も説かないかというところ、そうはなかなかいきれないのではないのでしょうか。ここに極楽寺さんの檀家の方もおられますが、極楽寺の御住職良観上人は、祈雨二十七度といわれる程、雨を祈つて雨をふらせておりますが、これとても、御皇室の方よりその発端は起つておるのであります。すなわち、皇極天皇は、その御即位の年の八月一日に、南淵河上に行幸し、經を衆僧によましめて、御自分は脆拝して、雨を祈願し給うたところが、大雨がふつたといわれております。八月五日、天下皆歡乎して、至徳天皇と称し奉つると或る書にみえておる程であります。

さて、このように歴史をさかのぼつて、寺院建立や仏像彫刻の動機をしらべてみると、現世を祈らないものは一つもなく、精神修養のためにお寺を建立したとか、精神修養のために仏像をきざむとかいったことは絶対にないのであります。この点をいかにお考えでございませうか。おうかがいたします」

「これはこれは、あなたのは質問ではなくて、一場の御講演のようにはなりましたが、いかがなものでしょうか。これからは質問は要旨をのべて、ごく簡単をお願いをしておきます。さて、

只今の御質問にお答えをいたします。仏教が、現世利益を説くということは、なにも歴史をさかのぼる必要はなく当然な話であります。だが、その利益をいかに主張するかにあるのであります。仏の教えは、われわれがいかに生くべきかを教えておりますから、現世の利益という点にもふれてはおりますが、生きて生きぬいた最後にくるものは、なんでしょう。それは生きるということを否定する死というものにぶつかるのであります。生きるということは、実は死ぬということであつたのです。毎日毎日、私どもは死というものに、ぶつかるべく生きて行くのであります。いくら怠け者でも、こればかりは怠けることが出来ない、死への行進であります。では、人間、死が最後かと問われますと、これまた実はそうでは毛頭ございません。死によつて、新しい命がひらけるのであります。すなわち往生の思想であります。つまり極樂に往生するという浄土門の教えが、そこに現われてくるのであります。これが先程講演の劈頭に申し上げました、仏教の極限ということなのでございます」

「講師質問！」

この時、聴衆の中から声がかかったので、多宝寺の住職は話を中断された。

「はい、なんででしょうか」

「今までうかがつたところでは、仏教は現世利益を説いてはいけなないと先生はいうのでありますが、この点だけを簡単にうかがいたいのであります」

どつと笑いが聴衆の中から起つた。質問を簡単にせよという、講師の答弁がちよつと長かつたので、皮肉に聴衆の方から簡単な答弁をと請求したのがおかしかつたのである。

「その点を今から申し上げようと思つておつたのでして、その往生が……」

「先生、簡単に願います」

誰かが野次つたので、またどつと笑いが起つた。講師たる多宝寺の住職は一寸渋い顔をしたが元氣につづけた。

「現世利益の是非を簡単に申しますならば、次のようにいえませう。すなわち、人間の欲望を是正するのが、仏の教えでありますから、その人間の欲望をますます發展させたり、人の欲望を利用するような説き方をするのでありますならば、それはすでに、仏教ではなくて邪教であるということができます」

「質問！ 質問！」

二、三人が一時に声をあげて多宝寺の住職を驚かせたが、ざわめきたつた書院一杯の大勢の空気を押さえるようにして、多宝寺の住職は一人の人を指さした。

「はい、あなたつ」

「はい。しかし先生、戦さをすれば、誰でも勝ちたいのが人情であり、病氣にかかれば早く治りたいのが誰しも願うところでありますから、そういうことを願つてはいけなさと教えることは到

底できないのではないかと思います。私の宗旨は、現世利益はすこしもありませんよといったならば、誰が宗旨を信ずるものがありましようか。失礼ですが、ここにおける御僧侶全部の顎の下がひあがつてしまうのではないかと考えます」

「はい、私も質問です」

多宝寺の和尚も矢つぎばやの質問に一寸くたびれたとみえて、すなおに次なる質問者を指さすのであった。

「現世利益の点については、もう多く論議されましたから、結論は各人が出すか、講師先生が結論なさるかは後程に願ひまして、私はこういうことを質問したいと思ひます。すなわち、ここ十二、三年来天変地夭がつづきまして、飢饉や疫病に、人びとは苦しんでおるのであります。この時にあたりまして皆様御僧侶方は、大伽藍にすまわれて、われわれ民衆とは失礼ながら、遠いところに生活されております」

質問の主旨が変わつたのと、直接自分達の生活のことをいい出したので、さあつとした緊張感が書院一杯にあふれて、僧俗ともに急に真面目な顔を一樣にしだした。質問者は言葉をつづけた。

てんやわんやの座談会

「質問をつづけます。まことに失礼ない分ではありませんが、皆様方御上人は大伽藍にすまわれてわれわれ民衆とはあまりにも、かけはなれておると思うのであります。ところが、皆様方が邪教だときめつける日蓮法師はどうでありましょうか、毎日のように大町小町の辻にたつて、説教をしております。民衆の不平を直接にきいてくれております。その説くところは、皆様方からいわせれば、邪教だ、邪宗だといわれますが、その態度は、一概に非難されるべきものではないと思うのでありますが、この点をお答え下さい」

これは、講師にとつては一寸、痛い質問であつたが、さすがは多宝寺の住職である。すこしもそのことは顔色にもみせなかつた。

「感謝いたします。只今のご質問は、まことに結構なご質問でした。只今のは、われわれに對するご注意として、充分に拝聴いたします。仏教には獅子身中の虫という言葉が、仁王經や蓮華面經等にみえております。それは、獅子が死んだ時には、さすがに百獸の王といわれる獅子であり

ますから、他の動物はこれをおそれまして、獅子を食うことをいたしません。ただし獅子の身中から虫を生じまして、このわが身の中にうまれた虫が、その獅子をたべるといのであります。仏の正法も、これを他からこわすことは出来ないものでありますが、法中の悪比丘がこれを破壊するということにたとえられておるのであります、まことに遺憾の極みであります。われわれは、この反省から出発して、その後には日蓮法師と対決すべきだと思ひます」

満堂を圧するような拍手が急に生じて、多宝寺の住職を驚かせた。多宝寺の住職は、自分の解答に氣をよくして、

「まだご質問がありますか」
とうながしたのである。

「はいご質問をいたします」
と調子にのつて、自分の方に御をつけていい出した奴がいたので、おもわず、書院内がわあっと笑いにゆれた。

「なんですか」

「日蓮法師がこの間、小町の辻でいったことを、私は直接きいたのですが、あの法師は、安心立国論とかいう」

「それは、立正安国論でしょう」

と、多宝寺の住職に注意され牡が、この質問者は、どうでもよいことだと、その注意は一向にとりあわず、質問をつづけた。

「その安心立国論で、法師は、本年の正月に大蒙古国の国書がきたことも、九か年も前に予言したというのでありますが、これは本当のことでしょうか。もし本当なら、生き仏だと私も思いますが、もし、嘘だったら、これこそ大嘘つきの悪坊主だと思うのです。この点はいかがでしょうか。それからもう一つ、本当に蒙古というような国があるのでしょうか。その国から、この国を攻めてくるというようなことがあるのでしょうか。ぜひ、ごゆつくりと、わかりやすく教えてください。いただきたいと思うのであります」

多宝寺の住職は、につこり笑いながら、質問に答えた。

「只今のお方は、安心立国論と申されましたが、これは立正安国論が本当であります。そんなことをいつていたんでは、あの宗旨の方から笑われますから、ぜひともおぼえておいて下さい。さて、立正安国論は、私もざあつと眼を通しましたが、その論文中には、蒙古が攻めてくるとはつきり書いてあるところは一か所もないのでありますから、その点のご安心下さい。したがって、九か年も前に、蒙古襲来を予言したなぞ、いうことは、絶対にありません。このことだけでもいい、日蓮法師が、気狂い坊主であるかがわかるではありませんか。蒙古という国があるのかというご質問ですが、あればこそ、本年の正月一日に、太宰府に国書をもってきたのであります。

この質問のお答えはこれでよいでありましょう。さて、その蒙古の国が、わが神国日本を攻めてくるかということですが、わが国の国体を少し研究しますれば、すぐわかることでありまして、これも問題にならないと思つのであります。この辺で、あなたのご質問のお答えは終了です」

「そんな、でたらめなことをいう坊主を、何故みなさんは、ほうっておくのですか、やつつけちやつたらいいではないですか」

と、怒つて立ちあがつた者が二、三人、座の中にとびだしたのである。ようやく、座談会の空気は、司会者の思うように動いてきたらしい。

「そうです。そのために、本日、この会議を開いたのであります」

多宝寺の住職は、すかさず、その場の空気をあおるのであった。

「そうだ、そうだ、やつつけろ、などと、騒ぐものがいたが、雷のような声がして

「日蓮の、それでは、どこをやつつけたらいいというんだ。わからないではないか」

急に、大入道のような坊主が、座の真中に立ちあかつて。四辺を睨みつけた。あまり威勢がよいのと、昂奮して、頭から煙のような湯気が出ておるので、おかしいやらおつかないやらで、座中は妙なふんいきになった。

「日蓮法師の流れをくむものが現世利益を説きすぎると、非難してみたところで、各宗とも現世利益は私の方が一手専売ですと、暮だ正月だと、その時期時期にでつかく騒ぎたてたり、とげぬ

き地藏だ、仙気のなんだのと、あげたててみりや、日蓮より、こっちの方が多くくらいではないか。だから、愚僧がここで、はつきりいつておくよ。日蓮の教義を悪いといつて教義の批判ということになれば、天台は真言を批判しなければならず、真言宗が浄土宗を非難すれば、浄土宗も真言宗を非難するだろう、禅宗は、それこそ、天台真言浄土これらは、味噌も糞も一緒だというだろう。この座中でさえ、念仏禅真言の僧侶は、それは、表面は口を謹んでおとなしくしておるが、腹の中では、各宗が各宗の坊主をみることに、日蓮坊主を見るようなものだと思うんだ。なんで、立派な相談が出来上るものか。先程、誰だったか、えらいことをいやがった。鎌倉の五山の貫長さんは、大伽藍にすんでいて、民衆とは離れたところにいらいらしやる、日蓮法師は、小町の辻で、民衆の悩みをきいてくれてるといったつけ。そうしたら、その解答がなんだつけ、只今のご質問は結構でした。感謝します。感謝しますだよ。きいたかい、なんて胸糞の悪い、偽善者の答弁だ。ききたくもない、獅子身中の虫の説明をして、そつちは、腹の虫がそれでおさまったかは知らないが、こつちは、獅子身中の虫あつかいで、大層ありがたいことだったよ。その反省から、出発して、日蓮法師と対決しますといつて、一座のご喝采は拍したが、一体、どういふ対決をするというのか、それを聞かせてもらいたい。向うは、それこそ、叡山に十年、伊豆の伊東には三か年という、文字通りの海千山千の大坊主だ。失礼だが、この調子で座談会をやつていたら、一か年かかったって終るもんじゃない。日蓮のいうことが本当なら、家古が攻めてくる

というのだ。蒙古が攻めてきたら、念仏も真言も浄土も宗旨の区別なんか、あるものか、みんな一緒になって国を護らねばなるまい。それなのに、私は大日様の方に行きますから、私は阿弥陀さまのところをまいりますから、いや、私は薬師さまのところに行きますから、お国の方は、後の方々に護っていただきます。なぞとのんきなことが、いつてられるものではないじゃないか。こうなれば、法論などは後まあした。各宗とも、この日本の国を、いかにして守るかということが、目下の急務ではないか。だが、もう少して、愚僧の話は終るからがまんしてきけ。いいか、ところがだよ、日蓮のいうところが偽だとしたら、どうなるか、蒙古など襲来してはこない。国難来は嘘だ。氣違いだ。氣違いでなければ、こんな重大なことを真面目な顔をして、往来で他人にしゃべれるものではない。さて。日蓮を氣違いだとすれば、その氣違いのいうことを真に受けて、この大仏殿にあつまつた奴等も、これまた、氣違いである。愚僧は氣違いの中に入れられて、今まで、がまんしてそのお説を拝聴していたが、日蓮を氣違いなりと断定したら、この大仏殿の書院にあつまつて、二刻あまりも、ご質問だ、ご解答だといっておつた、われわれが、氣違いだと氣がついたのである。こんな座には一刻もおろることができんから、只今、失礼する、御免！」

湯気をたてた大入道が、発狂したのではないかと思う程、どなりたてたので、一座はしんとしずまったが、話が終ると猛虎のような勢いで場外にとび出していったので、事なきはえたが、それから、この大仏殿の座談会の氣勢はあがらず、結局、大仏殿会議は、なにがなんだか分らずじ

まいで、決定することもなく、終わったのであった。

富士山埋経

聖人は北条時宗を始め、十一か所に手紙を出して、蒙古は必らず襲来する、早くその用意を物心両方面にせられよ、と忠告を発したが、聖人に、直接の返答はどこからもなかった。

かくて文永五年は過ぎて、文永六年、聖寿四十八歳を迎えたのである。

しかるに、文永六年の三月蒙古の使者、黒的、殷高の兩人は、対馬にきて、再び国書を提出したのである。鎌倉政府の意を熟知していた対馬の資国は、これをだんこ追い返してしまつたが、蒙古の国使は、手ぶらでは帰れないので、島民の搭一郎、弥二郎兩人を人質としてつれていつてしまつた。この人質はその年の九月に再びきた時に返してよこした。

事態がここまで進展すれば、蒙古の襲来は必然なのであるが、まだまだ鎌倉政府の当事者はこの時分には、軍備の方面でも、あわただしい動きはみえず、ただ、神社仏閣にこのようなことを報告して、御祈禱をたのむ程度であつた。

聖人はそのような鎌倉幕府のこそくな手段を不当として、十一か所に、立正安国論の正非を問

うたのであるが、卑怯にも表だつては一向に相手にならうとはしないのであつた。そして、鎌倉の大寺の住職達は平気で、蒙古退治の御祈祷を行つて、莫大な供養にあずかつていたのである。

蒙古襲来が、かえつて、鎌倉の僧侶達を依食せしめるといふ、奇怪な状態であつた。

文永五年の四月十三日には勅使が、伊勢の大廟に立つて蒙古難をつげた程であるから、その末社はいうに及ばず、すべての神社や寺院において蒙古難の御祈祷がつづけられたのである。聖人からみるならば、蒙古難によつてかえつて誇法の火手が、日本中に上つたようなものである。

かくならんことを恐れて、いずれが正法であるか、公の場所において、諸宗の僧侶と対決をしようとして、懇請の手紙やあるいはまた、挑戦の手紙を十一か所にもだしたのであつたが、陰においては聖人圧迫の手を弄しても、表面にたつて聖人をなじるものは一人もまだでないのである。

この日本の国土をあげて、全国民をあげて、法華経にそむく国になつてしまつた。

聖人の靈感よりするならば、蒙古の襲来は必然である。しかるに、この蒙古退治の一大秘法の法華経に誰人も耳をかそうとはしない。

今、一國累卵のあやうきにあるに、手をこまねいてみておれようか。

聖人は文永六年の六月十五日富士埋経を企てられたのであつた。

文永六年を去る百二十年前の久安五年に、僧末代が、如法書写の一切経を富士山に納めたが、大船若経だけが足りなかつたので、その六百巻を勸進して、あわせて富士山に納めたというの

が、富士山埋経の歴史に現われた最初である。聖人の埋経は、もちろん法華経一部八巻であるが、聖人以後に富士埋経のことをきかないから、富士の埋経は以上の未代と聖人だけということができる。

埋経ということは、一体どういうことを以下説明してみよう。

埋経とは、長く後世に伝えて、末代の人びとに利益を与えんがため、仏教の経文を書写して中に埋かることと、大言海にのせておるが、そればかりではなく、その土地を清浄にするとか、あるいはその土地なり、山なりに魂をいれるとかの意味もあるのである。塔をたててその下に経文をいれたり、あるいは仏舍利と称するものをいれるのである。奈良平安朝時代に寺を建立する時は、その本堂の建立予定中心地に埋経をすることは、往々あることである。これなどは、清浄にするという意味や入魂の意味があるのである。

今、聖人が富士山に埋経するという意味は、日本国に入魂するの意味に解するのである。「一切経に法華経のないことは、山海に玉のないようなもの、人に魂のないようなものである」と聖人はいわれておる。今、蒙古襲来を前にして、日本国中の神社仏閣をあげて勝法の社殿となり終った。諸天善神は、この誇法の国をすてさつて天上にのぼつてしまい、日本国は今からつぽの国であるというのが聖人の考え方である。このからつぽの国に法華経という魂をいれなければ、蒙古を退治することは出来ない。日本国が大事に至らなかつたのは、日蓮がひかえたればこそであ

ると、後年、聖人はいわれておる程である。

法華經法師品には「もしまた人あり、妙法華經の乃至一偈を受持し誦誦し解説し書寫し、この經卷に於いて敬いみること仏の如し（中略）合掌恭敬せば、藥王まさに知るべし 是の諸の人達はずでに、かつて十萬億仏を供養し、諸仏の所に於いて大願を成就し、衆生をあわれむが故に、此の人間に生ぜることを」とあつて、寫經の功德がとかれておる。

埋經とは寫經の結果であるから、寫經を語らずして埋經だけを語るのは、不都合と思つて、少しく紙數をもらいたい。印度、支那のことは省略して日本のみにするならば、わが国では文献の最も古いのは、天武天皇白鳳二年三月「此の月、書生をあつめ、始めて一切經を川原寺に寫す」というのだそうであるから、仏教渡來後百年あまりで、寫經をやる専門家すなわち經生が生まれただのである。当時の仏教の盛んなることを思えば當然といえるが、寺院や僧侶の數も増加したので、必要のせいとばかりいえない。寫經の功德によつて國家を鎮護し、あるいは祖先父母の菩提に資するといったことから出たのである。

當時いかに寫經がさかんであつたかは、昭和の御代になつてもその名残りがあつた。それは、暮になると、畳屋さんと一緒にお世話になる經師屋さんである。經師とは、この寫經所でかかれた經文を卷物などにつくることを業としたものを經師といふのである。ときどき今でも、街中で大經師とかいた看板をみることもあるが、大經師とは寫經所の經師の長の職をするものをいふのだ

から、大経師とかいた看板をみたら、相当な心臓屋だということがいえよう。今では経師屋といったり表具屋といったりするが、表具屋さんの仕事をみていたら、糊づけをのばす道具に、数珠状の玉でこすっていたのをみて、千数百年たつても変らぬものは、変らないと思つたことであつた。なお写経所と関連して今なお、日常生活と密接なものがある。それは、なにかというと洗湯である。洗湯のことの起りは、写経生や経師等が、仕事の前に、身を清めるために使用した浴室なのである。普通、洗湯の話ができれば光明皇后の話がでて、その風呂のことを天平風呂などと呼ぶが、光明皇后は経生や経師が専用していた浴室を改良開放して一般人、特に病人を入れたということから有名であるが、洗湯そのものの起源は、白鳳時代までもさかのぼることができる。だからこそ洗湯に湯殿といつたような敬称がつかわれておる。悪口をいうものは、お寺に湯殿があるのは、湯灌をするためだという人があるが、それは間違いである。湯灌というのは、今はやらないから、一寸説明の要があるが、仏教の葬式にさいして死者を棺におさめるにさきだつて、沐浴をさせるのをいう。今は、親族だけでアルコールでふいておる、あれが現代の湯灌だ。さて、その湯灌の風習は、物知り博士、日置先生の説によると、中国で行われるようになったのが宋代以後、わが国では鎌倉時代の末であるということ、徳川時代になると、キリスト教圧迫のために、死体検査と称して、菩提寺の住職に必ず立合わせしめたということである。だから以上の通り湯灌の風習は鎌倉時代の末ということだから、前述の湯殿とはまったく関係のないこ

とである。ついでに付記するが布施所というと無料宿泊所のこと、宿屋の起源もやはり寺院からでているのである。

写経師は光明皇后の天平時代に一番さかんであつて、最初の写経司は写経所となり、それが写経所と写疏所、写後経所の三か所に分れて、写経所は法華経と最勝王経だけを書写し、写疏所は註疏書のみを書写し、写後経所は三蔵経を書写するという程に分化した程であつた。この中で一番盛んであつたのは、もちろん写経所であつた。何故、法華経と最勝王経だけが専門で書写されたかという、法華経には通一仏土の思想があつて、このわれわれのすむ娑婆が、仏の世界寂光土となるのだという思想があるのである。この考えより、法華経を書写して、土中に埋めるのである。現在発掘された埋経のほとんどが、法華経といつてよいのは、この法華経の特質によるのである。阿弥陀経の写経を埋経したとしても、意味が成立しないのである。西方浄土の世界をえがいた阿弥陀経を、この娑婆世界に埋めてみても到底その意味が成立しない。よつて、阿弥陀経だけの埋経が発掘されたということはほとんどないのである。つぎに、最勝王経がえらばれた理由は、四天王が国家を鎮護するという誓願があるので特に写経されたと思える。

伝教大師が法華経六千部を書写して天下に分かたんと発願したのは有名な話である。伝教大師は法華経迹門による戒壇を理想とされ、その滅後弟子によつて実現されたが、戒壇の思想は、法華経の前述の通一仏土（神力品）の思想よりくるので、このわれわれのすむ娑婆世界を浄土すなわ

ち仏の世界にするのには戒壇が必要なのである。戒壇とはいずれゆつくりふれる時があるが簡単にいうならば、仏法の戒をたもつ場所をいうので、日蓮正宗でいうならば三大秘法の戒法をたもつことをいうのである。

伝教大師法華経六千部写経の願業も、その念願とした法華迹門の戒壇建立より考えれば、当然の結果といえるのである。

写経において、日時の長短の極端なのをあげると、後鳥羽上皇は一万三千三百十五僧を招じて、一切経を一日の中に写経せしめたといわれ、鎌倉時代には筑前宗像の良祐という僧侶は一切経を写すのに四十二年を要したといわれておる。これは前者とくらべると、経済力のない方の代表が、その信心によって、一切経を写したという見本である。良祐は仲間の西観と心昭とに、紙墨や銭を勧進させて、自分もつばら経を写し、勧進のためにはついに京都までも上り、良祐は旅行中には立ちながら、歩みながら船に乗りながら写したということで、そのことはその経の奥書きに書かれているということであるが、まことにどうもすばらしい写経で、良祐は二十九歳から始めて七十歳に至る間の四十二年写経をつづげたのである。この一切経は現在は筑前宗像郡田島村興聖寺に四千数百巻が現存されておるといふことである。

父親の三十三回忌に父親からいただいた手紙をすきかえして、これに写経したという孝心の現われの写経が、今なお相州金沢に残っているということである。

埋経する場所については、いろいろな場所があつて、山ばかりとは限つてはいない。小石に一字あるいは数字をかいて一経を書写してこれを海中にいれるということもある。

平家物語に「承安五年石の面に一切経を書いて船に入れて、いくらともなく沈められけり、さてこそこの島を経島と名づけられたり」とある。

平清盛は兵庫の築港にあつて、人びとに勧進して、石に一切経をかかせこれを沈めて築港の土台にしたという、信仰と実用との話がある。

では、何故、聖人は埋経の場所として富士山をえらんだのであろうか。

聖人は「日蓮は日本の人の魂なり」といわれておるが、富士山はまた日本人の魂であるということが出来よう。法華経は一切経の魂なり、南無妙法蓮華経は日蓮の魂なり、と聖人はいわれておる。日本国に魂をいれる場所を日本人の魂たる富士山に求め、日本人の魂たる聖人が、一切経の魂たる法華経を、書写して埋経したのである。まことに、見事なる埋経ではないか。

富士は万葉の昔から「日の本の大和の、国の鎮め」と山部の赤人はのべて

田子の浦ゆうち出でみれば真白にぞ

富士の高根に雪はふりける

とよんでおることは、あまりにも有名である。

今日一の富士登山のようないことが行われるようになったのゆゑ、ここ五、六十年のことであるとい

われておる。しかも、富士登山はあまりにも便利になってしまったので、今では富士山に登ったのは、登山のうちに入らないといわれておる。槍だ穂高だと騒いでおるのが今日のご時勢だ。静岡県の人にいわせると、富士山は日本一高い山だが、年寄りでも子供でも登れるようにしておりますといっておったから、これは無理もない話である。

しかし昔の登山といえば、地元民が生活の糧を得るために登ったろうが、それ以外は山頂をきわめる者は、ほとんど信仰をもった登山であった。故にその真否はなかなか立証しがたい人もあるが、伝説としては登山者として日本武尊、聖徳太子、役の小角、末代法師、空海、親鸞までもふくんでおるのである。

富士登山信仰の徹底さは、ついに天文年間に、富士講というものが出来て、ついには全国に講社が八百八講あり、徳川時代には江戸市中に十万人ぐらいの信徒があり、加持祈禱をかねて登拝したが、寛保より嘉永には数回禁止令がでたという程である。現在の富士教神道実行教、扶桑教会はこの富士講から分れたものである。

雲は山の肌から生まれるのかしら、みていると、むくむくと山肌から雲が湧きでてくるようにみえる。ここは、富士山の天地の境というところで、ここから上はいつも白雲がかかっておる方

が多いので、天上界、ここより下は山肌がみえておる時が多いので、地上界というのである。

今、聖人は、富士埋経にあたって、この天地の境という場所をえらばれたのである。

.....

(一説には、吉田口の六合目で御中道の出合点に、日蓮上人百日修業の地と称して、経ヶ岳の六角堂があるが、筆者はこれをとらない。それは、身延日蓮宗が、この六角堂をこしらえたからの説をとらないというのではない。この地点は、その名の示す通り、単に百日修業の場所であつて、埋経の場所ではないのである。そこで修業をなさつたのちに、埋経の地としては蒙古退治御祈念が埋経の目的であるので、その蒙古襲来の方角にあたる百日修業地の吉田口が、ほとんど真裏にあたる富士の南面の天地の境をその場所にえらばれたのであつた。ここは一名また、乳母が懐ともいって、富士山としては風雪の静かな場所であるから、埋経の地としてはまことに理想の地であつて、埋経を永代に伝うるにたる所でもある)

.....

埋経を手伝つた四、五人の衆は、仕事が終わつたので先に出発してしまい、今は聖人とお伴をした弟子の日興の二人が、埋経の地、乳母が懐に立つておられる。四辺は雲がおおっていた。

「お聖人さま。案内人は、今日は絶対に晴れますといいましたが、はずれたようでございます」

「よいではないか。埋経さえ終れば、この日蓮は満足だ。ありがたいことだった」

「でも、せっかく、ここまでできたのですから、上もみたいし、下もみとうございます。これでは富士山に埋経したと申しましたが、まったくの雲の中で、話にきく霊山浄土にでも参ったようでございます」

「日興つ、では、この日蓮が、雲を払って上も下もみせてやろうか」

「ええっ」

「驚くことはないぞ。南無妙法蓮華経と唱えればよいのだ」

「南無妙法蓮華経 南無妙法蓮華経」

「これこれ、立ちどまってはならぬ。あるきながら唱えなさい。おくれれば、先にでかけた連れの人びとが心配しよう」

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

聖人も日興も共々に唱題した。やがて、前方の雲の中からも、唱題が起った。先行した人びとに唱題の声を通じて唱え始めたのであろう。山にこだまする程の唱題となった。

題目の声につれて、雲はやがて霧となったが、霧となったかと思うと、不思議不思議、はつきりとわが脚下がみえ始め、あつと思う間にその脚下の地はみるみる広がって、上は青空に接する山頂につづいたかと思うと、下は眼をすいこむ程に下り下ってわずかな白雲をへだてて、駿河の

海がはつきりとみえ、たくましい姿の伊豆の半島が、その駿河の海につきでていた。静かな景観の中に、動いてみえるのは、富士川が海に入るあたりの白い波頭だけであった。

「お聖人さま御覧なさいまし、今埋経したあたりが、光っております」

雲を破った、強い夏の陽差しが、露をふくんだ、岩肌をなぜか金色に照りかえしていたのである。

日興は後年、富士一跡門徒存知事に「駿河国の富士山は広博の地なり（略）且つは日蓮大聖人の本願を祈る所なり」と述べておるが、筆者はこれを富士山埋経のこととみたいのである。

この年すなわち文永六年より、六百八十四年後の、昭和二十七年（開宗七百年）七月十八日のことであるが、大日蓮七十八号をここに引用しておきたい。

「海技二千五百米、富士表口五合目から「一天四海皆帰妙法」の第一声をあげた、大宝塔建立法要はさる七月十八日つつがなく厳修された。開宗七百年記念法要期間内であることと、法主自ら登山するという、日蓮正宗はじまって以来の大壮挙だけに、全国数十万の檀信徒から大きく期待されていたが、当日は折悪しく天候にめぐまれず、二合目バス終点からは時々襲うしゅう雨をついで登山した。

管長水谷日昇上人（七四寿）はじめ、宗務総監高野日深師、宗務役員、布教師、全国末寺住職代表等三十余名、全国檀信徒代表十余名、登山連合会理事、観光協会役員など五十余名が大型バ

スに分乗、三門を出発した。二合目でバスをおりた一行は、下駄ばきにコーモリ姿の御法主上人を先頭に登山、五合目についたのは午前十一時半であった。少憩の後、法主上人執筆のもとに心魂うちこむ「南無妙法蓮華経立正安国世界平和之宝塔」と大書された、宝塔に向って読経唱題、その昔、宗祖日蓮大聖人が、富士山を中心に世界に向って法華経の布教を行おうとして登山、経文を埋めて下山したと伝えられる古蹟、経が岳にその宝塔を打ちたてて一回下山した」

この時、筆者も随行して、その法味を等しくなめて感激したのであるが、その時五合目の室で、何故この辺を経が岳というかとの揭示を読んだのを覚えておる。

前述の乳母が懐といえる地から、大正の大震災の時に、土地がくずれて、法華経の埋経が、あらわれた。鑑定の結果、つくりや文字等は、鎌倉時代のものに相違なしとして、現在上野博物館に保管中とあった。この時五合目で、日蓮聖人と富士山という講演を筆者はしたが、生涯中、一番高いところでした演説であると思っている。

諸宗勝つか日蓮負けるか

鎌倉の極楽寺の住職良観の居間である。使者らしい若い僧と対談をしていた。

「日蓮坊の消息はどうじゃなあ」

良観が問うた。

「はい。檀家のものを使いまして、日蓮法師の一挙一動をしらべておりますから、ご安心下さいまし」

「さようか、それは頂上至極、近頃は どうしておるのか」

「はい、今は鎌倉におりません。なんでも、噂によりますと甲州か駿州におるとのことでございます」

「ときどき、鎌倉からいなくなる奴じゃなあ。寺一つもつておらん坊主だから、どこへでも、風しだいでは雲のごとく流れて行く奴じゃ。気ままなものよ。だが、日蓮法師が鎌倉におらん時は、例の宣伝をたのんだぞ」

「それはもう心得ております。日蓮法師はまことにふらちな坊主で、正式に当方より問答を申しこむと、急に鎌倉から姿をけしてどこかへいつてしまふ、とこうでございましょう。心得えたもので、それゆえ当方では、今、日蓮法師がなにを考え、なにを企らんでおるかは見通してござい
ます」

「それでよろしい。鎌倉に日蓮法師が帰ってきたなら、当方は、昨日より病氣といつておればいいのだ。して、今度は、なにをしに甲州にいったのであろうか」

「なんでも、富士山に登ったとかの話でございませう」

「ええつ、富士山につ。なにしに登ったのであろうか……」

「そこまではわかりません。まさか、遊山する程のものずきではありませんまい」

「日蓮法師のことだから、富士山の頂上にでも登つて、例の悪口を勢一杯どなりたてておるのであろう。あるいは、早く蒙古よ、日本に攻めてきてくれと、一大祈禱でもしておるかかわらん。

日蓮こそ、こつちからいえば、亡国坊主といたいところだ」

「御上人さま……」

と廊下に膝まずいて、所化が声をかけた。

「円覚寺から使者がまいりましてございます。みたことのない御坊ですが」

「よい。ここに通しなさい」

良観は、機嫌が大変によかった。

円覚寺の使者というのが、さつそくに良観の前に通された。

「拙僧は、突禪と申す雲水でございます。まことに、突然まいりました。円覚寺の御上人より、その話ならば、自分が良観上人に申し上げるより、貴公が極楽寺にいつて、直々に申し上げますのことで、本日、参上いたしましたものでございます」

「それは、ご苦労さま。話というのは……」

「はい。実は、拙僧は、昨日京都よりこの鎌倉に所用かおりましてまいったものでございます。

例の日蓮法師に関する噂が京都にもございますので、それを何かのご参考にもなろうと、御上人さまに申し上げたく参りました」

「それはまた、結構なお話で……」ここにおる方は念仏の方の御僧侶だが、やはり、日蓮坊主についての消息を、今もってきてくれたところじゃ、だからご安心あつてお話し下されたほうがよい。貴僧がここでご報告して下されば、それはそつくり、念仏宗の方にも伝わるからちようど便利がよい。この使者の話では、日蓮法師は、今鎌倉におらんというから遠慮なく、大声でお話しなさい。これは冗談だがなあ……」

良観の言葉に、突禪も、につこりしながら、報告するのだった。

「実は、日蓮法師が自分の弟子をつかいますて京都に上らせ、公卿たちに接近しようと運動して

おることばでございます」

「ええつ、そりや、本当か……」

良観の顔色が変わった。

「本当でございますればこそ。円覚寺の御上人が、拙僧に良観上人を尋ねて、詳細申し上げてこいとのことなのでございます」

「ううむ。そりや一大事だ、聴こう。お話し下されい、早く」

良観は、もう一人の使者と顔を見合せて、突禪の顔をみるのだった。

突禪は、自分の言葉の効果のあつたことに満足して、突然どころか必然だぞというような顔をするのであつた。

「日蓮法師の弟子の中に、三位房日行というのがございまして、これが京都に上つて、蒙古襲来を師匠ゆずりにわめきたてて、これを調伏する法は、日蓮の法華経でなければならんと、京都中にながりたてたのであります。それは、ち太うど、本年（文永六年）の春頃でございました。この三位房日行という奴は、えらばれて京に上る程の人物ゆえ、なかなか上手にとびまわりまして、言葉なども、何時の間にか、関東の田舎なまりをごまかして、京の言葉を巧みにまねるといふ程の人物でございます。田舎法師が京法師をまねた齒の浮くような人物でございますが、どういふ関係をたよつてか、とうとう関白鷹司基忠さまの持仏堂において、説教をするところま

で、こぎつけてしまったのですから、京中での大評判でございます」

「日行とかいう日蓮坊主の弟子が、関白の屋敷において説教をしたというのか。本当か……まこととは思えないなあ」

「本当でございますとも、説教をした三位房日行もなかなか得意に思い、慢心をいたしました。日行という、自分の師匠たる日蓮法師からもらった日号を、尊成と改名したと申します。ところが、近頃は尊成という名を廃しまして、またまた日行と名乗るので、どういう訳かと調査いたしましたところ、師匠の日蓮坊から、尊成とは、もつたいなくも隠岐島で亡じられたる後鳥羽天皇の実名ではないかと、きつく怒られたということでございます」

「田舎法師が、京に上って、関白の持仏堂で説法したとあつては、そのくらいの慢心は無理もあるまい。して、そこで、どんな説法をしたか、さぐつてみたか……」

「さればでございます。それが、その、某方面からもれ聞いたのでござとますが、いやはや飛んでもない説法をしております」

「日蓮法師の弟子じゃから、無論そうであろうが、どんな話だ」

良観は、突禅に話をさいそくした。

「日蓮坊主は、鎌倉の諸大寺の大徳が、去年の末の彼の公場対決の手紙を黙殺されましたので、気でも狂ったのでございませうか。立正安国論を鎌倉幕府に提出した時には天台沙門日蓮とし

て奏状をささげておるようですが、最近では、その天台宗の悪口を弟子にいわせておるようでございます。すなわち蒙古の国が攻めてくるのは、叡山が誇法になったからだと申しておるそうでございます。叡山の誇法とは、もちろん六年前のあの出来事をさすのでしようから、叡山としては日蓮法師に對しましてはそれこそ、ぐうの音もでぬことでございます。」

突禪は良觀の顔をそつと、みながらいうのである。六年前のあの出来事というのを少し詳細に述べると、これは聖人が、御輿振御書という御書に一寸のべておることであるが、叡山の僧侶が道念も信念もない事実をはつきりと示した、前代未聞の話である。

文永元年の三月二十日、叡山の僧侶たちは自分の手で火をつけて叡山の戒壇院、大講堂、法華堂、常行堂を焼いてしまった。もちろん、諸堂宇の仏さまも焼いてしまったのである。先年、叡山の大講堂が小僧の放火で焼失して、金閣寺の焼失とともに、昭和の人びとをおとろかせたが、歴史上からみれば先輩はもつと派手なことをやっておるのだから、大講堂の放火小僧をせめるわけにはゆかないのである。さればこそ、この放火小僧には全山をあげての滅刑運動が起きておるということだから、歴史に照らしてみても、まことに当然な話だと思っておる。

さて余談はさておいて、坊主が、自分の寺に自ら放火しようとは、昭和の人には、その非常識さは理解できぬが、僧兵の歴史で焼きつ焼かれつするのは、日常茶飯事である。それでも、自分から自分の寺を焼くのはその例はたびたびないが、絶無ではないのである。鎌倉時代には、四天

王寺の僧覚順等は本寺を焼かんとして九十余人誅せらるるか、園城寺の僧達は、自分の寺に戒壇建立が不許可となつたのを恨んで、自分の寺の書院、経藏を焼いたのが、聖人が、安国論を提出した年の文応元年の前年である。

さて、文永元年の叡山の自分達での焼討ちというのは、天王寺の貫主を叡山の方から、上に願いでたのに対して、勅裁がながびいたというのが理由なのである。ここで面白いことが起つた。叡山の僧侶は叡山の諸堂宇を全部自分の手で焼いてしまつたのだから、これは、お寺も仏様もいらないという理屈だ。喜んだのは、日頃の敵たる園城寺側であつた。叡山で戒壇堂を焼いてしまつたのだから、園城寺が、戒壇堂をこしらへたつて文句のつけようがない筈である。叡山と園城寺の仲の悪い原因は、園城寺に戒壇堂をこしらへようとするのを、叡山に戒壇堂があるから、許可しては困るというのが、長年の競いの種なのである。ところが今度は、叡山の戒壇堂が焼けたのであるから、早く既定事実をつくつてしまへと考え、四月二十九日、私設の戒壇堂をこしらへて、権僧正仙朝を授戒の師として、授戒を行つてしまつたのである。

これを風聞した叡山の僧侶は、かんかんに怒つて、お上には仙朝を流罪にせよと強訴するとともに、五月二日には、叡山の大家は大挙して園城寺に押し寄せて、新たに建立したる戒壇堂はもちろんのこと、金堂以下の堂塔房舎をことごとく焼払つてしまい、重宝の梵鐘を戦利品として叡山に持ち帰つてしまつた。この時の焼討ちは、前代未聞で、三日間に渡つて焼き討ちが続き、大

津東西の浦はすべて灰燼に帰したという。戦利品の梵鐘は、鎌倉幕府の命令で、六波羅が取り戻して、園城寺に返してやった。文永四年四月二十八日まで、叡山にあったのである。聖人はこの暴挙を批評して「あるいは、生身の本尊たる大講堂の教主釈尊を焼き払い、あるいは生身の弥勒菩薩（園城寺金堂の御本尊をさす）をほろぼす。進んでは教主釈尊の怨敵となり、しりぞいては、当来出世をあやまたんと狂い候か、この大罪は経論に「いまだとかれず」といわれておる。以上の愚挙は叡山の衆衆にもその後、気になったとみえて、七月二十三日に至り叡山三塔の衆徒が法華経百部を手写して懺悔したといわれておる。

突禪はなおも言葉をつづける。

「叡山の大罪は、叡山三千人の失にあらず、公家武家の失たるべしというのが、彼の日蓮の所論でございます。よって、公卿の筆頭職たる閑白にむかつて、その弟千日行を使つていわせたと申します。日本中、上下万人一人もなく謗法となつたので、大梵天王、帝釈、並びに天照太神等が、隣国の聖人に仰せつけて、誇法を戒めんために蒙古が攻めてくるのである。その例は、支那、朝鮮の両国も、禅宗念仏宗になつたが故に蒙古に攻めほろぼされたのである。国をたすけ家を思わん人びとは、南都の旧宗たる、華嚴、法相、三論、律はもちろんのこと、真言、浄土、禅等を一切禁止し、特に禅宗、念仏宗の寺々はことごとくこれをとりこわし、その僧達を獄屋にいましてしまい、焼けた叡山の大講堂をさつそくに建設して、靈山の釈迦牟尼仏の御魂をいれる

御本尊をつくらねばならない。ことしななければ、日本国守護の八百万神も、日本国に帰ってきてこの国を守護することもなく、諸仏諸菩薩も、この日本の国をすてさるでありましょう。というのが、日行が日蓮法師にしこまれて、閑白の持仏堂において行つた説教の大意でございます」

突禪も、あまりの長談義に、思わず額の汗を手の甲でぬぐうのであつた。

良観は突禪の語り終わるのを待って、落着いていつた。

「なる程、日蓮法師のいうごとく、京都の仏法はまったく乱れておる。仏教の統領たる叡山の衆衆が、自らわが寺に火を放つて、寺を仏を焼くということは、とりも直さず仏法滅罪の証拠である。しかも、この文永に入つてよりの五、六年、京、奈良においては、僧侶は何をしておるか。仏法の利生を離れて日夜鬭争にあけくれしておる。二つ三つあげてみれば、叡山の衆徒が、わが非を悔いず、三日間に渡つて園城寺を焼き払うだのはつい四、五年前のこと、その後も、一向にその暴力行為をやめることなく、本年（文永六年）の正月十日には、御興を奉じて京に乱入し、六波羅の兵がこれをふせぐという騒動、しかも叡山の僧達の勝手さといえ、その常々かついでは京に乱入する御興を、去年は日吉三社におしかけて、ぶっこわしたり、血をぬつてその御興をけがすということをした。

いやはや、日蓮法師ならずとも、叡山謗法をいうかも分らない。その外正伝寺のぶちこわし、北野神社の閉鎖等々いったらきりなしじや。興福寺や多武峰の連中も、叡山ばかりに暴力行為を

任せておけぬと、神木をもち出して騒ぐやら、多武峰の連中は、御神体の鎌足の木像をかつぎだして奈良から京に入り、関白の屋敷に強訴を企てておるといふ醜態である。文永に入つての、この五、六年の京、奈良の寺々の僧侶のこの暴力沙汰は、日蓮法師がいうがごとく、誇法の証拠かもしれないと、この良観も内心は秘かに憂いておるのである。だが、しかし、以上は京都、奈良のことであつて、この鎌倉とは関係がない。仏の御利生は、京、奈良を離れてこの鎌倉にあると断じることが出来る。なぜならばだ。今この鎌倉には、建長寺、円覚寺、寿福寺、浄光明寺、多宝寺、長樂寺、大仏殿、拙僧の極樂寺の別当、住職はまことに、和合僧の範を示して互いに水魚の思いをなし、お上よりの御祈禱の御依頼にはこの七大寺の和尚をはじめ、その末までがみんな一致協力をしておる現状、京、奈良の僧達が、互いの寺を焼いたり焼かれたりの騒動とは話が違ふ……実はなあ、突禅殿……」

良観は、息をのむと、突禅の顔をにっこり微笑してみながら

「今、えらいことをやっておるのだ」

「えらいことと申しますと、一体、いかなることとございませうか」

突禅が不思議そうな顔をしてきいた。

「実は、執権職北条時宗殿は、弘長元年に秋田城介義景の息女を御内室とされた。しかるに彼の堀内殿が、八年ぶりで昨年御懐胎あそばされたのである。なんとかして男子御出産をといて、お

上の御願いも、もつともなことで、これが昨年暮である。この御祈禱の大將格は、園城寺の長史をわざわざやめて、再び若宮八幡宮の別当職となられた、大僧正隆辨上人である。隆辨大僧正の御祈禱が、今まで、かなわなかったということはかつてないこと、われら七大寺の住職連も、隆辨上人の御祈禱を助けて大衆を列座さすこと七八百人という豪勢さで、近頃になく大祈禱をつい最近も行い、これで、変成男子の大々祈禱を三、四回も行つておる。この祈禱の大きかりは、さすが、日蓮法師の方にももれたとみえて、彼は門下の弟子壇那に「法華経をもて祈らん祈りこそ、真の祈りである。華嚴、法相、三論、真言、天台等の祈らん祈りは、これも仏説のこととて、唯一応の祈りとこそはなれ、終にその効あるべきものではない」と断言したとあるから、見事、こちらの戦法にひつかかつたも同然で、その高言は、この四、五日でわかるところなのだ。今度の祈りは、単に隆辨上人一人の御祈禱ではなく、日蓮のいうがごとく、華嚴、法相、三論、真言、天台ばかりではなく、律宗も禅宗も念仏宗も加えた未曾有の変成男子の大祈禱である。さよって、今この鎌倉では、諸宗が勝つか、日蓮が勝つかと、街々で評判しておるとかいう話であるが、今きけば、日蓮は鎌倉におらず、甲州とか駿州とかにいつておるといふから、この勝敗で恥をさらすのを恐れて、早くも逃げを打つたのかもわからんぞ。まあまああの日蓮法師の高慢な鼻見事打ちくたくはもはや時機の問題だ。こうやつておるうちにも、勝利のしらせがくるかもわからん」

「申し上げます。申し上げます」

この時、あわたましい足音が廊下にした。良観は突禅ともう一人の使者の僧の顔を交々みながら、満足そうにいうのであった。

「おそらく変成男子御祈禱成就の吉報であろう。ともにきこうではないか。はははは……」

良観は、おだやかな笑い声を立てるのだった。

「申し上げます。只今、使いが参りました」

廊下から、所化が良観に底頭しながら告げた。

「で、どうした。祈願成就であろうなあ。日蓮法師がさぞ、がっかりすることであろう。早くいえ、いえ」

「それが……その」

所化は、良観の機嫌をそんずることを恐れて、一寸口もつた。

「なぜいわぬ。この御兩人にも、吉報をきかせてやってくれ。母子とも御健全か」

「はい、母子とも御健勝の由にございます」

「それはよかった。めでたい。めでたい」

「ではございますが、御姫様御誕生でございました」

「馬鹿もの、さがれさがれ。なぜ、それを早くいわぬのじゃ」

鎌倉中で一番おとなしいと評判された良観も、修行には限度がある。思わず、人まえも構わずど鳴らずにはおれなかった。

諸宗が負けて、日蓮が勝ったのである。

蒙古第二回目の国書到来

文永六年の六月良観を背景として、鎌倉五山の僧侶がこれを援護した変成男子の御祈禱はみごとくに失敗して、その看板にされた隆辨僧正は、面目をつぶしてしまった。これが原因であったかどうかはわからないが、その後隆辨僧正は、鎌倉八幡宮の別当をやめて、再び京都に帰ってしまつておる。変成男子の御祈禱がかなつて、執権職北条時宗に男子が出生しておつたならばそれこそ、諸宗が勝つて、日蓮が負けたと鎌倉中に評判させて、聖人圧迫の手はこの年の中に実行されたであろうが、事實はそうはいかなかったのである。

しかも、この年には蒙古の使者が、一年の中に二回もきておるのだから、聖人の立正安国論の予言の中がいよいよ現実となつてきておるので、諸宗側の聖人に対しての圧迫は、文永六年は変成男子の御祈禱で終つて、これ以上の圧迫は手段がなかつたのである。この勝負は、知るのとは寺方だけであつたから、諸宗の負けたことは鎌倉の評判にはならずじまいだったのは、まあまあ念禪真言律宗等にとつては、幸いであつたらう。

さて文永六年には、蒙古の使者が二回きたと前述したが、第一回は、文永六年の三月対島にきたことを指す。この時は文永五年の正月に、太宰府に提出した国書の返事をせまつたのである。第二回目の使者は、黒的、殷弘を長として、文永五年の十一月に高麗に到着し、十二月対島に向つたのである。

使節の一行は、蒙古の使節八人、高麗の使節四人、従者七十余人の堂々たる使節である。三月七日太宰府守護所から、京都の六波羅探題に、この使者一行の対島来島が伝えられた。四月二十六日に、京都においては御所で評議が開かれたが、その時は返書を送ることとなつたが、結果は鎌倉幕府の意見に左右されて返書は出さないことに決定したのであつた。

この時、対馬の島民は、蒙古の使節に対して、なかなか鼻息があらく、使節の上陸をこぼんだと伝えられておる。

使節の一行は、国書の返書もえられず島民からも歓迎されなかつたので、非常に憤慨して帰つたが、その時に、島民の塔次郎と弥次郎と称する者二人を捕虜にして帰つたのである。

この二人の対馬の島民は、彼の地にゆくと、大変に優遇されたといわれておる。蒙古王、コツピツレツもこの兩人をみて大いに喜んだ。生きておる日本人をみて、始めて日本というものをみたと感じたのである。国書をやつても、返書もよこさない国からの捕虜なので、大変に興味を持ち、拝顔も許した。搭次郎、弥次郎の兩人も、その好遇に喜び、万寿山の玉殿や諸城を案内さ

れたが、「臣等、天堂仏刹あるをきく、正に是を謂うや」と、昭和戦後の代議士が、中京を視察した時のような賛辞を放ったといわれておる。

文永六年の七月に、蒙古王コツピッツは歓待した対馬の島民二人を、ウルダイという者に命じて返還を決定した。蒙古の使者ウルダイは、蒙古の中書省の国書を持って、高麗のキンイウセイ、コウヂユウ等の二人の使節を従えて、九月十七日に、再び対馬の伊奈浦に到来したのである。これで、蒙古は三度使節を日本に向けて出し、二度目の国書を日本にもたらしたわけである。

九月二十四日に、太宰府の守護所から、蒙古と高麗のもたらした国書を、京都の太政官に申し上げた。朝廷では、さっそく評議をひらいて、菅原長成をして返書をつくらせたのである。

その返書を国民の日本史から引用してみる。

「日本はこれまで支那と交通してきたが、蒙古の名は一向きかぬし、どこにある国か知らぬ。それで、日本は蒙古に対して、何等好悪の感情を抱いておらぬ。しかるに、好を通じないと、干戈に訴えようとは何故か。由来日本は神国と称せられて、神の威霊によつて、従来国辱を一度も受けなかつた。知慧や力では日本に打ち勝つことが出来ないのである。ついてはそれらのことを篤と考えるがよろしい」云々。

第二回目の国書は、第一回の国書よりは穏当であつたらしいといわれておるが、第二回目の蒙

古の国書に対する、わが方の返事はなかなか相当なものであることが、その語調でうかがうことができよう。

ところが、この菅原長成の返書は、朝廷から幕府に下されたが、幕府では、断然返書を送るの要なしと、決意をかためておつたので、この菅原長成の返書はついににぎりつぶされてしまい、第三回の蒙古の使者に対しても、何の返答も与えなかつたのである。

ついでであるからこの顛末を記述しておくが、蒙古は第三回の使節に対しても日本が国書の返書を与えないので、これを残念に思い、文永六年の十二月に、チヨウリヨウヒツを使として、再び日不に向かわしめた。返書のこないのは中間において、高麗が細工でもするものと思つたのか、蒙古の使者が必ず日本に到着するため、クリンチ以下の大将をして海軍の軍勢を引卒せしめて、金州等に軍兵を駐屯せしめて高麗を威嚇したのである。

チヨウリヨウヒツの一行は、文永八年の正月に高麗に到着し、わが国に到着したのは、聖人の竜の口の難の一週間後の九月十九日であつたのも不思議である。北条時宗は、蒙古襲来を文応元年より唱えておつた聖人を、十二年目に世を騒がすものとし七、文永八年の九月十二日に、斬首の刑に処そうとしたのであるが、聖人の首はきれず、次の日の九月十三日附で、蒙古人襲来すべき由の御教書を発しておるといふ、あわてたまねをしておるのである。これは後日詳細にのべる機会があるので、今は略す。

さて、聖人は一年の中に、三月と九月と、二度も蒙古の使節がくるといふ、事態は急なりと感ぜられて、この文永六年の十一月に、再び、先年のごとく、鎌倉の寺々に、書をいたして公場の対決をせまったが、多少の返事はあつても、正式に応ずるものとはなかつたのである。

すなわち十一月に

「今年十一月の頃、方々へ申して候へば、少々返事ある方も候、をほかた人の心もやわらぎて、さもやと覺したりげに候。(略)これほどのひがごと申して候へば、流死の二罪の内は一定と存ぜしが、いままでなにと申す事も候はぬは、不思議におぼえ候」(全集九九九ページ)

と太田金吾殿に書をあたえておるのである。

文永五年の第一回の蒙古の使節がきた年には、四月五日に安国論御勘由來を書かれたが、第二回、第三回と蒙古の使節が一年に二回もきた年の文永六年の十二月八日には、左記のごとく、聖人みずから、「立正安国論」に奥書きをされたのである。

「文応元年之を勘う。正嘉より之を始め文応元年勘えおわんぬ。

去ぬる正嘉元年八月二十三日戌亥の刻の大地震をみて之を勘う。その後文応元年七月十六日を以て、宿屋の禅門について故最明寺入道殿に奉れり。その後文永元年七月五日大明星の時、いよ此の災の根源を知る。文応元年より文永五年後の正月十八日に至る迄、九か年を経て、西方大蒙古国より我が朝を襲うべきの由、牒状之を渡す。又同じき六年重ねて牒状之を渡す。既に勘

文之に叶う。之に准じて之を思うに、未来も亦然るべきか、此の書は徴しある文也。是偏へに日蓮の力に非ず法華經の真文の感応の至す所なるか。

文永六年十二月八日之を写す」（全集三三三ページ）

まことに一読してわれわれとしては、襟を正さずにおれない。しかるに小倉某が、

「安国論は平凡である。決して元寇を先見し、これを予言したものではない。法華採用をもとめんがためにつくつたものである。しかるに、文永五年に至り、突然蒙古のことの起つたのは日蓮の空言空論が偶々的中したのである。（空言空論と罵倒するなら的中も言わない方がよい。筆者注）日蓮はこれをもって大いに自負し、安国論は実にこの事件を先見し、安国の衷情に出たものであると称して、北条時宗以下幕府の老臣、建長寺道隆等僧侶に書を送って吹聴した。日蓮はこれによつて、未だ萌さないのに、元寇を先見したと言う。これは安国論を上つた時の精神ではないのである。何となれば、日蓮の安国論を上つた時から、蒙古来襲までは九か年をへだてている。その間、日蓮は一言もこれに言及したことがない。国家目前の大患を知るならば、なんで再三再四諫争しないのであるか、知るべし、日蓮に先見の明なきを。愛国濟度の心がなきことを」といつておるが、いろいろな見方もあるものだと思う。参考にかかげておくが、こういう人が、今でもいるのだから、われわれは聖人を讃仰すると共に、大いに折伏の精神を忘れてはならないのである。

聖人は、念、禪、真言、律その他諸宗を徹底的に批判し去つて、成仏の道に非ずというのだから、われわれは、聖人に対する諸宗の批難悪口を十分覚悟はしておかなければならない。ただし気にすることはないが、なかなか面白いとおうか、よくも、こんなことをいえたものだと思うような非難が最近あつたから一寸紹介しておこう。

本年の七月十一日付の中外日報に、渡辺照宏という人が書いておる。

「身延における日蓮のように、一方的な仕送りで食べさせてもらつていたことを、仏教者として、または一般の宗教家として、理想的な生活態度と思ひますか云々」いや、はや、聖人の罵倒にもいろいろあるが、これが、どこかの大学の先生とかの質問だから、信心のない人はおそろしい。今日本には宗教家も沢山いるし、宗教学者も大勢いるが、みんなに信心をしろという、理屈の本をかいておるだけで、自分は一向信心なんかしていないのだからこまる。特に学者という人にてんで信心がない。信心がなくて学問があるんだから、とても始末が悪い。「解あつて信なければ慢を生ず」ともいわれておる。

「衆生の根に利あり、鈍あり。鈍なる者は、信根あり、利なる者は智根あり。信根ある者は人を識りて法を知らず、智根ある者は法を識つて人を知らず」云々とあるが、聖人にとっては信は慧の因すなわち以信代慧であることを忘れてはならない。

雨の祈りの争い

一

文永八年の三月、桜がちつて、これから鎌倉にとっては、最もよい時候がこようとする時なのに、この年はそうはいかなかった。

一滴の雨もふらずに、三、四、五と三か月すぎてしまったのである。三、四月は、お天気で結構です。よい日が続きますで過したのだが、五月の田植えが近ずいてきたのに雨がふらないは大変である。あるところでは、苗代の水がないという騒ぎがでた所さえあった。陽でりに飢饉なしとはいいが、鎌倉の街はそうはいかなかった。

六月頃になると、呑み水にこと欠くようになってきた。井戸水はそこをついて、塩からなくなってきた、呑み水の用をなさなくなるといふ仕末であった。たよりになるのは、谷のところどころからでておる清水だけということになってしまったのである。朝と晩には、鎌倉中の堀の清水に

人が群集して、のみ水を汲むという騒ぎが起っていた。こうなると、谷毎やうに水を汲む人員をきめて、外の谷の人には水を汲ませないという騒ぎで、ところどころに喧嘩けんかが起きるといふ仕末であつた。

ところが、鎌倉にしか所だけ、喧嘩も起きず、一日中賑やかに水を汲んでおるところがあつた。それは、極楽寺の境内であつた。極楽寺の境内にも出水があつたが、こんこんと良い水がたんと出て、ひでりを知らない程であつた。

極楽寺の所化の秀観は、今朝も早くから、庭掃除に余念のないような恰好である。ときどき山門の方に眼をやつては、箒をつかっている。大勢だつた水汲みの連中が一寸とだえたひと時である。「きた、きた」秀観の好きな女の子が、水を汲みにきたのである。日照りがつづくようになつて、誰だつたか、三、四人の人が水をもらいにきたが、次の日から数えきれない程の人になり、それが四月五月とつづき、六月に入ると、もはや、水をもらう方が当然のように境内に列をつくるようになったのである。ずいぶんと遠方から水をもらいにくる人もあつたが、秀観が「きたきた」と心に叫んだ女の子も、ずいぶん遠方からくるらしいのである。一度どこにすんでおるかきいてみたかつたが、顔を見ると反対に口が動かなくなつて、まだ、どこから、水を汲みにくるのかは知らないのである。

娘は、天秤に水桶をかつぎ、秀観の側を通つて出水の方についてしまった。

「帰りにきいてみよう」

秀観は決心しながら、箒の柄をぐつとにぎりしめて、崖のネムの樹の花をなやましげにみるのだった。

やがて娘は水を汲んで返ってきた。

秀観の前を通る時、一寸会釈をしたので、水が桶からゆすれてこぼれた。

「水がこぼれます」

「大丈夫ですよ。こぼれた方がいいのよ」

「だって、せつかく、汲んだ水でしょう」

秀観が娘にいった。

「また、もらいに来たらいいでしょう。外の谷だと、一日に一度しか汲めないけど、極楽寺の秀観さんは、そんなけちなこといわないわ」

「ええつ、拙僧の名を、なぜ知ってるのだ」

「知ってますとも、御勉強もよく出来ることも、御師匠様から可愛いがられていることもそれか
らと」

「誰からきいたのだ」

「誰からだっていいでしょう、私はなんでも知ってますよ。そしてねえ、日照りがいつまでも続

けばよいと思ってるのよ」

「驚いたことをいうものだ。鎌倉中の人達が、毎日天を眺めて雨を祈ってるのに」

「雨がふらないから、極楽寺に公然と入ることができるんでしょう。あつ誰か、水もらいにきたわ。また、あした」

次の次の朝、相変わらざうらめしい程に今日も天気がよい。どんな約束が出来たのか、極楽寺の本堂の裏で秀観と女の子が話をしていた。秀観は軒下の小岩に腰掛けて、水汲桶の天秤棒にこれも腰掛けた女の子と話しているのである。

「何時までも、極楽寺に水を汲みにくるわけにはいかないよ」

「どうしてさ、この分じゃまだまだ雨はふりっこないわよ。やっと、思いがかなって、秀観さんと話ができるようになったんだもの。当分雨が降らない方が、私にはいいわ」

「ところが、そうはいかないよ。うちの御上人さまが、雨をふらしちまうから」

「まさか、そんな馬鹿なことが」

「と思うだろう。ところがだ、うちの御上人さまは雨ふらしの専門家だよ」

「本当かしら……」

「本当だとも、嘘なんかいうもんか、もうかれこれ十七、八回ぐらい雨を降らしているんだから、大変なものさ」

「どうしてそんな不思議なことができるのかしら、本当に不思議だわ」

娘が臂をどんとついたので、天秤の両端から水が、ぼしゃんとはね上った。

「ほうら、水がこぼれたよ」

「なにさ、もつたいないが、こんな水、みんなこぼれた方がよいのよ」

「どうしてさ……」

「こぼれたらまた汲むのよ。ねえ、汲んでしまえば用がなくなるのだから、私には桶がいつも空の方がいいの、ゝその方が秀観さんとお話ができるでしょう。ねえつ、ちようど私は日照りがつづけば、続く程いいのと同じよ」

「驚いた娘さんだ。だがね、今日は幾日だったっけ」

「今日とは、昨夜みたお月さんが半分だったから、たしか八日じゃないかしら」

「すると、あんたが、ここに水を汲みにくるのは、あと十日ぐらいしかないな」

「どうしてさっ」

「ほうら、臂を上げると、また水がこぼれるぞ」

「桶が空になった方がいいといったじゃないのよ」

娘は、わざと、うんと臂を上げて、天秤の上にごしんと腰を落としたが、あまりはげしかったので、平均を失って、天秤と共にひっくり返ってしまった。二つの桶の水は一瞬にして乾ききつ

た地面がすってしまった。

「ほうら、お望み通り桶が空になったよ」

「ああ痛かった。ひとがひつくりかえったのに、笑ってるのね。ひどいひと……」

「仏のさばきかもわからんぞ」

「冗談はやめてよ……」

娘は、ぬれた土の上に、気持ちよきそうに足をのばすと、臀をすえてしゃべりだした。

「何故あと十日位しか、ここにこれないというの、本当……」

「十六日から、うちの御上人さまが、いよいよ雨をふらせる御祈禱をするんだよ」

「どい……」

「靈仙が崎の池で……」

「へえつ、本当にふるの……」

「ふるさ、一昨年、うちの御上人が江之島で雨を祈ったが、たちまちふつたのを知らないんだな

あ……」

「知るもんか……」

「極楽寺の出水ばかりありがたがらないで、少しはうちの御上人さまをありがたがらなけりやも
つたいないよ」

「でも、どうしてそんな不思議なことが出来るんでしょうねえ、不思議ねえ」

「修行の功さ」

「どんな修行をするの」

「いろいろあるさ、そもそも、うちの御上人さま、極楽寺の忍住房良観上人は、寺院を結界すること七十九所、寺の修繕が八十三所、仏塔建立二十、大蔵経をおさめること十四蔵、橋をかけること百八十九所、水田を寄進すること二十二所百八十町、道路の修理七十一所、井戸をほること三十三所、殺生禁断六十三所、浴室、療病所をおくこと五所、仏像を配付すること千三百余、戒経三千三百余巻、布衣を施すこと三万三千反といった徳行の誇れも高く、今鎌倉では地藏尊がカラダ山よりおいでになったのか、迦葉尊者の生れかわりかといわれる程の戒行の高いお方……」

「何がなんか所、どこがなんか所、嘘がなんか所……とはいわないが、どこからそんな莫大なお金ができるのよ。それにしても秀観さんもよく覚えたわ。ここにいる人は、みんなそれを覚えさせられるでしょう」

「そんなことがあるものか」

秀観は怒ったような口調でいうと、

「自分のお師匠さまがえらい人だと思えば、師匠の徳行なぞひとりでおぼえてしまうぞ、つまらんことをいってはならぬ」

「おそれいりました」

娘はおどけて、水をすいこんで黒くなったところに、きちんと坐わると、

「では、ついでにおうかがいたしますが、雨をふらせると申しますが、そんな都合のよい御経があるのでしょうか」

「あるぞ」

「えつ、随分もったいぶるわねえ」

「ははは」

秀観も娘も一緒に笑った。

「こんな話なら、誰にきかれても恥ずかしくないから、誰か通ればいいんだがなあ。お経の中に書いてないものはないというが、たしかに雨をふらせる御経がある。大雲輪請雨経というお経がある。これは一百八十五の竜王を呼んで雨をふらせるという御経だ。この請雨経を読んで、一番最初に雨をふらせたのは本朝においては弘法大師だといわれておる。だが、その弘法大師も守敏という坊さんと雨の祈りの競争をした時は負けたと、ものの本に書いてある、元長元年の三月神泉苑において弘法大師が始めに祈ったが、ふったにはふったが洪水になってしまった。そこで守敏という坊さんが、その次に雨を祈ったがこれが、神泉苑の善女竜王のお願いに合ったのか、静かな雨が三か日ふつたとある。ただし修行を二日のばすと書いてある。この功によって守敏という

人は、律師をへないで少僧都の位を天皇よりいただいたとある。まだこの外、伝教大師と護命との雨の祈りの争いなどがあるから昔のえらい坊さんは、雨などはへいちゃらにふらせたものと思
うんだ」

「へええ、坊さんてえらいものねえ。秀観さんもそんなになれるかしら」

「修行次第でなれる、今でもお前の雨ぐらいならすぐふらせてやるぞ」

「私の雨って……」

「眼から出るじゃないか、すぐと」

「まあ馬鹿にしてるわ」

「まあ、そう怒るなよ。その代わりにきけない話をきかせてやるから、実はこれはまだ秘密だが、つい四、五日前に、うちの御上人さまは殿中に呼ばれて、執権職北条時宗さまから直々に祈雨のことを頼まれたのだ。春以来関東一円に雨一滴もふらず、ただただ鎌倉中の人びとのなげきだけではない、もう一刻の猶予もできない、さつそく雨の祈りをせよとのご命令なのだ」

「えらいのねえ、そしてどうなの」

「もちろんさつそくにお受けしたさ。実は雨請いの本当の専門家はわれわれの律宗ではなくて、真言宗が専門なのだ。ところが八幡宮の別当職だった、真言の大修法師隆弁僧正は先年、御執権職時宗さまの奥様が御懐胎の時、たのまれて男を産むように祈ったのだ。むずかしくいうと変成

男子の修法というのだが、それが失敗してしまったのだ。隆弁僧正はそれを恥じたのか、この鎌倉をさって京都にいかれてしまった。それで、今この鎌倉には、うちの良観上人をのぞいては、雨請いの修法の出来る人がいないのだ。うちのお上人は、御師匠さまの叡尊上人より、律宗の祈禱はもちろんのこと、真言宗の修法も習いつたえておるといってお方だから大したものさ。心に任せて、雨をふらせるというのだから」

「おどろきだわ。十六日から靈仙崎で御祈禱が始まったら私もみにいこう」

「みにいくなどと、もつたいない。一緒になつて御念仏でも唱えなさい」

「私達も唱えていいのかしら」

「お経は転読というて初中後教行をよむので、これはしろうとの読めるものではない。御念仏になつたら、一緒に唱えたらよいのだ」

「私も一生懸命唱えるわ」

「恐らく、鎌倉中の人びとが靈仙崎にあつまつて、良観上人とともに念仏を唱えるであろう」
この時本堂の正面の方で

「秀観、秀観……」

と呼ぶ声がきこえた。

「あつ誰か呼んでる。ではまた」

秀観は白衣の裾をはたくと、すつくと立ち上がった。

文永八年六月十八日、極楽寺の良観の雨請いの祈禱が、靈仙崎で行われた。良観の弟子は、二千七百四十余人といわれておるが、この日、これに加わったのは百二十余人である。型のごとく、祭壇をしつらえ、華をそなえ、香をたいて静かに読経を始めたのである。天は、心にくきまでに澄みきつて青かった。果たして雨がふるか、鎌倉中の人びとの期待は良観にかかっていた。

二

「これで、日蓮坊も、われらが御師匠さまの良観上人さまの弟子になったも同然だなあ」
「さようさよう、面白いことになったもんじゃ、鎌倉中の人びとが、そうなったら騒ぐであらう」

良観の弟子の周防房と入沢入道とが、由比が浜を、歩きながらの話である。この二人は、滑川を渡ると、浜にそって長谷の方に向って歩いて行くのであった。

この三、四か月の日照りにもかかわらず、海水はへることもなく、その青さをますます増し

て、由比が浜の砂地を、けちらしておるのであった。呑み水さへことかくような鎌倉のこの頃では、由比が浜の砂地にたわむれるような、波頭らがうらめしい程であった。

この周防房と入沢入道の二人は、たった今、聖人の松葉谷の庵室からの帰り道であった。

良観が幕命をおびて、靈仙が崎の祈りを始めると、三日目のことである。松葉谷の聖人からと
いつて使いが、極楽寺にきたのである。

良観の祈雨について、聖人より申し入れたき議があるによつて、お使いのものを松葉谷にさし
むけてくれとのことであつた。そこで、周防、入沢の二人が、良観の命令によつて、即日、聖人
の許をたずねて、今はその帰り道なのである。二人とも元氣よく、笑い興じながら浜の砂地を歩
いていた。

「本当に今日は嬉しい日だなあ」

「そうさ、拙僧も、極楽寺を出る時は、日蓮法師の毒舌をきかねばならんかと、内心ひやひやし
ていたのだ」

「ところが、松葉谷へいつて、あの高慢ちきな日蓮法師に逢つてみたら、話がてんで違ふんだか
ら面白いじゃないか」

「だが、雨が本当に降るかしら、降らないと大変なことになるぞ」

「馬鹿なことをいうな、ふらんでどうする。現に何辺もふつていないじゃないか、一昨年
の江の島

の祈雨にだってちゃんと雨がふっているではないか。雨が降らんことがあるものか」

「雨がふればよいが、そうでないと話があべこべになるんだから心配だよ」

「そんな、あやふやな気持でよく坊主になっておれるな。貴方は」

「あつ、煙があがっている」

「盛んにやっておるらしいなあ」

稲村崎の手前の霊仙崎の山の上に煙が立ち上っているのが、由比が浜からはつきりとみえていた。

良観が祈雨の地としてえらんだ場所である。今日は祈雨の日に入って三日目である。そろそろ御祈禱にも、油がのつてきたといえるころである。

「さあ、いそいそ」

「お師匠さまは、霊仙崎の山におるであろうから、坂下からいこう」

「そうしよう」

周防房と入沢入道の二人は、由比が浜辺を通りこすと、漁師部落を通りぬけて、坂下から霊仙崎に登り始めたのである。

風が少しも通らぬ木立の路をうねうねと登ると、視界のひらけた台地に出た。ここは極楽寺の塔中仏法寺の境内である。この境内が、このたび幕命を帯びて、請雨の祈禱をした良観がえらん

だ場所であつた。

御祈禱の場所になつているところには、青い幕が張りめぐらしてあつた。盛んなる読経の音が幕の内から湧き起つていた。

二人は、この幕をちらつとみただけで、その中には入らず小さな本堂の脇の木立の中に入つていった。

木立の日陰に青い法衣を着て、青い敷物をしき、青い曲祿に腰掛けて、青い数珠、青い中啓をもつた良観がいた。

「只今戻りました」

「お使にいつてまいりました」

二人とも一緒に拝礼を良観にした。

細い顔、細い首の良観は、眼を細めて二人にいつた。

「ご苦労ご苦労。して、彼の法師の申入れとはいかなることであつたか」

「それが、お師匠さまおよろこび下さいまし。日蓮坊が、お師匠さまのお弟子になるといので

い致します」

「本当でい致します。日蓮坊が、自分からそう申したのでい致します」

周防、入沢の二人は力をこめていい放つたのである。

「ほう。それは面白い。だが、条件があるであろうなあ」

「はい。条件と申しまして、珍らしいことではありません。お師匠さまの今度の祈雨がかなつて、雨がふつたならば、必ず弟子になるというのでございます」

周防房がいうと、入沢入道も言葉をつづけていった。

「七日の内に一滴の雨でもふつたならば、日蓮坊が常日頃口にいたしております、念仏無間の法門をすてますというのでございます。そして、お師匠さまのお弟子となつて、二百五十戒を保ちますというのでございます」

「お師匠さま、時節到来でございます、日蓮法師を、わが弟子とする時節が参りました。日蓮法師が帰伏しますならば、その弟子達が帰伏するのも当然でございます。日蓮の弟子が帰伏するということになれば、おそらく、日本国中の大半の人びとが、帰伏するでありましょう。どうぞ、お師匠さま、雨を一日でも早くふらせていただきたいと存じます」

良観はますます眼を細めていった。

「それはそれは、近頃にないめでたいことである。愚僧は常日頃から、日本国中の人びとの酒をのむことをやめさせたいと願つておつたが、あの、酒豪家の日蓮法師が、邪魔をするので、これがなかなか出来なかつた。今、鎌倉の戸数は約一万戸といわれるのに、酒壺の数は三万二千二百七十四個あるというようなふしだらさである。天が旱天をもつて、人びとを戒めておるのに、人

は、水の代わりに酒を呑んでふらつくという情けない始末である。こんなことで、なんで、天が人をいつくしむものであろうか。日本国の一切衆生が、不殺不盗不淫等々の八齋戒を保つならば五風七雨、意のままであらう。その邪魔をしておった日蓮法師が、雨がふるならば、わが弟子となると申しおったか」

「はい、たしかに申しました」

「よろしい、日蓮が帰伏する、日蓮が弟子になると申したか、祈りの半ばは達せられたようなものじゃ。さあ、導師に申し伝えよ。この良観が、再び導師となうて読経すると、いいかな」

従者は立ち上がると、青い幕内をめざして、駆けるようにして走りさった。

靈仙崎の良観の請雨の祈禱所は、読誦するところの大雲輪請雨経の祈雨壇法にのつとつて、式場はこしらえられていた。

祈雨の方法は、屋外に壇をつくって、一切の不淨物をさつて、青い幕をはり青い旗をたてなければならぬ。壇の一方には、先ず大きな軸をかける。その軸には、極樂の宝水池の絵がかいてある。池の中には、海竜王宮をえがいて、竜宮の中では、お釈迦さまが説法をしておる姿がかかれています、右には観自在菩薩、左には金剛手菩薩がはべっている。お釈迦さまの前には、三千大千世界主のリンガイ竜王がその眷属をひきつれてならぶが、ぼおとした青黒い雲を身にまとい、半身以下は竜身で宝水池の中にあるが、上半身は竜形を出した菩薩の形をして、池から身体

を出して、みんなお釈迦さまを拜んでいる姿になっている。

さて壇の四角には、清水をいれた瓶を一つ一つおく。お供物はすべて、青一色でなければならぬ。飲食菓子等に、青いものがない時は、青い色で塗れと経文にある。御供物ばかりではない。この式場でつかう道具全部が全部青色でなければならぬ。従って、列座の僧侶は全部新しい青い法衣をつけて、青い敷物の上にすわって読経するのである。もちろん、頭もそりたてのままのおであるが、経文にはそこまでは書いてない。僧侶は厳重な戒律を守ることがもちろんで、俗人が僧侶に加わって一緒にやろうとするならば八斎戒を必ずうけなければならぬ。祈禱中は食物にも制限があつて、必ず三白食でなければならない。

三白食というのは、印度では、乳と酪と飯との三つの白い食物をいうのだが、日本では、乳や酪はやらないから、これに代つて、白湯と大根と白飯をたべるのを三白食という。支那では蘇東坡が、貢父に三白食だといつて、一つまみの塩と一皿の大根と一椀の飯をくわしたが、次の日蘇東坡は、貢父に、昼食をなんにも出さず、塩もない、大根もない、飯もないから、糞・飯だといつた話がある、毛は無いの意だそうである。

たべものは二、三百人になつても、三白食なら簡単であるが、毎日入浴をして身を浄め青い法衣を身にまとうとあるから、この経文のごとくやったとするならば、雨の祈りも大變に出費のかかるものである。であるから、良観の祈雨も、幕府の命令であればこそ、費用も幕府から出るか

ら、雨の祈りも出来るのであって、到底個人では経文にのせる式法通りの祈雨などは費用がかかるので出来るものではない。

壇上には大雲経を安置して、西面して僧侶は大雲経を読むのだがお経は交代して読み、経の声はたえてはならないというから、七日間昼夜に読まねばならないのだから大変である。人数については経文では二人三人あるいは七人が父代でよむとあるから、良観上人の最初の七日間の祈雨は百二十人とあるから、これが適当に交代してよんだのである。大雪経の内容というのは、百七十人の竜王の名前と、呪文の句すなわちダラニで出来ておるお経で、このお経を読むと、沢山の竜王が諸々の苦をはなれて無上菩提心を起し、歓喜して雨をふらせるといのである。だいたい一日二日から七日に渡ってこの大雲経をよめば雨がふる。ただし、七日でふらなければ、また七日つづけるというのである。大雲経といって、どの寺にもすぐあるというものでないから、人数だけ、経典をそろえようと思えば、無論写経をするのだから、請雨の祈禱と一口にいったつて出費はなかなか大変なわけである。

さて良観が雨のいのりをはじめてから、五日目のことである。聖人から、痛烈な催促状がきた。その手紙を要釈すると、次のようなものであった。

「今度、日蓮が、貴僧に対して、雨のいのりを申し入れたが、これは日蓮が法門の邪正を、すべ

ての人に実例をもつて示そうと思つてやつたことである。雨の祈りをもつて、法の勝負を決したことは昔からあることで、護命と伝教大師、守敏と弘法との例がある。よつて、貴僧が、雨をふらせたならば、日蓮は念仏無間地獄の法門を即座にやめて二百五十戒を保とう。ところが、祈雨をはじめてから、本日で五日目となつたが、まだ一滴の雨もふらないがこれはどうしたことであるか、貴僧の念仏真言の宗がすぐれておるならば、もう雨がふつてもよさそうなのである。好色家で名の通つた和泉式部は、「ことわりや日の本なればりもせめ。さりとはまた天の下には」という和歌を読んで雨をふらせ、能因法師は「天の河苗代水にせきくだせ、天くだります神ならば神」と三島神社に歌を献じて、「雨をふらせたことは、貴僧も充分承知であらう。貴僧は、今鎌倉では地藏菩薩の生れかわりか、迦葉尊者の再来かといわれている戒行の誇れ高い方である。祈雨五日にして、一滴の雨もふらないとは不思議である。いそぎ、雨をふらせて、民のなげきを救わせ給え」云々とあつた。

三

文永八年六月二十四日の夕刻がついにきてしまった。

良観上人祈雨七日の夕刻である。聖人に約束した期限がきてしまった。夏の陽は鎌倉山にはい

り、風は死んで立木の葉は少しも動かない。霊仙崎の祈雨の場所では、青い幔幕もくたびれたように動かず、青い幟は暮れて行く空に、まったく無表情につたつていた。

幕の中の説経だけは、依然として威勢がよかつた。

だが、雨がふらないのである。一と七日の約束だから、正確にいうと、まだ五、六時間はあるが、その間にふりそうな空模様ではない。一番星が赤々とみえ始め、あたりが暗くなるにつれて、星の数は増して行くばかりである。

あたりが、次第に暗くなるのも忘れて、祈雨の壇場に程近い木立の中で、評定がつづいていた。それは、この調子では、どうしても雨がぶりそうもないから、あと一週間のぼしてもらうということになったのだが、その延長の使者を何時だすかということが問題なのである。使者を出した後で、一天にわかにかき曇つて、雨でもふりだせば、雨がふつてもあまり自慢にならないから、ふらんときまつたところで、使者を出そうというのである。ところが、四、五時間で約束の時間がきれるのだから、今、使者を出さないと、負けたということに決定してしまうかも知わからない。だから、使者の時刻をいつにするかということ、交代の祈雨僧連中が責任のない評定をつづけていたのである。

「見給え。あんなに、星が出はじめてしまった。これでは、いくらお経をあげても雨がふる筈がない」

「常識はこまる。今夜が満願の夕なのだから、願いが成就する時は、星がでていようが、それこそ太陽が照つていようが、一天にわかにかきくもりだ」

「それは、わかる。だが、あと四時間ぐらいしかないではないか。一天にわかにかきくもる場合には、風がもうそろそろ吹いていていい筈なのに、そよとも、風がふかないではないか。これをどう解釈するのか」

「嵐の前の静けさだ。雨の夜にも星という諺があるではないか。貴僧は知らんのか」

「知らんとはなんだ、人を馬鹿にして。その諺はだ。雨夜の月、網の目に風とまるのたぐいで、ありえないと思うことでも、まれにあるということだ」

「だからいいじゃないか。貴公のいう通り、ありえないと思うことでも、まれにはあるということなのだ。貴僧こそ、論語よみの論語知らずだ」

「その諺を今引用するのはおかしい。それはだなあ、今考えてみると……」

「おいおい、くだらん論をするな。良観上人さまから断が出たぞ。周防房と入沢入道の御両師が、残念ながら、松葉谷に、速刻、あと一と七日の延期を、日蓮坊に申しこむことになったのだ」

「残念だが、仕方がない」

「後の一と七日では必ずふらせてみせるぞ」

「ナンマイダ、ナンマイダ」

本立の中の祈雨の交代僧は、論をやめて、星あかりに互いの顔を見合わせるのだった。

松葉谷の聖人の前に、周防房と入沢入道が対座しておつた。

「あと一と七日延長という良観殿の申し入れを、日蓮たしかに承知いたしました」

「では、ご承知下さいますか。まことにありがとうございました。さつそく帰りまして申し伝えます」

二人は板の間に、額をこすりつける程に平身低頭して、立ちあがろうとした時である。

「まあ、待ちなさい。何故、雨がふらないかということ、日蓮がご兩人にお話しいたそう。祈雨の延長を承知しておきながら、何故雨がふらないかをきかせないでは、慈悲がないと思うので、お話し申そう」

当惑したような様子が二人の顔にみえたが、こぼむことも出来ず、二人は坐りなおすのであつた。

「だいたい、祈雨の争いというのならば、雨がふって、いかる雨がふつたかということ争うのが、祈雨の争いである。祈雨しても、雨がふらないのでは、争いの中に入らないと思わねばならない。雨がふつたところで、雨の姿をみて、祈る者の賢不賢を知るといのが、本当の雨の祈

りの争いである。雨には、天雨、竜雨、修羅雨、粗雨、甘雨等々の種類があるが、良観殿のは一と七日たつても、一滴の雨もふらないのであるから、誤つても、日蓮と雨の祈りの争いをしたと申してはなりませんぞ。後世を誤まらしめるものです。日蓮は良観殿とは、雨の祈りの争いをしてはおらんだ。一滴でも雨がふつたら、日蓮と雨の祈りの争いをしたと申しなさい。後七日祈雨の日延をなされたから、その間に雨がふつたら、日蓮と雨の祈りを争つたと申してもよからう。昔弘法大師は、雨を祈つたが、二た七日の間一滴もふらなかったことがある。その砌り、天皇が民の歎きをうれいて、雨を祈つて、雨がふつたので、その雨を弘法大師は、自分のふらせた雨だといつわつたことがある。真言の善無畏三蔵、金剛智三蔵、不空三蔵の祈雨の時は、小雨はふつたが、大風が連々とふきまくつたので、勅使をつけて三人とも追放となつた話があるが、お二人とも、同じ真言ならばこれらのことは充分ご承知の筈である。

天台大師は陳の世に日照りが続いた時に、法華経を読んでたちまちに雨がぶり、王臣頭をかたむけ、万民は合掌して礼拝したという。この時の雨は、大雨にもあらず、風も吹かずの甘雨であつたので、陳王は大師の御前にあつて、内裏に帰えることを忘れ、三度礼拝したと伝えられておる。日本においては伝教大師は、嵯峨天皇の御代の弘仁九年の春に、法華経、金光明経、仁王経をもつて、祈雨をされたが、三日目にほそい雲が出て、ほそい雨がしづしづとふり始めたので、天皇は大変に喜ばれて、諸宗が反対していた、大乘の戒壇を叡山に建立することを許されたと伝

えられておる。

さて良観殿は一と七日の満願になつても、未だ一滴の雨もふらないのはいかなる理由であろうか。これから申すことは、決して、日蓮が申すのではない。釈尊のお言葉を伝える。即ち経文の通りを申すのであるから、決して立腹されてはいかんぞ。起世経という経文には「諸々の衆生ありて放逸をなし、清浄の行を汚す、故に天雨をふらさず」とある、また「不如法なるあり、樞貧嫉妬邪見顛倒せる故に、天則ち雨をふらさず」とある。経律異相には「五事あつて雨なしとある。五事とは、一には風起りて吹く、二には火起りてこがす、三にはアシユラ手をとつて海に入る、四には雨師淫乱、五には国王理治せず、雨師怒かる故に雨ふらず」とある。よくよくと、この経文を良観殿にお伝え下さい。」

聖人は周防房と入沢入道を見おろしたが、きいておる兩人の姿は、獅子王の前の小鼠のように哀れであつた。さあつと音がしたので、兩人ともあわてて、雨かと思つて庭をみたが、それは松葉谷の松籟の音で、空には二十四日の月がのぼる程に、夕はふけていたのである。

後の一と七日の延長に、良観上人の祈雨は緊張した。多宝寺からも数百人の僧侶を呼んで応援させるといふ始末で、たく香の煙りは天をこがし、誑経の声は、由比が浜の波の音をも消すとい

う始末であった。だが、後の七日のうち二、三日すぎても一滴の雨もふらなかつた。さあ、こうなつてくると大騒動である。ついに、念仏の門徒が、騒ぎ出してしまった。雨さえふれば、あの日蓮坊が南無妙法蓮華経をすてて、南無阿弥陀仏を唱えようと、良観に約束したそうである。これはどうでも、念仏門徒が協力一致して、坊さんを助けなければならぬ。良観や坊さんばかりに任せておいては、雨がふるものか。第一坊さんは、三白食とかいって、きりぼしと塩とおかゆ腹で経を読んでいなさるそうだが、そんなすき腹で、お経の声が天までとどくわけがない。坊さんは坊さんの方の修行で雨をふらせればよい。こっちはこっちの力で一つ雨をふらせてみようじゃないか。どの道、雨さえふれば、あの高慢な日蓮坊主をやっつけることが出来るのだ。さあ、南無阿弥陀仏を唱えるものなら、誰でもよろしい。みんな靈仙が崎の山にあつまれと、鎌倉中にふれまわつたのである。ただし手ぶらで集まつてはならない。鍋でも釜でも、鋤でも鍬でもなんでもよい。音のするものをもつてこい。それを叩いてナンマイダを唱えよというのである。

これも生地蔵様と噂される良観の徳であろうか、あるいはまた、ここまできたら、良観だけには任せておけない、自分達の信心で、雨をふらせてみようというのか、いずれかはわからないが、あつまつたあつまつた。靈仙が崎の一山中チンチンカンカン、チンチンカンカン、ナンマイダ、ナンマイダ、の大騒ぎとなつたのである。祈雨の壇場に近よるなどは思いもよらぬことで、木立と木立の間、藪と藪との間には、鍋を釜を、鐘を半鐘を、およそ、音のするものはすべて動員さ

れて一日一晚中たたきどうしである。

こうなつてくると興奮の度合は、日照りつづきの日光にてらされて、やがて異常状態となり、そこらここらに、焦燥のあまりに身をふるわせていたのが、少しづつ動き出して、ついに踊りに発展して、やがてそれは、それなりのリズムに合わせて、狂的な舞踏となつてゆくのだつた。あつちの木立、こつちの山路で、踊り狂つてナンマイダを唱えるのが普通の状態で、座つて唱えておるのは、それのくたびれた奴ということにまで発展してしまつた。近頃流行のバレエというものは、もともと雨請いと狩猟からきたといわれるが、もつともなこととうなずけるのであつた。

ところが、この念仏の狂的な踊りも二日とは続かなかつた。雨はふらなかつたが、風がふきまわつたのである。俗に八風ということをいうが、その種類には詳細にいうと三十二風あるのだが、善風は一向に吹かず、炎風、寒風、凄風、巨風、醜風、滔風、厲風、広漠風などの悪風の八風がふきすさんだので、後の七日の六日目には祈雨壇場には、幔幕ものぼりも、御供物も、あとかたもなくふつとんで、広漠たる姿となり、祈雨の僧侶たちは、山の木立につかまつていなければ、立つておることが出来ないという始末で、その僧侶だけでも五、六百人はいたが、みんな袈裟は飛び法衣は破れ、白衣もふつとんで、坊主頭は、木立の枝が飛びちつてくるので、頭をきられて血はながれる。手をはなせば風にふつとばされるといふ始末で、坊主が地獄にゆけばこの位

の待遇をされるのではないかと思われる程であつた。この時分には俗家の応援者は、踊りくたびれて役にたたず、やつとこさつとこ、大風にふかれながら、木の葉のように、自分の家に帰るのが勢一杯というところであつた。

良觀の祈雨は後の七日の満願の日をまたず、ついに続行不能になつてしまつたのである。

聖人は、民の歎きを患い、日朗、日興等の弟子をつれて、七里が浜に近い田辺の池にゆかれた。この池は、七里が浜が隆起した時に池になつたのであろうと思われる地形である。行合川のながれ出る口をのぞけば三方は山にかこまれていて、昔は立派な入江であつたのが、後に池になつたと思われる。

「日朗さま。私は、今よいことをしましたよ」

「なんですか、日興殿」

聖人のお伴の一行におくれて歩いていた日興が、日朗に声をかけたのである。

「おくれてくる途中で、蛙を助けたのですよ」

「ええつ、蛙を。どうして……」

「蛇が蛙をのもうとしていたのですが、蛙の尻の辺が、蛇の口より大きかつたとみえて、なかなか

かのみこめないでいたんです。蛇のみこもうとして、ぐるぐるとのびたまままで体をまわしながらあせていました。そこに、私が、通りかかったのです。蛙の目が、助けてくれといったような様子にみえたのです。私が蛇をつかむと、蛇は、身体がまわらなくなったのと、私の足音をきいたとみえて、さっと逃げてゆきました。私は、蛙を池にほうりこんでやりました。なんだから、大変よいことをしたような気持ちになったのです」

「そうですか、それはよかったです。もしかしたら、その蛙はこの池の主かもわからない、雨はきつとふるでしょう。日興殿」二人ともはあはあと、笑うのであった。

池の中央に、岬のように突き出た岸辺がある。

聖人はそこに座を占められると、静かに読経をされた。聖人の前にあるのは、簡素な三具足だけであった。さしも大きな池も、うち続く大旱魃に、鍋底にたまった水のようにひあがつてみにくく岸の泥がかたまっていた。二刻もすると、池の面が動きはじめた。雨が滴々とおちて、ちりめんじわのような小波がたち始め、静かに静かに、絹の糸のような雨がふりはじめたのである。

聖人の法力は、良観より勝ること、南無妙法蓮華経が南無阿弥陀仏に勝ることを、天は証明してくれたのであるが、この雨が、やがて、聖人を竜の口の難に追いこんだ雨ともなったのであった。

竜の口

一

「こまつたなあ」

新善光寺の道教がいった。

「貴僧の口からこまつたなぞといわれては、こつちが本当にこまるよ。そんな弱口をきいては、こまる。今度こそ、日蓮坊を、本当にへこまさなければならぬ時だぞ」

こういつたのは、光明寺の良忠である。

この二人は、今日、極楽寺の良観の見舞いを兼ねて、次の日蓮坊退治の方策をたてにきたのであった。良観を中心に、極楽寺の書院で座談会の最中であつた。

なにしろ、雨ふり上人、雨をふらせること二十余度、自由自在に雨をふらせてみせるという評判の良観が、今度ばかりは、見事に一敗地にまみれたのであるから、鎌倉中の評判は実に大変な

ものであった。

鎌倉中の念仏門徒の意気消沈の態ときたら、それこそ話の外であった。ほっておいたならば、だまっけていても、南無妙法蓮華経と唱えだすかもわからないという始末である。あれ程靈仙崎一山を狂気の場合にして、南無阿弥陀仏と唱えても一滴の雨もふらなかつたのが、南無妙法蓮華経と唱えたら、さっそくにふり出したのだから、法の勝劣は論ずる余地がないのである。

念仏門徒が、よほど思いきつた手を打たねば、みんな、日蓮聖人に門徒をとられてしまうことは明らかである。

そこで、念仏門徒の側から、聖人の側に放つたのは、いわゆるデマ戦術であった。

今鎌倉で生き仏か、地藏尊者かといわれる良観さまが、雨を祈って、なぜ、雨がふらなかつたかという、それは日蓮坊主が、邪法をもって、ふるべき雨を、とめてしまったからである。

昔、お釈迦さまは前世で一角仙人といわれた時に、竜神を滝壺に封じ込んでしまつて、雨をふらせなかつたということがあるが、日蓮坊主は、その邪法をつかつたのであろう。一角仙人は、美人の誘惑にまけて通力を失い、終に雨がふつてしまったといわれるが、日蓮の方では、念仏のまわし者が、松葉谷にまぎれこんではならないと、兵器を庵室に積み重ね、無頼の徒をあつめて、題目講だといいながら、警戒はおさおさ怠りがなかつたそうだ。これでは、念仏側にも、日蓮法師を誘惑するくらいは鎌倉一の美女がおつたつて、とうてい松葉谷に近づくことは、思いもよら

ない。哀れ良観上人さまは、日蓮法師の邪法にひっかかって、雨がふらなかつたのだ。お気の毒さまだ。お釈迦さまも、ダイバダッタという悪人になやまされたのだから仕方があるまい。

といったような噂が、鎌倉中にとんで、念仏の側はおさまつたようにみえたが、これだけのデマ戦術では、長く念仏門徒を押えておくことは不可能であるとして、良観とごく親しい光明寺の良忠と新首光寺の道教が、実は聖人を徹底的にやつつけてしまふ方策を、今日はたてにきたのである。

「われわれがそろって行なつた一昨年の変成男子の御祈禱はまったく見事に破れて、執権職時宗公に、鎌倉中の僧侶が面目を失い、御祈禱の総大将となられた鎌倉八幡宮の別当職、隆弁僧正はそれを恥じて、京都に帰つてしまつた程の事件であつたが、これは、まあ、内々だつたから、今度のように鎌倉中に知れわたらなかつたが……」

「そうさ、今度のは雨だつたから、ふる、ふらんは、三歳の児童にもわかることだから始末が悪い。このままほうっておくわけにはいくまい」

良忠と道教との話をきいておつた良観は、

「では、貴僧たちはどうしようというのかなあ、勝敗は時の運というから、拙僧は今度のことにはあつさり負けたとみとめる。ただし、祈雨のことは、今度が始めてではない。すでに二十回も雨を祈つて、現に雨がふっているのだ。ふらないのは、今度が始めてで、たった一回である。この

次の機会には必ず雨をふらせてみせるから、それまで、まてばよいと思うのだがどうじゃ」

「それは手ぬるい。そんなことをしていたんでは、鎌倉中に南無阿弥陀仏を唱えるものがなくなつてしまふ」

「実は……」

良忠は膝をのり出すようにして、良観にいった。

「それで、もうすこしたつと、この席に行敏殿がくることになっています」

「いかなる用で……」

良観が不審な顔を見ると、良忠と道教とは、顔を見合わせてにつこり笑つて、良忠がいった。

「かの日蓮法師は、われらの顔を見ると、いつも問答、問答としつこくいうのが常です」

「そうです。立正安国論を鎌倉殿中に献上して、それが理由で、伊豆の伊東に三か年も流されたのにもかかわらず、まだ辻にたつて、国難来たる、諸宗との問答を望むと、常日頃申しております」

「それを利用するのはです。逆手です。こつちから、日蓮に問答を申しこむのです」

「それはたいしたことず。しかし、誰がそれをやりますか」

良観は問うた。

「扇が谷の浄光明寺の住職、行敏殿が、それをやります」

「私のために、行敏殿が、日蓮法師と問答をしてくれることを承知してくれたのですか。それはありがたい。行敏殿ならば、真言宗と念仏と禅宗との兼学道場の住職、これは本当にうってつけの御仁だ。日蓮が常にいう、念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊を破折できるのは一人行敏殿をおいてほかになかるう」

「さよう」

「さよう」

道教と良忠は、声を合せてうなずいたが、良忠は、少し下卑な口調でこういった。

「そして、万が一にも行敏が負けたとしても、われわれには傷がつかぬという、うまい仕組みでございませう」

「とうとう」

「先ずこれは、戦さで申すならば、斥候というところでございまして、日蓮が学識をためさればなりません。それには、あの行敏が一番よろしうございます。行敏は一寸トップピセイのところがあります、そこが、われら二人の思う壺でございませうので……」

「由来、問答などというものは、ひょんなどころで、勝ち負けのきまるものでございます。学識ばかりにはよりません。当意即妙がきかねばなんにもなりません。口数が多い方が勝つかというと、あまり長々しゃべったために、敵に攻撃の材料を与えて、つまってしまつたなどの例もあり

ます。さりとて、黙っておれば、知らねえんだらうとあっさりきめつけられて、これも負けでございませう。この辺のコツというのがなかなかむずかしいもので、行敏ならばそれをやれると思
います」

道教の言葉につづけて、良忠はニツタリと笑いながら、

「こつちに運があれば、行敏のトツピセイが幸いして、彼の日蓮坊をうまくまごつかせることができます。あるいは日蓮程の人物ならば、行敏の人物をみぬいて、問答するのを嫌うかもわかりませんが、それがこつちの作戦で、日蓮が黙ったならば、もはや勝つたと宣言して退場してしまえばよいのです、それで終りです」

「そうはいくまいぞ」

「いかなければ、日蓮の学識を十分きけるように行敏にしむけさせ、そのいい分をそれこそ、われら鎌倉中の僧達が十分研究して、日蓮に当たります。行敏は日蓮に負けたとしても、あのトツピセイの人物が得をして、そうわれわれの恥にはなりません。行敏の恥にこそなれ……」

「行敏さまが、只今玄関に到着しました」障子ごしに所化から声をかけられて

「ええつ」と三人は驚いた。

×

×

×

「まだ、お逢いしたことはありませんが、事のついでをもつて思うところを申し述べるのは、世の常ですから失礼いたします。そもそも、噂の通りならば、所立の義はもつとも不審です。

(一) 法華の前に説いた一切の諸経は、皆これ妄語にして、成仏の法ではない。

(二) 大小の戒律は世間をだますもので、人をして悪道におとさす法である。

(三) 念仏は無間地獄の業なり。

(四) 禪宗は天魔の説で、これを修行するものは、悪見を増長する。

以上の四か条が、もし事実ならば、仏法の怨敵です。よつて、対面をとげ、悪見を破らんと欲す。将又その義なくんば、いかでか、悪名を痛ませられざらんや。是非につけて、委しく示し賜わるべき也。恐々謹言。

文永八年七月八日

僧行敏花押

日蓮阿闍梨御房

と、行敏は読み終ると、座中の三人の僧を見まわして、ふわふわつ、きいきいと、異様な笑い声をするのであつた。あつけにとられて、異様な笑い声をきいておつたが、元来がトツピな人柄なので、笑い声には少し我慢をしていたが、良忠がいった。

「それだけか。馬鹿に短いではないか」

「貴僧は、喧嘩の果し状をみたことがあるか、短いもの程よいのだ。俺はこれでも、長すぎると思っておるが、相手が四箇の格言といっておるから、四つに質問をくぎったので、それで長くなつた。これが、日蓮法師の、鎌倉にきてからの、今年で十八年来の御題目だ。これをだ、対面をとげ悪見を破らんと欲すると、やったのだ。いいか、十八年間も、鎌倉の七大寺の住職や大小さまの僧達が、よくまあ、黙っていたものじゃ。ふぬけか、たわけか、なんのために念仏を唱えていたのか、慨嘆、悲憤、慷慨リンリンだ。ふわふわっキャキャツ……」

なかなか面白そうなお人とみえる。行敏は、笑いがおさまると、言葉を更につづけた。

「良観上人殿、今を時めく鎌倉の日蓮法師を相手にして、一生一代の問答をやるときまった、この行敏、本日は、言葉をかざらず、本当のことを失札ながら申し上げてみよう。行敏が、この問答を引き受けたのも、一重に、貴僧、良観阿開梨のためですぞ。したがって、本日は卒直に申そう。かれ日蓮方では、貴僧のことをなんといつて評判しておるか、恐らくご存知あるまい。由来側近などというものは、悪い噂はご本人にきかせぬもの。これも、一重に、この行敏が、日蓮相手の問答という、一大役柄を喜んで引き受けた手前、腹では、泣き泣き申し上げておるのです。

ふわふわキャツキャツググツ……はあはあつ。良観上人さま。日蓮坊は、貴公のことをこう申しておりますぞ。

六月十八日より七月四日まで、良観が雨の祈りをしたが、日蓮の法力にささえられて雨はふら

ず、汗をながしたり、ふるものは涙だけとは、しかも、逆風はふきまくって、祈雨は続行不能となった。一丈の堀をこえぬものが、なんで、十丈二十丈の堀を越えることが出来ようか。二百五十戒を持ったという人びとが千人もあつまって祈ったが、雨はふらない上に、大風がふきまくった始末。南無阿弥陀仏では、極樂往生ができないという、これが証拠だ。極樂寺の坂を通れば、良觀坊の泣き声ができこえるというのが、今、鎌倉中での大評判だとはやし立てている。良觀上人が本当に、後生を恐れるならば、日蓮との約束を守って、いそぎ、いそぎ、松葉谷にきたまい。雨をふらせる法と、仏になるべき道を教えて進ぜようと。使者を出していわせたところ、良觀坊は涙を流し、弟子、檀那達は、声をおしまずくやしがつたこと。くやしがつたこと。とうとう雨はふらなかつたのだから、良觀坊は恥を知つたならば、跡をくらまして、山林にでものがれたらばよいのに、まだまだ極樂寺にすんでおるそうな……」

「行敏殿、行敏殿。良觀御房の前ですぞ。いっていいことと悪いことがある、少しは謹みなさい」

「キヤツキヤツふわふわつ……」

「なにが、そんなにおかしい。拙僧は、昔から、貴僧の変てこなその笑い声をきくと、むしずがはしるのだ、つつしみなさい」

「ああたまらん。この行敏は、笑っていけないといわれたので、今がまんしてるところだ。泣く

のをがまんするより、笑うのをこらえる方が余程つらいものだと思つた。だがなあ、良忠上人、行敏は、日蓮坊という当代の荒法師を相手にして、問答をやってくれといわれて頼まれたのだぞ。敵を知り己れを知れば、百戦まったからずじや、日蓮法師が、どんなことをいつておるかを知らないでは、問答にも、ならないではないか。だから、ありのまま申したまでだ。そんなに聞くのがいやなら、これで、憎まれ口はやめよう。だが、ここにどうしても、やつてもらわねばならぬこと、良観上人に頼まねばならないことがある」

「それはなんだ」

「ほかでもない。裏面工作、裏面工作」

「と、いうと」

「行敏が、たとえ日蓮法師との問答に負けても、日蓮法師をやつつける絶対の手があるのだ。それを良観上人に先に頼んでおくのだ。それはなあ、御執権職・時宗殿の御生母は極楽寺を建立された重時さまの娘だ。ここだ。これが、実は問答するより早や勝ちの手。いいかなあ。問答するよりこのツボをぐつと、良観上人が、その口でおさえてくだされば、万事がすんでしまうこと。鎌倉諸宗の僧侶があつまつて、時宗さまに男子御出生を祈る変成男子の祈禱をやれば、それをかぎつけた日蓮坊が、邪法の通力によってさまたげました。このことは、証拠がないので、今まで、申し上げられなかったが、今度の祈雨のことによって、日蓮坊の邪法が、ばくろいたしまし

た。良観上人が二十度もふらせた雨の祈りの法力を邪魔して、とうとう二た七日の間、雨がふらなかつたのでございます。日蓮の立義が邪法たる証拠がはつきりしておるし、日蓮も自らわが法力をもつて、良観上人の邪魔をしたと申しておるのでございますから、今度は証拠がございませぬから、畏れながら訴え出ました。時頼さまの後家尼さま、時宗さまも頭があがらぬご自分のご生母、しかも、この極楽寺のかつての大檀那のおつれ合いのお方。なんで、良観上人さまの願い出をきかぬでおくものか。日蓮を島に再び流すのも、ばつさりやつてしまうのも、実は、良観上人さまのお口一つでございませぬ。かえつて、良観上人さま、かくかくの奴ですが、ふびんでなりませぬから、命ごいを申し上げますと、先きに申し上げた方が、効果はてきめんかもわかりませぬぞ。キヤキヤツキヤキヤツ、ふわふわつつつつ……」

行敏は、ここぞとばかり、異様な笑い声を思いきりやつてみせたが、良忠も道教も今度は、怒りもしなかつた。実に、行敏のいった通りなのである。だがこれは、自分たち二人だけが、秘かに相談して。行敏が、日蓮坊に問答で負けたら、良観上人に、申し出ようと思つていたところであつたのだ。良忠と道教の二人は、行敏を利用しようとしたのが、かえつて行敏にまんまと裏をかかれたことになりそうであつた。

さて、七月八日の日付になる行敏署名の聖人宛の手紙は、五日後の七月十三日に、聖人から御返事があつた。

「条々御不審のこと。私の問答は、事行い難く候か。然れば、上奏をへられ、仰せ下さるるの趣きに随つて、是非を糾明せらるべく候か、此の如く仰せを蒙り候条、もつとも庶幾する所に候、恐々謹言。」

七月十三日

日蓮花押

行敏御房 御返事

「(全集一七九ページ)

とあつた。

この書状に接した良観をはじめ、道教、良忠、行敏等々の諸僧は、ウソと云つて唸つてしまつた。陥し入れようと計つたのに、この返事では、陥しいられたのは、かえつて良観の側であつたのだ。

聖人は、はっきりといつた。私の問答はしません、公の場所で問答をしましょう。鎌倉幕府に上奏して、公場で堂々とやりましょう。日蓮の願うところですよといふのである。

一一

行敏の問答申込みに対して、聖人から返書がきたが、私の問答はいたしません、公の問答ならいたしましょう。当方の願うところであり、とのことであつたことは前述した。

そこで行敏は、裏面工作が充分に出来て、後顧のうれいなしとみてか、鎌倉間註所に、文章をもつて願ひ出たのである。

その願ひ出の文章をここに掲載する。ただし口語体に改めてのせることにする。

一 僧、行敏謹んで言上します。

早く日蓮と対決して、邪見をくじき正義を興隆したいと存じます。

副進す。

一 通 行敏書状の案

一 通 日蓮の返状

右、八万四千の仏の教は、成仏の法でないものはありません。大乘、小乘、顕教、密教の法も仏の悟りを得るの法でないものはありません。たとえば医師は病によつて薬を調合し、石屋が大小長短の石材をもつて、物をこしらえるようなものであります。一のみを是として、諸々のものを非とする理由はありません。しかるに、日蓮は、法華經一部のみに偏して、諸々の大乘を悪口いたします。日蓮の義に従えば、法華經を説いた以前の諸経は、皆これ嘘であつて、衆生の成仏の法ではない。念仏は無間地獄行きである。禅宗は天魔の説、諸々の戒律は、世間をだまくらかす法であると断言しております。よつて、愚夫愚婦どもは、日蓮の言を信受しまして、年来拜んでおつた本尊や、阿弥陀、観音等の仏像を焼いたり、水に流したり、あるいは、長年修行した念

仏や持戒を悪口いたします。それどころか、法華守護と号して、兵器を自分の草庵にたくわえ、無頼の徒を集めております。これら所行は、去る弘長元年の伊豆伊東に流罪の日にすでに露顕したことでありまして、その当時が一番盛んでありました。日蓮はその後、お上の哀憐をもって、流罪免許になったのですから、すべからく前非をくいておるべきでありますのに、さはなくて邪見の思いを抱くこと、ますます高く、悪行の計画はますます盛んであります。すなわち近日旱魃のことで、諸寺の住職が祈雨した時、日蓮は弟子を良観上人のところにつかわして、再三申して云く、「今御祈禱人と称して、天台真言禅律等の諸僧が、雨の御祈禱をしておるが、神慮にかなうことがない。今蒙古が日本に來襲するということも、東北の辺において蝦夷が乱を起したということも、すべて、禅宗律宗念仏宗の繁昌の結果である。故に、建長寺、極楽寺、多宝寺、大仏殿、長楽寺、浄光明寺等の諸々の寺を焼き払い、禅宗念仏僧等の、諸宗の僧侶の頸を斬つて、由比浜にさらし首にしななければならない。かくのごとく邪宗を戒めたならば、早魃に必ず雨がふり、徳風も四海になびいて、敵国が、この国を伺うようなこともなくなる」と、日蓮は揚言しております。しかも日蓮の弟子や信者は鎌倉町中の方々の風呂場や神社仏閣、見物人の参集するところにおいて、諸宗を邪宗よばわりし、折状を口にすること教えることができせん。かえりみるに、日蓮が焼くべしと叫ぶ寺々は、かたじけなくも、関東鎮護の霊場であり、日蓮が斬るべしと願う僧侶は、鎌倉当代きつての英僧であり、戒香は身にかおり、徳風は人を化してあまねしと

いふべき人々であります。寺を焼き僧を斬れと願う日蓮の義については、鎌倉の町民すら愁憤しております。お上においても、痛心至極のことと存じます。昔マカダイバは宗義上から、聖僧を殺さんと申しましたが、寺を焼くとは申しておらず、逆臣守屋が、仏法を一時に滅したことが歴史上ありますが、未だ必ずしも、僧の頸を斬るとはいっておりません。日蓮の悪逆はこう考えてくると、歴史上にもないことで、今後も、これに類する人物が出現しようとは思えません。ただ、日蓮一人の悪見のみではなく、多くの人びとを迷わせておることが重大問題であります。

ここにおいて、行敏は、誠に悲哀にたえず、七月八日、日蓮が許に状を遣わして問うて云く、「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊との四か条のこと、もし実ならば仏法の怨敵である、封破せんとほつす云々」日蓮はこれに報じて云く、「私の問答は事、行いがたきか、上奏をへられて是非を明むべし云々」とありました。よつて、仏法興隆のため、かつまた衆生の利益のため、日蓮との対決をご心配下さい。その席上において、日蓮の悪義を停止してしまえば、仏法は繁盛して、とこしえに公家、武家の安全を祈り、人民は今後、ますます仁徳をこうむるのみであります。以上謹んで言上します」

行敏の訴状だけを読めば、なる程、そんなものかと思うかも知からない。近頃はあまりみられなくなつたが、さりとて後をたつたわけではない、日蓮正宗創価学会に対する批難攻撃みたいな

もので、それだけを読むと、なんとけしからん宗教があるものだと思うのは、今も昔も変わりがないのである。

行敏の訴状を受けとった幕府では、当時の慣例に従って、これを聖人の許に下してその反論をうながした。

聖人は求めに応じて、論状一通をしたためて幕府に上進した。遺文にある、「行敏訴状御会通」(全集一八〇ページ)がそれである。前状に従って、その論状を口語文でのべがきにするが、聖人の靈筆を汚すことを深く謝するものである。

「当世日本第一の持戒の僧良觀聖人、並びに法然上人の孫弟子念阿弥陀仏、道阿弥陀仏等の聖人たちが、日蓮を訴訟する状に、

「早く日蓮と対決して邪見をくじき、正義を興隆したいと存じます」と云々。日蓮も、邪見をくじいて、正義を興隆することは、一眼の亀の浮木の穴に入るがごとき心持で、幸甚幸甚と存じます。

彼の状によりますと、「右八万四千の仏の教は、成仏の法でないものではありません。一のみを是として、諸々のものを非とする理由はありません」云々とありますが、道綽禪師(真宗七祖の第四祖、唐、玄中寺の人)の云く、当今は末法五濁の悪世である。ただ、浄土の一門のみ仏になるべき道である。善導和尚(唐光明寺の善導、仏名を唱えて、口に光明を出す云々)は千中無一

というて、五種正行の外の雑修雜行によつて、極樂往生することは、千人の中に一人もないとい
うております。法然上人は、捨閉閣扱というし、法華真言、総じて一代の大乗六百三十七部二千
八百八十三卷一切の諸仏、菩薩、及び諸の世天を捨てよ、閉じよ、やめよ、なげうてと、いわれ
ておるのは有名な言葉であります。しかるに行敏は、日蓮を訴状するの文中に、一のみを是とし
て、諸々のものを非とするのは誇法であるといつておりますが、これでは前述の三人の本師の立
義に相違しております。これでは外道と呼ばれても仕方のないものであります。あるいは、良
觀上人が行敏の立義に賛成しておるのでありましょうか、これはまったく正義とは受けとれませ
ん。

また行敏の訴状には、日蓮は法華經一部のみに偏して諸々の大乘を悪口いたしますとあります
が、無量義經には、四十余年には未だ真実を顕わさず。法華經には、かならず、まさに真実を説
くべし。また云く宣示し顯説す。多宝仏は証明を加えて云く（妙法蓮華經は）皆これ真実なり。
十方の諸仏は舌相梵天に至るといふ云々。己今当の三説（法華經以外の經々）を誹誇して、法華一
部を讚嘆するのは積尊の金言であり、諸仏の通例であつて、決して日蓮が私義ではありません。
その上、この難は延暦、大同、弘仁のころ、南都の法相宗の徳一大師が伝教大師に、難じたところ
でありまして、その難は、伝教大師によつて破折されて、法華宗が建立せられたのでありま
す。

「日蓮の義に従えば、法華経を説いた以前の諸経は、皆これ嘘の説である云々」と、訴状にありますが、これまた日蓮が私言ではありません。無量義経に云く「未だ真実を顕わさず、未顕真実とは嘘の異名であります」法華経第二に曰く「むしろ虚妄ありや否や」第六に云く「この良医の虚妄の咎を説くや否や云々」涅槃経に云く「如来は虚妄の説なしといえども、もし衆生、虚妄の説によると知れば云々」天台の云く「即ちこれ如来綺語（十悪の一、いつわり飾る言葉）のことばなり云々」四十余年の経々を妄語と称することは、日蓮が私言ではありません。

また云く「念仏は無間地獄行きである」と日蓮がいうとありますが、法華経第一に云く「我れ即ち極貧に墮せん、此の事はさだめて不可なり、云々」第二に曰く「その人命終してアビ地獄に入らんと云々」釈尊さえ、ただ、観経念仏等の四十余年の経々を説いて、法華経を演説せずんば、三悪道をのがれ難し云々、とあります。いわんや、末代の凡夫たるものが、一生の間ただ自ら念仏の一行に留まり、法華経を信じなければ、無間地獄におちることは当然であります。たとえ、民と子とが、王と親とに随わないようなものであります。しかるに、道綽、善導、法然上人等の、念仏を修行する連中は、法華経の名字をあげて、念仏に対当させ、あまつさえ勝劣難易を論じては、未有一人得者、十即十生、百即百生、千中無一等という、経文からてらしてみても、無間地獄の火中に入ることは明々であります。

「禅宗は天魔の説云々」とありますが、これもまた日蓮の私言ではありません。禅宗の人びとは

教外別伝といっております。しかるに、仏の遺言に「我が経の外に、正法ありといわば、天魔の説なり」とあります。故に禪宗の教外別伝は、この遺言によれば、まさに天魔の説であります。

「諸々の戒律は、世間をだまからかすの法である云々」と訴状にいつておりますが、日蓮は次のごとく断言します。小乗戒は、仏様は御自分の時代に無益なりと破しております。その上、インドには三つの寺がありまして、一向小乗寺、一向大乘寺、大小兼行寺であります。一向小乗と一向大乘とは水火のごとき相違であります。日本国では、去ぬる聖武皇帝と孝謙天皇との御宇に、小乗の戒壇を三か所に建立しました。その後、桓武天皇の御宇に、伝教大師は、これを責め破りました。そのいうところは、小乗戒は末代の人びとには無益であるということです。護命、景深等の南都の僧侶は、その諍論に負けるのみならず、六宗の高僧達は、仏教大師に詫び状をささげて、大師に帰依し円頓（天台宗の戒法で小乗、律宗とはことなる）の戒体を伝受す云々とあり、その状はまだ朽ち果ててはおらないから、自ら開いてみるがよい。しかるに良観上人は、当世日本国の小乗戒は昔のとがを存せずというのでありますが、認識錯誤もはなはだしい。次ぎに「年来の本尊たる弥陀観音の像を火に入れ水に流す云々」のこと、このことはたしかなる証人を出して申されたい。もし証拠がなければ、良観上人等が、自ら本尊を取り出して、火に入れ、水に流して、その科を日蓮に負わせようとするのでありませんか。委細は、これを糾明する時に明瞭になることでしょう。ただしこのことのお尋ねのない時は、その重罪は、良観上人にゆずり渡し

ます。良観上人は常に二百五十戒を持つと誇称されておるが、それを破る因縁はこの大妄語にしくものはありません。無間大地獄に墮ちる人は眼前にあります。

また云く「草庵に無頼の徒を集めております」とのこと、法華經に云く或有阿練若等云々、妙樂云く、東春に云く、輔正記に云く

……何々に云くといつて、文章を引用してないのは、聖人の深慮の計いである。文を出せば、良観側において再び盗用するであろうから、態と文を引かないで、公場対決の時に、さあつと、引用しようというのである。まだこの下においても、引用文のないのがあるが、それも同断である。(筆者註)

これらの経釈等をもって、当世の日本国に照らしみると、行敏があげる、建長寺、寿福寺、極樂寺、多宝寺、大仏殿、長樂寺、淨光明寺等々の寺々は、妙樂大師のさすところの第三最もはなはだしき悪所であります。東春に云く「即ち是れ出家の処に一切の悪人を撰す」とあり、涅槃經に云く、天台云く、章安云く、妙樂の云く、云々とあります法華經守護の為の弓箭兵杖は仏法に定まつた法であることは、国王守護のために、刀杖を集めるようなものであります。

ただし良観上人等の弘通するところの法は、日蓮が難問をのがれたいので、露頭しては大変と、自分の邪義をかくさんがために、諸国の守護地頭雑人等と相語つて、日蓮とその弟子達は、阿弥陀仏を火に入れ水に流す、汝等が大怨敵は日蓮なり、頸を切れ、所領を追い出せ等と勸進す

るがために、日蓮は身に疵をこうむり、弟子達を殺害に及ぶこと数百人であります。これは偏に、良観、念阿、道阿等の上人の大妄語より出でました。

心あらん人びとは、驚ぐべし、怖るべし」

以下、聖人の論状は、寺を焼き、僧を斬ることが、前代未聞というので、支那、日本における歴史的事実をあげておられるのであるが、それにもまして、極悪なのはこれら、インド、支那、日本の仏法破滅の大悪人よりも、末代における偽聖人が正法を滅失せんことまことにはなほだしいと、結論されておるのである。

聖人の訴状は提出された。今はただ、幕府の裁断をまつのみであった。

三

文永八年九月十日、問註所に出頭せよとの召状が、聖人の草庵にきた。

聖人は恐れることもかく、その日間註所に出頭した。

問註所とは、いうまでもなく、訴訟の裁断を下すところである。行敏が聖人を訴え、聖人は行敏の訴状に反駁を与えた。当時の様式に従えば、これを三回くりかえすということになっている。

三回くりかえして、なお是非曲直が明白にならなければ、訴人を召喚して、仔細に問答をすること二回に及び、それが終結して、引付衆において両者を対決させ、引付衆はその陳述文を記録してこれを評定所にまわすのである。評定所では、この陳述文を議案として、引付衆を始め関係者が相集つて評定して、判決を下して、勝訴者に裁許状が引付から下るということになつていく。この判決に不服の時は、再び引付頭に再審をもとめることが出来る。

引付というのは記録係の別名だが、これがその上の評定衆を輔佐して裁判をすすめるのである。以上のことを読むと、裁判は実に公平だという印象を受けるが、それは表面上のことであつて、事実はこれと異なるものがある。北条時頼は執権職の在任が十年であつたが、この間に、北条氏に対抗する三浦氏を滅亡させて、その専制力をましてきたので、幕府の公式の評定衆とは別に、私邸の秘密会議がたびたび開催されていた。時頼の子時宗になると、その傾向は激しくなり、蒙古来襲という困難を理由にして、評定衆の会議より、私邸の秘密会議が多くなつたといわれておる。

さて問註所での取り調べは、執権の家司平左衛門尉頼綱と評定衆の面々であるが、もちろん左衛門尉頼綱が、評定衆の人びとには、口一つきかさず、自分自分の取調べであつた。

「本日の取り調べは、鎌倉幕府の御政令にもそむくかと思ひますが、いかがでありますか。何故、この日蓮を訴えた僧行敏の出席がないのでありますか、これ一つ。三度び文書の往復

があつて、その後対決とは、幕府御政令にあるところでありませんが、それもなく只今取り調べのようではありますが、これも日蓮不審至極でございます」

「だまれ、日蓮。汝の罪はもはやきまつておるのじや」

「一回の御取り調べもなくして処断とは」

「だから、只今、取り調べておるではないか。この、お上の慈悲がわがらぬか、それとも、日蓮、只今より、念仏の悪口を申しませんとでもいうのか。それならば、格別の御慈悲がないでもないぞ、いかがじや」

「……………」

「返答がないのは、不承知とみた。では、きこう。よいか、はっきりと返答をせよ。……日蓮を処断するは、この一条にあると思えばよい。もつたいなくも、御三代執権職時頼さまを地獄に墮ちたと申しておる由。また時頼さまの伯父さまたる重時さまも地獄におちておると申しておる由であるが、しかとさようか……御返答あれ……」

左衛門尉頼綱は、聖人を睨みつけるのであつた。

「そのことでございますか。それは行敏の訴状に少し違ふところがございます」

「それはいかなることであるか」

「時頼さまが、地獄におちていると申しましたことは、亡くたつた今日になつて申しておるので

はございません」

「ええつ、なんということを申す……」

聖人は静かに言葉をつづけられた。

「頼綱殿は、日蓮が文応元年七月十六日、今を去る十三年前に立正安国論を、故北条時頼殿に献上したことを、父の盛時殿よりお話を受け賜わらなかったとみえますなあ。その安国論の中には、はつきりと「もし執心ひるがえさず、曲意なお存せば、早く有為の郷を辞して、必ず無間の獄に墮せん」と、すでに述べております。すなわち、念仏無間の法門は時頼殿御在生の時代に申し述べておきました。たとえ、御執権職なりと、法華経を信ぜざれば墮地獄はまぬがれぬところでございます」

「なんと申す。それを正気で申すのか、時頼さまは鎌倉に大仏殿をこしらえ、建長寺をこしらえたお方、重時さまも極楽寺を建立されたお方ではないか、すべて万民の等しく仰ぎ奉る御方々ではないか、なにを血迷って地獄に墮ちているなぞというのか、経文にさようなことがあるのか。みんな御手前が勝手に申しておることであろうか……」

「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊とは、これ、日蓮が私言ではなく、法華経の精神たることはすでに行敏の訴状を破折したる文に分明でありますから、とくと、日蓮の弁駁書をご覧下されたい。日蓮は念仏を唱える人に向つては、念仏は地獄におちる法と申しております。真言を尊

む人には、真言は国を亡ぼす悪法と申しております。国主は禅宗を尊む、日蓮は禅は天魔の説と申しております。律は国師というが故に、日蓮は律は国賊と申しております。叫び続けて、本年すでに十八年になります。ただいままで、問註所において、この議についてのお取り調べは、今度が始めてでございます。身にあまる光榮と申しても、さしつかえがありませんが、日蓮を訴えたる、相手方の僧行敏の出席がないことは、日蓮まことに遺憾至極でございます」

「もはや行敏の出席は不要なことで、この頼綱が思っておる。日蓮殿……貴殿は、よもや、建長寺、寿福寺、長樂寺、極樂寺、大仏寺等々を焼き払えなぞとは申すまいな」

「申しました」

聖人はきつぱりといった。

呻ったのは、頼綱一人ではない。評定衆の人々も、聖人の言葉には思わず、顔を見合わせて呻るだけであった。

聖人はつづけていった。

「今鎌倉の七大寺は、日蓮からみますならばいざれもみな墮地獄の根源であります。これを焼くになんの躊躇がいらしましょうか。この七大寺の僧侶の頸を由比が浜にきつて、墮地獄の根源をふせぐべきであります。詮ずるところ、この日蓮の強言は、すべて、この日本国未曾有の時に当たつて、わが国を思うが故にほとばしる言葉であります。天下泰平を保たんと思うのでありますれ

ば、どうか、この場に、鎌倉七大寺の良観、道隆、念阿、道阿等々の僧侶を呼んで、日蓮と対決さすべきであります。さはなくて、理不尽にも日蓮を罰するようなことがあるならば、仏の御使を用いぬことになりませぬ。おそらく、梵天、帝釈、日月、四天等々の法華経の守護神は、日蓮に加護をたれて、遠流死罪の後には、百日、一年、三年、七年の内には、自界叛逆の難といつて、北条氏一門に同志討ちの戦さが起り、その後には、他国侵逼の難という西の方蒙古の国が、この国を攻めるようになりますぞ。その時に、後悔してもただ詮ないこと、よくお考えをいただきたい」

「無礼つ無礼つ、無礼つ、なにを血迷つて叫ぶか。狂気の沙汰とは、汝、日蓮のことをさすか、きく耳、もたぬ。さがれ、さがれ」

と平左衛門尉頼綱は叫ぶだけであつた。聖人は、この時の頼綱の怒り方を平の清盛が狂つたようであつたと、種々御振舞御書にのせておられる。

北条時頼、北条重時等が地獄におちているということ、聖人が問註所で申し述べたぐらいで、聖人の強言に驚いてはならないことを申し述べておく。聖人は、妙法比丘尼御返事（弘安元年の筆）では

「人王八十二代隠岐の法皇と申せし王ならびに佐渡の院等は、我が相伝の家人にも及ばざりし、相州鎌倉の義時と申せし人に、代をとられさせ給いしのみならず、島々にはなたれて嘆かせ給い

しが、終には、彼の島々にしてかくれさせ給いぬ。魂は悪靈となりて、地獄に墮ち候いぬ。その召しつかわれし大臣以下は、或は頭をはねられ、或は水火に入り、その妻子等は、或は思い死に死に、或は民の妻となりて、今五十余年、その外の子孫は民のごとし、これ偏へに、真言と念仏等をもてなして、法華經、釈迦仏の大怨敵となりし故に、天照大神、正八幡等の天神地祇、十方の三宝にすてられ奉りて、現身には我が所従等にせめられ後生には地獄におち候ぬ」(全集一四二ページ)

と申されておることを忘れてはならない。

何故問註所には、聖人だけの喚問で、これを訴えた行敏等の喚問はなかつたのであろうか。聖人は種々御振舞御書には

「さりし程に、念仏者、持斉(律宗)真言師等、自分の智は及ばず、訴状も叶わざれば、上臈尼御前たちにとりつきて、種々に構へ申す、故最明寺入道殿、極楽寺入道殿を、無間地獄に墮ちたりと申し、建長寺、寿福寺、極楽寺、長樂寺、大仏寺等を焼き払えと申し、道隆上人、良觀上人等を頸をはねよと申す、御評定になにとなくも、日蓮が罪禍まぬがれがたし、但し上件んのこと一定申すかと、召し出して尋ねられるべしとて召し出されぬ」(全集九二二ページ)

報恩抄には

「禅僧数百人、念仏者数千、真言師百千人或は奉行につき、或はキリ人につき、或はキリ女

房（権威の高い貴女、鎌倉幕府に縁故のある女性達）につき、或は後家尼御前等にういて、無尽の讒言をなせし程に、最後には天下第一の大事、日本国を失わんと呪咀する法師なり、故最明寺殿、極楽寺殿を無間地獄におちたりと申す法師なり、御尋ねあるまでもなし、但しゆゆ（いそいで）の意）に頸を召せ、弟子等をば又或は頸を切り、或は遠国に遣わし、或は牢に入れよと、尼御前達いからせ給ひしかば、そのまま行われけり」（全集三三二ページ）

妙法比丘尼御返事には

「極楽寺の生仏の良観上人、折紙をささげて上に訴え、建長寺の道隆聖人は、輿に乗りて奉行人にひざまづく、諸の五百戒尼御前等は、はくをつかいて伝奏をなす」（全集一四一六ページ）
（はくとは絹の事故贈物をつかつて云々の意である）

とあるのをみれば、いかに聖人をおとしいれようとしたかがわかるのである。

地獄に堕ちたといわれた、時頼の後家尼や重時の後家尼が、だまっていよう筈がない。時頼の後家尼は熱心な禅宗の信者であり、重時の後家尼は良観の信者である。当時の執権職時宗は建長寺道隆の弟子になっている。時宗の連署（執権職の補佐役）政村、評定衆の尾張前司時章、越後守実時、駿河守義政、越前前司時広、遠江守教時、陸奥守時村、等々は、良観の師匠たる叡尊から受戒した人ひとである。

（叡尊は弘長二年の三月八日鎌倉にきて、授戒せし者一万人といわれる）

これ等がよつてたかつて、聖人の処分をきめたのであるから、その結果はわかつておる。おそらく、その処分は、聖人が、種々御振舞御書に述懐されておることく

「一、日蓮の頬を斬るべし

二、然らずんば鎌倉追放

三、弟子檀那は領地を没収すべし

四、過激分子は斬首

五、島流し或は入牢

等々であつたに違いない。

松葉谷の草庵には、聖人をおとしいれようとする策略を秘かに伝える好意の人びともあつた。問註所の執事太田康有は、三大秘法抄を聖人より賜つた太田乗明の弟である。この方面からも、聖人に、事態の容易ならざることが、伝えられたのである。

聖人は、松葉谷の草庵に弟子檀那を集めると、本日の取り調べの模様を伝えて、厳に今後を戒められた。

「各々方、日蓮の弟子と名乗る人々は、一人たりとも臆病であつてはなりませんぞ。親を思い、妻子を思い、所領を思うようなことはこの期に及んでは未練至極です。昔よりこのかた、親子のため、所領のため命をすてたものは大地微塵よりも多いが、法華経のためには、未だ一人も命を

すてた人はありません。法華經をわずかばかり行じて、この様な事態が生ずると、だいたい退転してやめてしまうものです。湯をわかしても、水を途中で入れれば再び湯は水となり、火打ち石を叩くに途中でやむれば火の出ないようなもの……。

各々方、思い切つて、今度、法華經に命をささげることは、石に金をかえ、糞と米とをかえるようなものです。

仏滅後二千二百二十余年の間、迦葉、阿難等、馬鳴、竜樹等、南岳、天台等、妙楽、伝教等だにも、未だ弘め給わぬ法華經の肝心、諸仏の眼目たる妙法蓮華經の五字を、末法の始めに、一閻浮提に弘まらせ給うべき瑞相に、今日蓮がさがけをしました。わが門流の人びとは、二陣三陣とつづいて、迦葉、阿難にもすぐれ、天台、伝教にもたち越えなければならぬ。わずかの小島の主たる北条氏などにおどろかさされて退転し、地獄におちて、閻魔王に責められたらばなんとするか。仏の御使いと名乗りながら、臆するとは卑怯のふるまいであると充分覚悟せねばなりませんぞ」

聖人は弟子檀那に覚悟を促すと、共にこの日蓮が一門が、只今遭遇することは、すでにその昔仏が記しおかれたことがあつて、わが身の光栄を感じねばならんと次のごとく教えるのであつた。

「仏は法華經、涅槃經、大集經等々に、わが滅後正像二千年をすぎて、末法の始めに、この法華

經の肝心、題目の五字ばかりを弘めるものが出現する。その時、悪王、悪比丘等、大地微塵よりも多く、大乘あるいは小乗の教をもつてこれに対抗するが、この題目の行者にせめられて、在家の檀那等々にはからつて、題目の行者をのしり、あるいは打ち、あるいは牢にいれ、あるいは所領を没収し、または流罪しまたは頸をはねるといふて、この題目の行者をおどかすのであるが、題目の行者は断じて退転なく法華經を弘むるので、仇なすところの国主は同志討ちをはじめて、餓鬼がわが子を食うごとくなり、結局は、他国よりこの国を攻められること必定である。これ等は、ひとえに、梵天、帝釈、日月、四天王等の、法華經の敵となつたる国を、他国より攻めさせて反省させるためなのである。わが身はすでに、法華經の經文である。弟子檀那は、如来に従う、地涌の菩薩であると覚悟せねばならない。臆することなかれ、すべては南無妙法蓮華經である……」

草庵を庄する聖人の御声は、実は末法本仏の梵音声であつたのである。

四

文永八年九月十二日。

その日の午前中のことである。

聖人は松葉谷の庵室にあつて、静かに、一書をしたためられていた。この夜、竜口法難という驚天動地の出来事が起り、長く世界史上に残る出来事となつたが、草庵にはその気配は少しもなく、木犀の花がかすかに匂い、早咲きの菊が垣根の許にさいて、庭には落ち松葉が、砂地の庭をかくす程にちりしいていた。

この朝、聖人がしたためた一書を、後年の人びとは、一昨日御書と呼んでおる。それは一昨日、すなわち、文永八年九月十日問註所における、聖人の検問者たる北条家の家司である、平左衛門尉頼綱にあてた書状で、一昨日、見参という言葉から始まつておるので一昨日御書となづけただのである。

——一昨日、問註所において見参し、対面を得たことは喜びであります。この世に生きておる人びとは、すべて後世のことを考えております。仏が世に出現するのは、衆生を救わんがためであります。さて日蓮は、僧侶となつていろいろ法門を研究し、諸仏はなにを目的としておられるかをさとり、迷界を出づるの主要を悟りました。それはすなわち、妙法蓮華経であります。この妙法蓮華経という一乗を信仰することによつて、インド、支那、日本が繁盛したことは、眼前の事実であります。これを疑う人は一人もない筈であります。

しかるに、現今の人びとば、法華経の正しい道にそむいて、法華経以外の邪教というよこしま

の道に迷っております。故に、聖人はこの日本国をすてさり、善神は怒りをなして、仁王經に説くところの七難がならび起つて、日本の周辺がおだやかではないのであります。

現在では、日本の政權はすべて北条家に帰してしまい、人びとはこの関東の氣風を尊んでおります。日蓮は、とりわけて生をこの関東に受けたものであります。どうして日本国を思わないということがありましょうか。よつて、先きに立証安國論を造つて、寺社奉行であつた宿屋左衛門の手をへて、日本の政權を当時にぎつておられた、北条時頼殿に奏上したのであります。ところが、文永五年一月十八日、文永六年三月七日、今年九月十七日等々蒙古は牒状を渡して日本国をおびやかしておりますが、これは立正安國論の予言とまったく符合しております。太公望が殷の国に攻めいつたのは文王が礼を厚くしたからであり、張良が秦の国を亡ぼしたのは、漢王の誠を感じたからであります。張良は謀りごとを陣中にめぐらし、太公望は、千里の外に遠征して勝利を得て、兩人とも恩賞を得ております。

さてこのいまだ起らざる以前に、これを知るものを六正の聖臣と申します。(六正とは六種の人臣の守るべき道の中にて、聖臣はその第一位で、形兆あらわれざるに独り存亡得失の要を知つてこれを未然にふせぐをいう。因みに、良臣忠臣智臣貞臣直臣あり)法華經を弘むる者は、諸仏の使者であります。日蓮は法華經、涅槃經等の文を開いて、仏の志をさとり、その上、日本国の将来を考えて、蒙古の襲來を予言して、ほぼそれが的中いたしました。まことに、古しえの賢

人には及ばずとも、後世の人びとにはまれであろうと思います。

積尊の遺訓たる唯一の妙法を知り、この日本国を思うの志は、必ず賞せらるべきでありましように、邪法邪教の人びとが、日蓮を譏奏し謝讒言するによつて、永年大忠を抱いて、いまだその望みの一端もとげません。かえつて、一昨日、問註所において、不快の見参をいたすことになつたのは、現今のこの蒙古来という国難を対治することの容易ならざることを知つて、ただただうれうる者であります。

思えば、高山に登らざれば、天の高きことはわからず、深谷に入らざれば、地の厚いことは知ることができません。よつて、日蓮が志を知つていただくために、再び、立正安国論一卷を呈上いたします。記述の文は、九牛の一毛にて、いまだ、わが志をのべておりません。そもそも貴殿は、現代日本の棟梁と仰がれる方であります。いかでか、国家の良材を損ずることがありましようか。早く御賢察あつて、蒙古来の国難をしりぞくべきであります。世を安んじ、国を安んずるを忠となし、孝となします。これは、ひとえに、日蓮が身のためにこれをのべず、君の為、仏の為、神の為、一切衆生の為に申しあぐるところであります。恐々謹言。

文永八年九月十二日

日蓮 花押

謹上 平左衛門尉殿

以上は一昨日御書の大要である。かく、したため終った聖人は、清書した立正安国論一卷とともに、弟子日興をして問註所に持参せしめたのであつた。

「日昭殿……」聖人は次の間の日照を呼んだ。

ひろくもない草庵のことなので、日昭は、はいと返事をする、聖人の居間の板敷の上に両手をついた。秋の陽はようやく長くなりかけ、庇を通りぬけて聖人の膝のあたりまで達していた。

「只今、日興を問註所に使いに出したが、もはや二度とは、帰るまい」

「日昭もさように思います」

「そうか、では、一昨日来から申しておると、すべて用意はよいか」

「……はい……」

「何故、返事をしづる」

「御聖人様……」

「なんじゃ……」

「日昭はくやしうございます」

「なにをいわれる日昭殿。そんな言葉は若い僧侶がいうことです。日朗より三つも年下の日興

が、私の意中を読みとつてか、黙つて、書状と立正安国論を持つて、問註所に行きました。……私の書状はともかく、再び日蓮が性もこりずに立正安国論を献じたとならば、その弟子たる日興は問註所にとめおかれることは、明白なことを知つても、日興はだまつて出掛けました」

「日興が、問註所にとめおかれるとならば、法華経のため、名譽至極と思ひますが、この日昭は、後陣を受けた手前、只今から、皆の者の頭となつて、逃げねばならんのが残念至極でございます。さだめし後世の人びとが、聖人を草庵に只一人にして、僧俗ともに皆逃げかくれたと申されるのが、五十をすぎたこの日昭にも無念至極でなりません……」

「すべてが、令法久住のためと、日昭殿……ようくお考え下さい。日昭殿が三十三歳、この日蓮が三十二歳の、今から十九年前の建長五年に、日蓮は先陣、日昭は後陣と互に約束をいたした筈……」
「御言葉返すは失礼ながら、あの時は、師匠一人弟子一人の時代でございましたが、只今はそれとは異なります。日朗、日興、日向、日頂、日持、日家等の青年僧や三位房、大進房等々の老成あつて、後顧の患はありません。なにとぞこの日昭をこの草庵におおき下さい。そのつもりで、弟子達は、一昨日より御内意を体して、近くは、鎌倉の相越の方々に、あづけるように手配ずみでござります」

「それは御苦労でした。日蓮厚く礼をいいますぞ。今目かおそくとも明日は起る事柄は、先年ここに起つた焼き討ちの時や、弘長元年の伊東配流の時とは事情がまつたく違ふ。あれは文字通り

の不意打ちであったが、今度はすでに問註所によばれておる……」

「今度はいかような処置が有りましたようか」

「おそらく死罪じゃ」

「ええつ、死罪つ、まさか、そんな無法なことが……」

「法華経のためには言葉飾らぬ日蓮、執権職時宗殿の御父上を地獄におちたと申した日蓮、今を時めく、鎌倉の七大寺の僧達の頸を、国難をのぞくためには由比が浜に斬るべしと、二度も三度も諫言した日蓮、おそらく死罪をいい渡そう。軍鼓をたたき喊声をあげて、今にも、この松葉谷をとりかこむであろう」

「事態はそこまで急を要しておりますか」

「日昭殿、蒙古の襲来を十二か年も前に予言した日蓮が、敵が、わが草庵に攻めくるのをわからなideなんとする、先刻、日興に問註所に持参させた手紙には、未萌を知るを聖人というとかいておいたが、どうじゃ。あつははっ〜」

聖人は、草庵の屋根をふるわすような声で笑うのであった。

「ここまで覚悟をした日蓮、日昭殿よろしいか、そうそうあんじて駆けつけた人びとも、さつそくにつれて一刻も早く立ちのきなさい」

「御師匠さまが死罪の御覚悟をなされたのに、弟子一人も庵室におらぬとは、もつての外でござ

います。日蓮が弟子は臆病にては叶うべからずとは、常日頃の御教訓であります。日昭をおいて外の日朗、日向、日持等々の処置は充分ついております。どうか、日昭だけは、聖人の側におおき下さいまし」

「日昭殿。一昨日の夜、しかと、みなの方にいきかせ、そなたが頭となって退散することを承知したではないか。先刻も申したように、先年の焼討ちは理不尽な念仏門徒の仕業であったから、これと一戦まじえても理屈はたった。だが、今度はそうはいかぬ。おそらく、平左衛門尉が総大将となって数千人の兵をもつて、この草庵をとりかこむであろう。されば、これにてむかえば、みな日蓮と同罪ということになるであろう。それでは、敵の戦法にわれからかかつてゆくも同然である。今度は、手向いせぬのがこちらの戦法。法華経は諸人をたばらかす秘法とは、今日蓮が、示すところじゃ。数千人の人びとをもつて、この麻ごろもの一介の僧日蓮をとりかこんだとあれば、幕府もえらい名誉なことではないか。この辺の道理を、日昭殿がわからぬことはないと思う」

日昭は黙念として、返事がなかった。

庭の松の樹にやすんでいた山鳩が、一勢にはばたいて、急に舞いあがると、四、五十匹の沢蟹がさあつと、時雨でもきたような音をたてて、庭の面をあたふためいたが、やがて、崖下の穴にむかつて姿を消した。なにか、地の物音をきいたに相違ない。

五

烏帽子胴丸姿の侍が、疾風のごとく、四、五人草庵にとびこんだが、言葉一つも発せず、経机を前にした聖人の背後にまわると、両手をむづとつかんだ。

とその時、庭に、駒の蹄の音がして、ばたばたと人の入り乱れる音がしたかと思うと、

「日蓮、覚悟つ、鎌倉殿の命をうけて、平左衛門尉頼綱、本日只今、召し捕りに参った……それ者ども、伏兵がおるかもしれん、ぬかるな」

馬上から左衛門尉が命令した。

四、五百人もおるかと思われる戦さ姿の侍が、ときの声を上げて、わあつと草庵をとりまいたが、その勢はまことに凄まじいものであった。

四、五人で、六尺有余の聖人を、両手をとって、おさえつけておるところに、左衛門尉の郎従で強力第一と呼ばれる、少輔房というのが、聖人の前につかつかとすすむと、

「諸宗を悪口雑言したる日蓮坊主、よい気味だ。貴様が、日頃の高言からみれば、こうやすやすとは、捕らわれる筈がないのだが、神仏の御加護がきたとみえるが、それでも、まだ諸天の冥加はつきぬというのか、しづとい奴だ。どうしてくれようか」

といいながら、あたりを見まわすと、

「そおれ、謀叛をはかる証拠の品が、ないでもないぞ、さがせさがせ」

後からどやどやと上がりこんだ軍勢を指揮すると、草庵の経机やら道具やらを、足でけちらかし、けっ飛ばしていたが、ふと、聖人が、とっさの間に懐に隠れた経巻をみつけると、

「この坊主、こんなところに、一卷かくすとは、すばやい坊主だ」

少輔房は、聖人の懐から経巻一卷をとりだすが早いか、

「こうしてくれるわ、こうしてくれるわ」

気違いのような声を出すと、聖人の額をめぐけて丁々とたたきつけた。

聖人はしばらく少輔房のたたくにまかせたが、つと右手を払った。その勢いに、今まで聖人を押さえつけていた二人の侍は、あおりをくって、板の間にどおと倒れたが、次の瞬間、聖人の右手には少輔房のもっていた経巻がにぎられていた。

聖人はにつこり笑うと、涙を大きな眼から、ぼろぼろと玉のように流された。この光景には、打った少輔房の方が思わず、はあつと息をのんだのである。

「日蓮坊、なんとした。この少輔房が、打ちちようちやくがそれ程くやしいか」

「貴公が少輔房と申す者か、ようくきけ。今、日蓮が流す涙は、くやし涙などでは毛頭ない。思わず、流した嬉れし涙だ。今、貴公が、日蓮を打った経文こそは、法華経第五の卷勸持品と申す

経文、その経文の中には、末法において法華経を弘むる者、必ず多くの人びとより悪口雑言され、刀や杖をもってきられたたかれる、だが、まさに忍ぶべしと仏の予言が書かれた経文であるのだ。ああ、ありがたし、ありがたし」

「たわけたことをぬかす坊主だ。そうれ、日蓮坊主が、それ程ありがたいという経文を、破いてしまえ、罰なぞあたるものか、そうれ……」

掛声に応じて、草庵一杯にふみこんだ左衛門尉の家来は、聖人、秘蔵の経文を土足にかけるもの、破るもの、おどけて尻にあてるもの、鼻をかむもの、まさに狂気のさたであった。

右手に五の巻勸持品をしっかり握った聖人は、すつくと立上ると、草庵の廊下に出てこられて、馬上の左衛門尉をはつたと睨まれた。

聖人を背後で押さえつけておつた家来も、聖人のなすがままに、聖人の背後についてくるのみであったが、庭における郎党は、それつという、刀を聖人の前につらねて、左衛門尉と聖人の間にたちふさがつたが、臆する色もなく聖人は、廊下よりいい放つた。

「左衛門尉ようくきけ。日蓮は、日本国の棟梁、日本国の日月、日本国の眼目なるぞ、汝が一族郎党のわが草庵にうち狂うさまをみよ。汝の所為は、日本国の柱を倒す行いとはわからぬか、近年打ちつづく天変地妖も、飢饉疫病もみな、法華経にそむく誇法の罪過とはまだわからぬか。不憫な奴、日本国の柱たるこの日蓮を倒すならば、眼前に自界叛逆して、北条一門に同志討ちが起

るであろう。他国侵逼難として、蒙古国は必ず日本国を攻め、この日本国の人びとは討ち殺され、あるいは、いけどりになるであろう。これらは、日蓮が、立正安国論にくわしく申し述べたところであるが、左衛門尉には合点がゆかぬか、…鎌倉幕府が帰依するところの、建長寺、寿福寺、極楽寺、大仏殿、長楽寺等の、一切の念仏禅宗真言律等の寺塔を焼きはらい、僧の頸を鎌倉の由比が浜に斬るべし。しからずんば、日本は必ず亡ぶと日蓮は断言する。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」

聖人の大音声に、さすがの兵卒も驚いてしずまれば、左衛門尉が乗る馬のみが、大きくいなないて胴ぶるいをするばかりであった。

聖人が逮捕せられたのは、九月十二日の午後六時頃であった。武蔵守宣時の屋敷に一時あずけとなったので、聖人の処分は佐渡に流罪ということに一応は決定したわけである。武蔵守宣時の領地が、佐渡であるからそう推量が出来たのである。聖人の身を案ずる門下の者は、ちよつと安堵はしたが、予断は許されないもので、いろいろと手づるを求めてその後のなりゆきを見守っていた。

ところが、午後八時頃になると、裸馬に乗せられた聖人が、嚴重に警戒されて、宣時の屋敷

の門を出たのである。この総取締は、依然として平左衛門尉頼綱であった。まことに一国を相手にして謀叛をした者をしばったような威かめしさであった。

聖人の前々からの命令によつて、聖人の門下とはつきりわかるものは、この行列の周囲には姿はみえなかつたが、身をやつし、通行人をよそおつて、多くの人が聖人を見守つていた。それにもまして多いのは、念仏、禅、真言、律等々の諸宗の人びとであった。それは、門口に立つて、聖人を罵ることはもちろん、中には石を飛ばし、わらじのきれ端を、馬上の聖人めがけて投げつけるものさえあつた。普通の捕われ人にさえ、遠慮することが、平氣で行なわれ、これを制止する警護の人もないという有様であつた。

そして、聖人の行列よりも早く、竜の口で日蓮坊斬首という噂がとんでいた。佐渡に流罪される罪人が、夜に入つて屋敷から連れだされる筈がないのである。聖人があずけられた屋敷の主人、北条宣時は、極楽寺良観の大信者であること、平左衛門尉とはごく親しい仲であること、だから、佐渡に流罪とふれながら、斬首するに違いないと鎌倉の町の人びとが判断したのであつた。それにも増して、鎌倉の町の人びとが予想した日蓮坊斬首の根拠は、聖人の言葉にあつた。鎌倉の諸宗の寺々を焼き、諸宗の僧侶の首をはねよと、日蓮坊はいったそうだから、捕われたならば、日蓮坊こそ斬首せねばならんという噂であつた。

行列が若宮小路にさしかかつて、鎌倉八幡宮の下馬橋の前に来た時である。

聖人は、すばやく馬から飛びおりられた。わあつという驚きと叫び声が、警護の兵卒や見物人の口から出たが、聖人は両手をあげて周囲の人びとを制止すると、

「各々方、お騒ぎあるな、日蓮、八幡大菩薩に最後に申すことがあるによつて、下馬したまで、しばらく猶予をお願いする」

こう言いながら聖人は、下馬橋の中央に進んで、すつくとたつと、

「八幡大菩薩はまことの神か、昔和氣の清麿が頸をはねられんとした時は、長け一丈の月となつて現われ、伝教大師が法華経を講ぜし時は、紫の袈裟を御布施として、さずけさせ給うたと伝えきいておる。しかるに、今、日蓮は、日本第一の法華経の行者である。しかも、身には一分のあやまりもなく、日本国の一切衆生の法華経を誹謗して、無間地獄におち行くを、助けんがために申す法門である。また、大蒙古国より、この日本国を攻めるならば、天照太神、正八幡とても安穩におわすことはよもあるまいと思う。その上、釈迦仏が法華経を説き給ひし時、多宝仏、十方の諸仏諸菩薩あつまつて、日と日と、月と月と、星と星と、鏡と鏡と、あいならべたるがごとくなりし時、無量の諸天ならびに、天竺、漢土、日本国等等の善神、聖人あつまりし時、各々、法華経の行者におろかなるまじき由の、誓状を出せと仏よりせめられて、一同誓状を立てられたが、八幡大菩薩もその中の一人たることは、日蓮が申すまでもないことである、いそぎいそいで、その誓状の宿願をとげさせ給うべきに、いかに、このところに姿を現わさぬは、不思議千

万……」

下馬橋の中央に立った聖人を、折から九月十二日の月の色もさえて、くつきりと浮び上らせ、いかにも、聖人の姿から月の光が出るかと思われる程に、神々しかった。聖人は、最後に再び声を大にして叫ばれた。

「日蓮今夜、頸をきられて、靈山浄土へまいるならば、まず天照太神、正八幡こそは、起請を用いぬ神にて候と、教主釈尊にはつきりと申し上げますぞ……」

六

「お婆ちゃん、大変だよ、南無妙法蓮華経のお坊さんが……」

「どうしたなあ」

「裸馬に乗せられて通るよ……お侍がうんとついて……」

「ええっ……それでは、御上人さまが、いつもいつてることが、本当になったのかもしれないぞ」

「坊よ……そこからお盆をとってくれ」

鎌倉の小町の町はずれの裏通りの家で、お婆さんは、ぼた餅をつくっていた。

「そうれ、坊よ、お前にもぼた餅をやるう」

婆さんは、あわてて、出来たてのぼた餅をお盆に四つ五ついれると、たすきをはずしながら家をとびでて、小町の往来にいそぐのであった。

往来は、がやがやといいながら人が立っていて、すぐとは近づくことが出来なかった。おりから月夜のことなので、さほど暗くはないのに、はなばなしくたいまつをたいて胴丸姿の侍が、無言のままにのしのしと歩いていく。

裸馬に乗った聖人が、老婆の前に来た。

「お聖人さま……」

老婆の声に、馬が先ずびつたりととまってしまった。手綱をとったものが、あわてて引いたが、それは無駄であった。馬が動かないのである。

聖人は馬を愛し、馬のために一文を草しておる程の方である。馬が、聖人の心持をみぬいて、動かなかつたのであるう。

したがって、行列はとまってしまった。

「お上人さま、おいたわしうございます。これはこの婆が、只今こしらえたぼた餅でございます。どうぞ召し上って下さいまし」

広くもない往来である。お婆さんは、聖人の馬のそばによると、お盆のぼた餅を高くさし上げ

るのであった。

お婆さんの眼には、聖人の姿は、生きている仏さまのようにみえた。今捕われて刑場に行く罪人とは少しも見えなかった。人のえらさは、その得意の時でなく、悲運の時に發揮するものである。聖人にはっこり微笑されると

「御老婆、法華経には、子供が砂のまんじゅうを仏さまに捧げて、大変な功德を得たと書かれてあるが、あんたのは、本当のまんじゅうじゃ……」

「お聖人さま、まんじゅうではありません。これは婆のこしらえた、ぼた餅でございます。一つ、つまんで下さい……」

「そうそう。本当のぼた餅だ。今この末法の法華経の行者にぼた餅を供養なさるうとする。その功德ははかりしられぬものがあります。日蓮はその志ありがとうございました」

「では、どうか……」

老婆は盆のぼた餅を頭上にささげた。

「御老婆、ありがたいその志は、帰りにお受けいたします」

「ええつ、帰りつ。とらわれの身となつて、この鎌倉では帰ってきた人はございません。そんなことをいわず、婆の供養をお受け下さい」

「その不思議は、御老婆、あの中天にかがやく、今宵の月天子が知っておるであろう、安心せら

れよ」

聖人が月を馬上から指させば、警護の侍も、見物の人も老婆も等しく、九月十二日の月をみあげるのであった。

警護の侍は一言も発しない。馬が聖人の心を知って、ひとりでに動き出した。行列も動きだした。老婆だけが、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱えながら、聖人のうしろ姿に、ぼた餅を依然として捧げていたのである。

松林をぬけると、潮鳴りの音が、まっていましたとばかりになり出した。

由比が浜を左にみて、聖人の裸馬はあるいていた。これは不思議な行列であった。警護する人びとが、そのいかめしい恰好にもにず、なにか悪いことでもしているような様子であり、罪人であるべき人が、かえって馬上に毅然としておるといふ行列であった。

星は一つもなく、月だけが皎々とかがやいて、由比が浜の波頭がいよいよ白かった。

稲瀬川を渡って、鎌倉権五郎をまつる御霊神社の近くに、聖人の乗る馬が近づいた時だった。

「お聖人さま……」

「……お聖人さま」

と言う四、五人の音が、近づいてきた。

すわこそ、謀叛人に加担するものが聖人を助け出す騒ぎかと思つたが、それは従者を従えた立

派な四人の侍で、語勢に似合わず、態度、物腰しには、なんらの不穩な形勢はなかつた。

警護の人びとも、これこそ、日蓮の信者として有名な四条金吾の四兄弟であろうと、察しがついた。なぜならば、この近くに、四条金吾の屋敷があつたからである。

四条金吾頼基は、江馬光時の家臣で、四人兄弟で江馬家に仕えておつた。兄弟は金吾頼基、左衛門尉頼隆、四郎頼季、七郎頼美である。

この時は兄弟四人共々に信心をはげんでおつたので聖人の法難に気も転倒してかけつけたのであつた。

兄弟四人が、わかれて二人づつで、聖人の裸馬をとりかこんだ。

わあつという、男の泣き声である。

聖人警護の人びとも、思わず顔をそむける程の泣き声であつた。聖人を見上げる兄弟四人の顔には、涙が月の光をすつて小川のごとく光つて流れていた。

「不覚なり四条兄弟……」

聖人は馬上から、四人にいい放つた。

「これ程の喜びが、信心をしていてわからん筈がない。日蓮が日頃月頃願つておつた思いが適うのは今宵である。この娑婆世界では、雉と生まれては鷹につかまれ、鼠となつては猫に食われ、あるいは妻のために、子のために、敵のために、身を失うことは、大地微塵よりも多いのであ

る。法華經の御ためには、なんびとも、只の一度も命を失ったことがない。しかるに、日蓮は、今夜頸きられに行くところである。日蓮は貧道の身と生れて、父母の孝養も心にまかせず、国恩に報ゆるの力もなかった。

されば、今度、この首を法華經に奉って、その功德を父母に回向し、そのあまりを、弟子檀那等にはぶくべし……」

聖人の言葉を、四条金吾始め兄弟達は、馬の口にとりすがって、涙のうちに耳をかたむけていたが、金吾が答えた。

「御聖人！ この四条金吾頼基は、聖人の御最後をみとどけましたならば、必ず、追ひ腹きつて、靈山浄土にお伴をいたします」

「それは、ならぬぞ。きつと戒めます」

「……いや、金吾だけは、お伴をいたさせてもらいます……」

馬が動きはじめた。

「お伴をいたします……お伴をいたします……」

四条金吾は、悲痛な言葉を叫びながら聖人の馬を追った。みれば、この兄弟四人とも、はだしであるのが、とてもいたましかった。

やがて、刑場の竜の口に近づいた。治承四年石橋山の戦いで、源頼朝は大庭景親に負けたが、

三か月後の十月には、景親を竜の口に斬首して、片瀬川のほとりに梟首したことがあるが、その時代から、竜の口は刑死梟首の場所となっていたのである。聖人の外に、建治元年には、蒙古の使者杜世忠等五人を、竜の口に斬首したことは有名な話である。

筆者がゆく信州霊泉寺温泉の入り口に、竜の口という地名があるので、不思議に思ってしまったところ、竜の口という地名があっても不思議ではなかった。昔は水の落口を竜の口といったのである。相州の竜の口は、片瀬川が海に入るところだから竜の口というのである。辞典によると、竜の口は辰之口とも書く。東京都麹町区（今の千代田区の旧地名）または江戸城西丸下の和田倉門にあり、城の濠の水が、道三堀への落口を竜の口ともいう、現在その辺は、まったく埋め立てられて、丸の内一丁目と称して、銀行集会所等がたてられてある、とあるが、丸の内一丁目を通って、竜の口と思う人は今あるまい。先年細井総監（現御法主日達上人貌下）が奉安殿前の手洗に御寄進した、銅製の竜の口より水の出るのも、やはり竜の口という、もつとさがると、とよの口の水の流れ出るところを竜の口というそうである。霊泉寺温泉の入口の竜の口というのは、西内川が依田川にそそぐところなので、そこは今でも、竜の口といっている。風呂屋などにあるのは小さいので蛇口というのである。近頃カラン給水器と洗湯でいうのは英語のクレインがカランと日本語になったので、原語の意味はでっばっているという意味で、これは竜の口とは少しも関係がないのを断っておく。

ついでにくるべき刑場、竜の口に聖人は到着した。合図に従つて、前面の片瀬の浜のみを残して、侍が点々と半円をえがいてちり、たちまちに人の矢来垣ができた。今までたった一人を護送するには、大げさな人数だと思つたのが、この刑場にきてきてこそとうなずけた。

かがり火が赤々とたかれ、たいまつも新たに点じられた。聖人は幔幕を背後にして、四、五人の家来を従えて、豪然として床几に腰掛けた、平の左衛門尉の前に立たされた。

「御検使の御言葉を……」

聖人につきそつた侍が声をかけたが、頼綱は、無言で四、五間離れた砂の上に、ぽつんとおかれた荒筵の方を顎で示しただけであつた。この期に及んで、いう言葉はないという意味であつたろう。

七

聖人が一週間後に、四条金吾に手紙を書いてこの時の心境を語っておるが、その中の一節に、「娑婆世界の中には日本国、日本国の中には相模の国、相模の国の中には片瀬、片瀬の中には竜の口に、日蓮が命をとどめおく事は、法華経の御故なれば、寂光土ともいふべきか」（全集一一三三ページ）とある。

今聖人はその片瀬の竜の口の首の座にすわるのである。日蓮が難に逢う所ごとに、仏土なるべしといわれたが、それは現実には砂の上におかれた一枚の荒筵であつた。夜もふけて露をふくんだ筵は、おりからの十二日の月の光を吸いこんで、白銀の蓮台座のごとくに、片瀬の砂浜に光つていたのである。

聖人は筵に向かつて、四、五歩あるかれた。これを見守る群集が、胴丸姿の警固の侍の背後にひしめいていた。

聖人が歩をすすめると、同時に、

南無妙法蓮華経……………

南無妙法蓮華経……………

南無妙法蓮華経……………

と御題目の聲が一勢に上りはじめた。警固の侍があわてて制止したが、それも束の間で一段と聲が大きくなり、やがては、片瀬の浜の波音よりも音高い題目の聲となつていた。みれば四条兄弟の四人は、土分の故に、警護の侍から黙許されたのであろう警護の内側に、聖人の御最後を見とどけたならば見事に追腹をかこうとして、肅然として座っているのである。

聖人が筵の上に着座したと思われる頃、月が雲にかくれたか、山に入ったか、片瀬の浜は急にあたりが弁せぬ闇にとざされてしまった。

ただ篝火だけが浜風にあおられながら燃えさかり、題目の声はいよいよ高くなっていた。

聖人の背後にまわった太刀執りは、太刀を持ったまま、聖人に声をかけた。

「日蓮御房、只今が最後でございませぬぞ。身どもは不思議な縁をもつて、太刀執りの役を仰せつかつて御房の首を斬らねばならぬが、まことに残念至極でござる。きけば、念仏を非難なさるとあるが、念仏も仏の説に違いない。僧侶が仏説を非難することは、近頃きこえぬことと思いません。いかがであろう、念仏の悪口をいわぬといえませぬか、題目とやらをすてると、この場でいませぬか……いかが……」

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」

これが、聖人の返事であった。

「では……これまで……念仏の敵覚悟！」

太刀執りは思いきつて、刀をふりおとした。大きな岩に、刀をふりおろしたような気がした。グワツといったかと思うと、手許がしびれて思わず太刀を放し、急に眼がくらんであつという声とともに、どうと砂地に倒れて、気を失ってしまったのである。

群集のみたものは何であつたらうか。

太刀執りが、聖人の背後にまわつて太刀をすつくと構えたが、しばらく聖人をながめて躊躇したようであるが、やがて、刀をふりかぶった時である。江の島の方から、月のような光りものが

真直ぐに刑場の上をとんで、西北に走りきつたが、四辺は真昼のごとく瞬間明るくなり、群集は光りに眼がくらんで思わず声を上げて、ばたばたと砂地にぶつたおれてしまったのである。ここで一番おかしかつたのは本日の検使役であり、常平生豪雄をもつてなる平左衛尉頼綱が、自分をめがけてとんできた火の球に恐れをなして、一町ばかりも逃げ去つたことであつた。大將が逃げだしたのだから、家来が逃げだすのは無理もない。ふつとばされたように家来も逃げた。大將が一町程逃げたのだから、家来は二町程も逃げたわけである。

刑場に毅然として、残るのは聖人ただ一人であつた。

刑場から逃げださなかつたのは、四条四兄弟を始め、聖人の門下の人びとと、ひそかに同情をよせる人びとのみであつた。

みれば聖人は依然として端座されておる。砂上に倒れておるのは太刀執りの役人であつた。首斬られる人が倒れず、首斬る人が倒れておるといふ、前代未聞の光景であつた。

聖人は声をあげて叫んだ。

「いかに、殿ばら、かかる大禍ある召人をおいて、遠のくか。近く打ちよれ打ちよれ日蓮が頸をきるならば、いそぎ斬るべし、夜明けなば、みぐるし……」

誰一人とて、返事をする者もなかつた。思い出したように四条金吾の唱題に和して門下の人達が、御題目を唱え出した。



月はみえなくなつたが、東の水平線には夜明けのしるしをつけて、黎明がおとずれていた。

日蓮聖人の信者は、聖人の首が、竜の口で落ちなかつたことを自慢するが、聖人は自ら「日蓮といひし者は、去る年九月十二日子丑の時に頸をはねられぬ。これは魂魄佐渡の国に至る」といわれておる。佐渡に至つた魂魄はこれ凡夫の魂魄ではなくて、末法本仏の魂魄なりとわれわれは拝察しなければならない。

竜口法難については、重野安繹なる帝大の史料編纂官が、事実無根として、明治二十三年五月十日学士会館にて「なるほど日蓮上人の仏力にて、刀の摧折せしは結構の次第にて、該宗の爲には、喜ばしき訳がらなれば、生存し置き度は山々の志願なれど、日本刑法との権衡上抹殺せざる可からざるは、又止むを得ざるなり」との趣旨で演説を行い、日蓮門下に波紋をなげたことがあるが、今から考えれば、研究不足の論難で、あえて紹介の必要もないが、当時は相当問題にされたようである。このいきさつは、大正四年発行の、田中智学著「竜口法難論」にくわしく述べられておる。また「竜口法難は確乎たる歴史上の事実なり」と題して、山川智応著「日蓮聖人の研究」（昭和六年版）があるのでそれ等にゆずるが、ここに一つ筆者がいいたいことがある。それは、聖人が種々御振舞御書に書かれた「江の島のかたより、月のごとくひかりたる物、鞆のようにて辰巳（東南）のかたより、戌亥（西北）のかたへひかりわたる」という、このひかりたる物の解釈である。この解釈がつかないために、ついには竜口法難そのものまでも否定するようにな

つたのではないかと思うことがある。

このひかりものの解釈さえつけば、註画讚にいうところの「依智の三郎左衛門尉直重、頭をはねんとしてその刀折れて地におつ」も高祖年譜にいうところの「依智直重刀をとつて大士を斬らんとするとところ依然として刀折れる」の解釈もつくのであるが、御遺文のひかりたる物の解釈がつかないために、どうも、註画讚や高祖年譜も全然否定する聖人の伝記作者がときどきあるのである。今でいうインテリの作者ほど、このひかりものことにふれないで、伝記を書いておる。あるいは勇敢にこの項を否定しておる聖人の伝記作者もおる。これは明治時代から大正、昭和にかけての、聖人の伝記作者に多く、一応科学的に聖人伝を書くこうとする作者は、このひかりものを否定しておる。

ところが、最近では、聖人が竜の口で経験したような自然現象があるということがわかってきた。この現象は雷電現象という現象であつて、数年前に北海道でこういう現象があつたのであるが、その時の解釈が面白い。こういう自然現象のあることがわかつて、その昔、鎌倉時代に僧日蓮が経験したのが、この雷電現象であるというて、その時の科学者は、聖人の御遺文を引用しておつたのである。僧侶の方では、非科学的であると解釈して、引用を遠慮しておるのに、科学者の方で、堂々と御遺文を引用しておるのも面白い。

さて右のことが古いというならばもつと新しい事実がある。それを左に引用する。

これは、昭和三十四年八月二十日、毎日新聞にのつた記事である。

「十八日午後十一時ごろ、雷雨のあがつたまっ黒い空を、丸い物体が二つ黄色い光を発して、東から西へとんだと十九日午後川崎市の佐藤正信さんから、気象庁に電話があつた。

二つの光はタテに並び、黄色がかつたダイヤ色で、飛行機と同じくらの速さで、シュルシュルというジェット機音を遠くできくような音がしたそうだ。都内各署と川崎市中原、高津両署で調べたところでは、ほかにみた人はいないらしいが気象庁測候課では「雷雨の最中やその直後、雷光で熱せられた空気が、まわりの冷たい空気と、つり合つたまま移動する『球電現象』ではないか」といつておる。ここでは球電現象といつておるが、前述の雷電現象といふのは、これと少しことなつて、雷のかたまりみたいなもので、それが球状になつて飛ぶことをいふのである。

以上のように聖人のいわれたところの「月のごとくひかりたる物」の解釈がつくならば、太刀執りが、倒れ臥すのも、刀が折れるのも当然なことである。雷電現象という電気現象の中で、つたつておるといふ姿勢でしかも刀を持つて立つておるのだから、感電するのは当然である。刀がおれたので、太刀執りは、めくらみ倒れ臥すということになり、感電死はしなかつたのである。このように解釈が出来れば、今後は、当然、聖人の伝記には、この雷電現象たる、「月のごとくひかりたる物」をとりあつかわねばならぬといいたいのである。

鎌倉八幡宮の下馬橋は、今は石の太鼓橋であるが、聖人の時代には、朱塗の橋で赤橋といわれていたというが、橋の前面は若宮小路で、左右に通ずる往来を横大路という、宮に向かって、右のつきあたりには執権職の屋敷があった。

時は、聖人が竜の口にひかれた文永八年九月十二日の夜、時刻は、真夜中ちかく、聖人の処刑執行以前であった。

北条時宗の対面所の庭先に、黒装束の男が一人うずくまっていた。縁側に立つたまま話をきいておるのは時宗である。

「京においては、上皇方や天皇さまにおいては、蒙古に対しての、鎌倉方のとる態度に不満のようであります。鎌倉方のように強硬一点ばりの外交は、外交ではない。かえって、蒙古国を刺戟するばかりで、害あつて利益なしといっております。しかも、六波羅さまもこれに御賛成の模様であります」

「兄者もか……」

「時輔さまは、外交上の定見という意味ではなく、鎌倉方に反対して、殿を窮地に陥しいれば

よいための、御意見と思われませう」

「うむ……」

黒装束の男が消えると、また一人庭先に、同じような黒装束の男が現われた。

「名越の北条様の御様子をお伝えませう」

「うむ……」

名越の北条というのは時章、教時のことで、時宗の叔父の子供で、甥になる。前述の六波羅の時輔は、時宗にとつては腹ちがいの兄であつた。

「名越家には、六波羅の使者が、度々参つております。またたしかに、名越よりも京都に使者を出しております。御命令があれば殺めて、使者の密書、手に入れることも出来ますが、いかが……」

「まだ、その時機ではない。泳がせておいたがよいであらう……」

「時章、教時さまの御兄弟は、たしかに、京都と氣脈を通じて、万一、時輔さま御謀叛の折は、鎌倉において軍兵を動かす所存とみえます。武器の蔵を調査しました。事を蒙古の來襲によせ、せつせと兵器をたくわえておる様子、ここに員数表がございます」

時宗は、なにやら書いた紙片を受けとつた。

「苦勞……」

声と共に男の姿が失せると、どこからきたか次の黒装束が頭を下げていた。言葉の調子だけが、前の黒装束と違って、臆するところがなかった。よほど時宗から信任を受けておるとみえた。

「殿つ、手前の役目は、なかなか大任でございます。一人は、人もあろうに、殿の奥方様の御父上、安達泰盛さま、一人は、只今北条家の家臣の筆頭で、御家令の役をなさる平左衛門尉頼綱さま、どちらも、殿の前では、悪口を申し上げることを謹まねばならぬ御方様の、悪口を申し上げる役目が、私でございます。むずかしいございます。恩賞の点では、私が密偵のうちでは、一番と思し召せ……」

「わかつておる、恩賞には一国を取らせるぞ、よいじゃろう」

「どういたしましたして、一国をやるぞといつて、九州あたりに、追いやられたのではたまりません。この鎌倉から一步も出たくありません。これが、近頃の守護職地頭職みんなの考えでございます」

「よけいなことはもうよい。して、探索の結果はいかがじゃ」

「はい……実は……」

——この黒装束の男の話を理解する為に、次の話を先にしなければならぬ。

時宗の側近には二人の重臣がいて、その勢力を争っていた。一人は今夜竜の口で、聖人を斬首

しようとしている平左衛門尉帆綱である。彼は北条家の家令として、表面上の事務一切を扱っていた。彼は俗に御内さまといわれて、北条家の家臣の統領であった。彼は北条家一門の勢力をかためるのが、彼の役目であったから、いろいろと理由をこしらえて、外様の者から守護職や地頭職をとりあげて、北条一門に適当に分配してやるとともに、自分の勢力を増大させていたのである。これは後の話になるが、元弘元年には、日本国中の守護職は九割までも、北条一門で占めるという工作に頼綱は成功した。この北条氏の勢力を増大して、北条一門を統合しようと念願する頼綱に向かって、立正安国論を提示して、北条一門に必ず同志討ち、すなわち自界叛逆の難が起ると、聖人が喝破したのであるから、頼綱の怒りは想像以上であり、自ら聖人斬首の検使役を進んで引き受け、また自ら召し取りの総大将となったこともうなずけるのである。

時宗の側近にもう一人の勢力者があつた。それは時宗の義父にあたる安達泰盛という人物である。安達氏は代々北条氏と姻戚関係を結び、北条氏の隆盛とともに、自分もその勢力をのびてきていた。現に泰盛の娘は時宗の奥方であつた。頼綱が御内さまという北条家の家臣の筆頭なら、彼は外様の筆頭で、名望とともに財力もあつた。彼は今日も高野山に残る里程標を建てたり、高野版という印刷経典を刊行する程の富者であつた。また評定衆や恩賞奉行を兼職し上野国の守護職でもあつた。故に頼綱が、北条一門で日本国中をかためて、北条氏の専制力を増大しようとするれば、泰盛はこれとは全然反対で、外様といわれる御家人を保護する立場をとって、政治

の上では、北条氏の専断を排して、北条政權樹立当時、すなわち義時、泰時の時代の合議体制を重んじていたのである。このような反対の立場を保持する二人の重臣が、今年二十一歳の時宗を中心にして争っていた。時宗としても、たえず、両者の動向を注意していなければならなかった。文永五年に第一回の蒙古の国書がきて、日本中大騒ぎを演じて、時宗は関東や関西の特に沿海の御家人や守護職に「蒙古人凶心をさしはさみ、本朝を伺うべきの由、近日牒使を進らせるところなり、早く用心せしむべきの旨、仰せによつて執達すること件の如し」と出して見たが、関西や九州の守護職で、鎌倉や関東の居住地にすみついて、任地に行かないものが多かったのである。これは関東における頼綱と泰盛との勢力争いのためであつて、任地に赴くことが、両者勢力の均衡を破ることになるので、時宗としても、余程注意をしなければならなかつた。だから、第一回の蒙古襲来の時には、ほとんど九州、四国の前々からの守護職、御家人が活躍して、関東の軍勢が活躍しなかつたのは前記の理由によるものである。蒙古は文永五年に使節を送つても日本から返書がこないのので、本當に使節が日本までいったかどうかを調査するために再び使者を派遣した。すなわち文永六年三月七日に、太宰府から京都に、蒙古の使者対馬来島の報知があつた。使節の一行は蒙古の使八人、高麗使四人、従者七十余人というのである。この第二回の使者の来朝については、朝廷においては、評議の結果、返牒を送るよう決定したのだが、鎌倉の意見に従つて、やはり返牒は送らないことにきめた。そこで、蒙古は第三回の使者を出した。蒙古はウル

ダイが使者となり、高麗ではキンユウセイ・コウヂュが使者となつて対馬の伊奈浦に到着し、蒙古の中書省の牒状をもつてきたのである。九月二十四日太宰府の守護職から、京都の朝廷に奉つた。朝廷では、評議を行つて、菅原長成をして返牒をつくらせて、これを幕府に下したが、時宗は断然返牒の必要がないとして、前回同様蒙古の使者に返答をあたえなかつた。蒙古の使者は第二回、第三回ともに対馬まできて、太宰府にはこなかつた。事態はこのように漸次悪化していつて、九州や長門辺の防備を嚴重にせねばならなかつたにもかかわらず、任命された守護職や御家人が、時宗の命に従つてなかなか動かなかつたのは、頼綱と泰盛との勢力争いの結果であつたのである。

これは十四年後のことであるが時宗在世中は、この二人の重臣を押さえてことなきを得たが、時宗の死後一年目には、ついに頼綱が泰盛を討つて亡ぼしてしまつた。この時、泰盛に加担して殺された外様の豪族には、信濃国伴野小笠原氏、三河国足助氏、安芸国小早川氏、近江国佐々木氏、常陸国加志村氏等々があつたことを知れば、泰盛が生存中、いかに権力を保持していたかが伺われるのである。ただし頼綱のちに、時宗の子供で泰盛の孫にあたる貞時によつて殺されておるのも皮肉であつた。

第三の黒装束の男が、最近の泰盛と頼綱の動勢をつたえて煙のごとく消えた時、第四の黒装束の男が、時宗の前に現われていた。

「太郎か……」

「はい……」

「太宰府からの情報か……」

「はい。蒙古国は第四回の使者を送つて参りました。二回目三回目の使者が、対馬まできて引き返しておるのに腹をたててか、今度は強力な使者をたてて参つたようです。趙良弼というのが使者の名でございます」

「五、六日前にその情報はあつた、か、詳細が知りたかつたのだ。して……」

「蒙古国王は趙良弼に三千人の護衛兵をつけようといわれたが、良弼はこれを断つて、文官二十四名をつれて、本年（文永八年）正月十二日に高麗に到着した由であります。良弼は蒙古人ではなく、蒙古に征服された女真すなわち満州人でございます。大変年をとつておりますので、蒙古国王が使者とすることを許さなかつたところ、「絶対に死すといえどもうらむところなし」といつて、自らすすんで、日本への使節たることを願つた程の人物であります。よもや二回目、三回目の使節のごとく、対馬まできて、すぐ帰えることはありませんまい。本日は九月十二日……」

「太郎、あの月のぐあいでは十三日といわねばなるまい」

時宗が訂正すると、太郎はつづけた。

「対馬からの早船では、今度は趙良弼は対馬によらず、直接筑前太宰府をめざしておる模様で七日前の九月六日、金州を発船したと申します。すると、到着は十八日か十九日の様子でございます……」

「うむ、性こりなくまたもやつてくるか」

「さよう必ず太宰府にやつて参ります。しかも、殿、蒙古国は、趙良弼が、必ず日本国に行くことを期するために、クリンチ・コウダキュ・オウコクシヨウの諸将に蒙古兵を引率させて、海上より金州にこの三月に到着しております。蒙古兵は鋤鍬を持って、金州に屯田して、趙良弼が日本より返書をもつて帰ってくるまで、待機するとともに、高麗の国を威嚇しておる模様と伝えております……」

「苦勞……」

時宗のご苦勞の一言は、さがれというのと同じなのであろう。たちまちに男の姿はなくなつた。

「申し上げます」

第五の男の声である。

「次郎めか……」

「さようで……」

「いかがじゃ……」

「関東一円を、縦横無尽にかけめぐって密偵いたしました。今度、元軍が万が一にも襲来しましたならば、九州に軍勢を送り、自身も赴こうとする気概と忠義の者は只今のところでは、武蔵の小代氏と、鎌倉の二階堂氏にござります」

「しかとさようか……」

「はいっ」

「只今でも、下知状を出してよいな」

「御意っ」

「御苦労っ」

男が下がった。時宗は部屋の奥に向かって、声をかけた。

「誰かおらぬか」

声と同時に、廊下に人影がして、両手をついていた。

「おうっ。たった今、日蓮の斬首をとりやめたと、平左衛門につげよっ」

「何故でございますか」

「理由は後で申す。いそげ、間に合わぬと坊主の首がおちるぞ」

「蒙古人襲来すべき由、そのきこえあるの間、御家人等を鎮西に下しつかわすところなり、早速器用の代官を、薩摩国阿多北方に差し下し、守護人に相伴われ、且は異国の防禦をいたさしめ、且は領内の悪党をしすむべし。仰せによって執達如件。

文永八年九月十三日

北条時宗 花押

北条政村 花押

右は薩摩国阿多北方の地頭職で、相模国が本領である二階堂氏にあてた下知状で、日附も九月十三日、聖人の竜の口処刑の日であった。武蔵の国の住人小代氏にも、さっそく自身肥後国に下向すべしとして、前文と同様な下知が同日の日附で出されておる。

時宗は十二日の真夜中から十三日にかけて自身がきいた元使趙良弼の来朝は、もはや動かすことの出来ぬ事実であることを知ると、蒙古の襲来を上げて命をかけておる聖人をむざむざ殺すことが、青年宰相らしい正義感から到底出来なかつたと思われる。幸にして、時宗のこの夜の使者は間に合つて、竜の口に聖人はことなきを得たのである。

蒙古の使節趙良弼は、聖人の竜の口の難から七日目の九月十九日に、筑前国今津に上陸したのである。

竜 口 法 難 論

竜の口の法難は終った。

キリスト教徒の内村鑑三は聖人の竜の口の法難を批評して、竜の口で日蓮が処刑されていたら、もっと日蓮教徒はふえていたろうというようなことをいっておる。日蓮が処刑されていたら、日蓮の教徒は奮起し、運動を起こして、日蓮教徒は現在の数の倍あったろうというようなことをいっておるが、それは、日蓮聖人を少しも理解していない無責任な放言である。キリスト教徒はキリストが処刑されたことを誇りにしておるが、仏教の方の考えからいうと、これは決して誇りとはならない。

仏教では聖人に横死なしという言葉があつて、聖人は横死をしないのである。聖人というのは仏の別名で、開目抄には仏を聖人と称するとある。仏様は横死をしないということになつてゐる。だから、キリストが十字架にかかったことをキリスト教徒は万人の罪のつぐないであるとかいって美化しておるが、仏教徒から見ると、それは受けとれないことになる。

十字架の処刑は横死とみるのである。横死とは字典によれば、禍実によつて、天命を完うしないで死ぬこと、非命の命、変死などと出ておる。横死九法ということがあつて、僧祇律、すなわち僧侶の守るべき戒法なるものがある。だから僧侶で横死をするようなことがあつてはならない。目連尊者は竹杖外道に叩かれて死んでしまつたが、釈尊はこれは横死のうちに数えないで、竹杖外道と目連尊者との前世の因縁を説かれておる。

ちなみに横死九法ということをごに掲げておく。横死に九の原因があるといふのである。

一、饒益の食（沢山なご馳走をたべることはいけない）にあらざることを知つて貪食（うんとたべる）する。

二、量をはからずして食う。

三、未だ消化せざるに食う。

四、強いて摘吐す。（指をつつこんで吐く）

五、すでに消化して出さんと欲するに強いて抑制する。（便をこらえてはいけない）

六、食の病に随わず。

七、病に随つて量をはからず。

八、服薬をおこたる。

九、知慧なく心をととのうる能わず。

以上が横死九法という、僧侶の守るべき戒律であるが、現代の世の中でも結構参考になると思うので引用したのである。

消化器官関係のことばかりであると思う人があるかも知れないが、命は食にあるという言葉があるから、食ということを一番大切に考えたのであろう。

今は横死といえ、交通事故で死ぬことをいうが、仏教の方では、天寿を完うしないのも横死と考えているのである。

私は説教でよくいうが、日蓮大聖人は南無妙法蓮華經と唱えて仏になるべきこと肝要なりと、私どもに教えていますが、皆さんは、仏さまが、病気で寝ていると考えたことがありますか。ありますまい、仏様が神経衰弱で弱っているというようなことはない。仏様が借金で苦しんでおるといようなことはない。仏様がすむ家がないというようなことはない。すべての仏はみな自分の仏国土をもつてすんでいるのである。借家にすんでおるといような仏様はない。すべて自分の家にすんでいる。大聖人さまは、私達に南無妙法蓮華經と唱えて、仏になるべきこと肝要なりと仰せられておりますが、私達にとつての仏という意味は、以上のようなものでなければならぬ。

昭和三十四年度の「厚生白書」によると、昭和三十三年の平均寿命は、男が六四・九年、女が六九・六年、と有史いらいの記録というが、まだまだ欧米諸外国の平均寿命に劣るということ

ある。ここに悲しむべきことは、十五満未満の児童では、死因の第一順位が交通事故を含めた事故死であること、十五歳から二十四歳までの年令層では自殺が死因順位のトップであるばかりではなく、世界でも最高位であるということである。そうすると、日本は横死では世界第一ということになる。毎日毎日交番の前に、東京では、前日の死亡者と負傷者の人数が掲示されておるが、これも慢性になると恐ろしいもので、「今日はすくないなあ」と考えたり、死亡者の数が〇の時は、なんだかものたりない、とは考えないだろうが、まあ不思議に思ったりするのも人情だろう。

南無妙法蓮華経と唱えて、大聖人さまの弟子だと自認するものは、絶対に横死なぞしてはならない。無上道を惜しむが故に、わが身をおしむという言葉がおる。南無妙法蓮華経を唱えておるから大丈夫だといって、わが身を大切にしないようなことがあつてはならないとの意味である。お題目を唱えておる大切な身体だから、暴食暴飲も、他人よりは少しは謹しむという心がけが大切である。

さてキリストは刑場で、最後に、「主よ、なんぞわれをみすて給うや」と叫んだということであるが、聖人は、竜の口の斬首にのぞんでは、

「今夜頸きられへまかるなり、この数年が間願いつることこれなり、この娑婆世界に生きてきじとなりし時は鷹につかまれ、鼠となりし時は猫にくらわれき、あるいは妻子、かたきに身を失い

し事、大地微塵より多し、法華經の御ためには一度だも失うことなし。されば、日蓮貧道の身と生れて、父母の孝養心にたらず、国の恩を報ずべき力なし、今度頸を法華經に奉りて、その功德を父母に回向せん。そのあまりは弟子檀那等にはぶくべし」(全集九一三ページ)

と述懐されておる。キリストと聖人の生死観では天地雲泥の相違ではないか。聖人は法華經に命をささげることを目的としておるのである。だが、その法華經には、法華經の行者に刀をくわえるものがあれば、刀の方がこなごなになると書かれておるが、その通りになったのである。竜の口の法難は、実は法華經にも予言されておることなのである。故に聖人が、自から、この数年の間、願いつることこれなりと竜の口の法難をさしたのである。現代の言葉でいうならば、竜の口は聖人にとって聖人の法華經の実験証明なのである。だから聖人が、この数年の間、願うることこれなりといわれたのである。「聖人出現して実の如く法華經を説かん時……」という言葉がある。この言葉は聖人が自らいわれた言葉である……その時には、種々なる大難が起るといわれたが、その難のあることが、聖人出現の証明、仏さま出現の証明なのである。だから、竜の口は聖人出現の証明なのである。ただし竜の口の証明があったから、自分が仏であると悟ったなどというものではないことを断っておく。仏さまだけは自分から、自分が仏さまであるというのである。

新興宗教の教祖みたいに「どうだ、俺の宗旨も流行するではないか、こんなに信者がふえたん

では、俺も仏さまかもわからんぞ、この辺で仏さまだと、はたに宣言して、もつと信者をふやそうではないか」「そうすなあ、きつとあんたには、教祖的性格があるんですよ、この辺で、仏さまだと、官言したらよいでしょう」などと、側近からいわれて、仏なぞといいだすのは、近頃の話である。

「日蓮と名のること自解仏乗なり」と聖人はいわれておる。明らかなること日月にすぎんや、浄きこと蓮華にすぎんやとの聖人の自負の内証を考えねばならない。釈尊も昔、ニレンゼン河の畔において、暁の明星をみて確然として、われは仏なり、覚者なりといわれたのである。釈尊が仏だと宣言をしたので、従者は、ゴータマは狂せりといつて逃げてしまったという話がある。

日蓮と名乗られたことが、仏である証拠、聖人の証拠であることを知らねばならない。

日蓮正宗以外の宗派では、竜の口で聖人が上行菩薩であることを悟った、その後のふるまいは凡夫のふるまいではなくて、上行菩薩のふるまいであるといっておるが、それも上行菩薩の本當の意味がわかっておればその通りで、まことに結構だが上行菩薩を釈尊のお使いぐらいに解していたならば、はなはだ、真意に遠いといわねばならない。

作仏とは一体いかなることか、作仏ということとは、種子を覚知するのを作仏というのである。さて、このことについては私の稚筆を弄するよりは、寛尊の当流行事抄を引用した方がよいと思うので引用する。

「問う、蓮祖は乃ち是れ上行の再誕なり、故にまさにすべからく上行菩薩と顕れたまうべし、何ぞ久遠元初の自受用身と顕はれたまはんや、況んや復、久遠元初の自受用身は即ち是れ本因妙の教主釈尊にして上行等の主師親なり、故に涌出品に去く、悉く是れ我が化する所、大道心を発せしむ（師也）此等は是我子（親也）是の世界に依止す（主也）等云々、経文明白なり何ぞ別義を存ぜんや。

答う、此に相伝あり略引して之を示さん、血脈抄に云く、木地自受用身の垂迹、上行菩薩の再誕日蓮等云々、再誕の言、上二句に冠す、若外用によらば今の所問の如く上行の再誕日蓮なり、若し内証によらば自受用身の再誕日蓮なり、故に日蓮即是れ自受用身なり」とある。味読すれば充分である。多くの言葉を弄する必要はない。

次に問者の、内証によらば自受用身の再誕日蓮と称するか、その文証はどうかという問いについて、寛尊は五つの証拠をあげておる。

一は種脱勝劣の故にとして、諫曉八幡抄を引用する。

二は行位全く同きが故に、本因妙抄に云く「釈尊久遠名字即の御身の修行を末法今時、日蓮が名字即の身に移すなり」云々、血脈抄に云く「今の修行は久遠名字の振舞にけにばかりも相違なし」云々、行位全く同きなり、故に知ぬ蓮祖即是自受用身なり。

三に本因妙の教主の故に、血脈抄に云く「本因妙の教主本門の大師日蓮」云々、又云く「下種

法華經の教主の本迹、自受用身は本、上行日蓮は迹なり」

四に文証分明の故に、血脈抄に云く「久遠元初の天上天下唯我独尊は日蓮なり」云々、久遠元初の唯我独尊あに自受用身に非ずや、故に三位日順の詮要抄に曰く「久遠元初の自受用身とは蓮祖聖人の御事なりと取り定め申す可きなり」

五に現証顕然の故に、開目抄下云々に云く「日蓮は去る文永八年九月十二日子丑の時頸はねられぬ、此は魂魄佐渡に至る」等云々、まさに知るべし丑寅の時はこれ陰の終り死の終り、陽の始め生の始め陰陽生死の中間なり、故に知んぬ、子丑の時は末法蓮祖垂迹の凡身の死の終なり、故に頸をはねらると言うなり、寅の刻は是れ即ち久遠元初の名字本仏の生の始めなり故に魂魄等と言うなり、日我本尊抄見聞に云く「開目抄に魂魄佐渡に到るとは是れ凡夫の魂魄に非ずして久遠元初の名字本仏の魂魄なり」云々、然ば則ち蓮祖大聖佐渡以後に今日凡身の迹を開して久遠元初の本を顕はす、あに発迹顕本の現証に非ずや、是の故にすべからく知るべし、文底下種の寿量品に我実成仏と言うは我は即ち日蓮、成仏は即ち是れ自受用身なり」（聖典九三六ページ）

熟読下されば、聖人が本地は自受用身なること、従つてこれが、末法下種のわれらの主師親たることがわかる。

筆者はこの意味において、竜の口以後は聖人を呼ぶに、佐前とことなることを示して、以後大聖人と尊称するものである。開目抄に仏を大人、聖人と称すという言葉がある。大聖人とは仏の

別名であり、現代にも生きておる仏をいう意味である。

依智の里

文永八年九月十三日、鎌倉の竜の口から相州の依智に大聖人は移られた。依智についたのは十三日の正午であった。佐渡の領主武蔵守宣時の代官人の本間六郎左衛門の屋敷である。

この依智に着く道中が変わっていた。警護の武士が、大聖人をとりまいていたが、はつきりした引卒者はいず、大聖人か一行の主人のような様子で依智に到着した。竜の口の刑場で、大聖人斬首の直接の命令者であった平佐衛門は、刑場での異変におどろくと、相模の依智に大聖人をとどけよと命令して、その場より姿を消してしまった。

それよりもつと悪いのは、大聖人を斬首せよと強い命令を出して、時宗までも動かした武蔵守宣時（佐渡の領主）が、大聖人の首が竜の口で斬れぬと知ると、十三日の朝早々に、熱海に入湯と称してこれまた、鎌倉を逃げ出していったのである。恐らく責任を回避するのと、大聖人斬首のことが鎌倉中の人びとにいろいろな噂を生んだのを恐れることであつたらう。しかし、熱海にほとぼりを逃がれたとはいえ、この宣時は、大聖人斬首の考えは捨てなかつた。かえつて竜

の口の命令者であつた平左衛門が、眼前に大聖人さまの威にうたれて、その後流罪説をとるようになったのだが、宣時はあくまで斬首を主張してやまなかつた。自分の主張を通すために、熱海から念仏門徒に命を發して、鎌倉の街に火をつけよとか、殺人事件などを起して、これは日蓮の弟子が、お上をうらんでの仕事であると流言して、日蓮の弟子は全部首を斬らなければいけない、あるいは遠島にしろとか、鎌倉から、日蓮の弟子は追い払え等々の命令を發したのだが、犯人を捕えてみると、これが律宗や念仏宗の人びとであつたのは皮肉であつた。しかしこの流言のために、日朗、坂部入道、伊沢入道等々が、土の牢におしこめられたのは有名な話である。

さて、直接の命令者が、以上のような次第なので、依智に來た大聖人は、警護の侍にとりかまっていたとはいへ堂々たる態度であつた。

依智の本間の屋敷につくと早々に「やあご苦労だつた。昨夜の夕方から、この昼まで、なかなか大変であつたらう、一杯のんでくれ……」と、その労をねぎらつたのは、ほかならぬ大聖人であつたのだから驚く。

「酒とりよせて、ものふ共にのませてありしかば」と種々御振舞抄にあるのがこれである。恐らく、大聖人と同行した四条金吾が直接の世話にあたって、警護の人々に、酒をふるまつたのであろう。

警護の人々の頭の中に浮かんだものはなんであろうか。松葉谷の草庵では、平左衛門尉頼綱に

向かつて、今、日本国の柱を倒すものは平左衛門尉なりと叱陀し、頼綱を犯人なりといい放った人。鎌倉八幡宮の社頭では、八幡大菩薩こと起請を用いぬ神である。いそぎいそぎ、約束を果たせと、神にその使命をせまった人。馬の口にとりすがって泣く鎌倉武士に、これ程の喜びを笑えよかし、この数年が間願いつることこれなりと、斬首を眼前にして人をはげます死身弘法の精神、刑場に至っては、夜あけなばみぐるし、首きるべくは急ぎきるべし。こんな言葉を刑場で、古今東西いった人があるであろうか。これは人ではない、仏さまだ、仏さまでなければ振舞えないことである。しかも、あれ程苛酷にあたったわれわれに、ご苦労であつたと、今酒を振舞ってくれているのは大聖人である。われわれの直接の命令者だつた平左衛門尉は、昨夜の刑場での異変に驚いて、その後姿をみせぬではないか。そのまた上司は熱海までも逃げさつている。

警備の侍は、四条金吾の、大聖人さまの意を帯した酒の振舞いに、すっかり酔ってしまった。緊張の度がほぐれて警備の人びとは、やがて庭先きで、がやがやといひ出したが、誰かが大きな声で

「南無妙法蓮華經」と唱え出すと、三、四十人の侍か両手を合せて、部屋の奥なる大聖人に向つて一勢に題目を唱え出すのであつた。題目の声が高くなるにつれて感激が共鳴していった。一人の武士が、真青な顔をして大きな声でいった。

「酒に酔つたからいうのではないぞ。酒に酔うと、本当のことをいうというから、その点では俺

は少し酔っているかも知れないが、俺は、俺達の信じておる阿弥陀さまの悪口をいう坊主だから、本当のことをいうと、どんなに悪い坊主かと思つていたので。ところがどうだ、今、眼前にこうやって拝んでみると、その尊さに俺はうたれて口がきけないのだ、俺は念仏をたつた今すてる。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経

この南無妙法蓮華経をきくと、俺も念仏をすてたぞ、俺もすてたと、火打袋から、念仏の数珠を出して、ぷつぷつときるものが沢山に出てきたのであつた。なかには筆と硯をかりてさつそくに、只今よりは、念仏を申しませぬと誓状を書いて、大聖人に直接渡す人も出て来た程であつた。

さて、時がすぎたので、この家の主人本間六郎左衛門の家来が、大聖人を警備することとなつて、鎌倉からついできた警護の侍は帰り始め、四条金吾も帰つていった。

この日の午後八時すぎであつた。上使の早馬が、本間の屋敷についた。すわこそ、再び大聖人斬首かと警備の侍が騒いだが、それは実は吉報であつた。この屋敷の主人本間六郎左衛門の家臣、有馬尉というのが、使者が立ち帰ると、大聖人の居間に走つてきて平伏して告げるのであつた。

「大聖人さま、吉報でございます。今夜こそは再び首斬れとの使者かと思ひましたのに、そうではなくて、お喜びの知らせであります。只今鎌倉からの使者の赴きによりますと、大聖人さまに

は罪はない、今しばらくしたら赦免になるとのことでございます、そして、これに危害などは加えてはならぬとの厳命でございますから、ご安心下さいませ、もつとくつろいで結構でございます。この命令はみな時宗公直々に出ておる御命令でございます」と町重なものであった。

そして、大聖人のあづかり手となる武蔵守宣時が、今朝熱海にいつてしまったので、宣時の配下が、はやまって大聖人に危害などを加えてはいけないから、鎌倉から四時間程かかって駆けつけてきたこと。そしてこれよりその立文をもつて熱海に行くのだが、到着はいずれ真夜中になるであろうとのことであった。

大聖人を警備する人びとの間に、どっと歓声が湧いたのも無理はない。

では、昨日は、竜の口で首を斬られようした天下の大罪人が、何故今日は、「この人はとがなき人なり、今しばらくありてゆるさせ給うべし、あやまちしては後悔あるべし」という立文のごとき変わり方になったのであろうか。

この立文は北条時宗直々にでたものである。この日すなわち九月十三日に、前述のごとく「蒙古襲来すべきの由、そのきこえあるの間、御家人等を鎮西に下しつかわすところなり。さっそく器用の代官を、薩摩国阿多北方にさし下し、守護人と相伴つて、且つは異国の防禦を致さしめ且つは領内の悪党をしずむべきものなり、仰せよつて執達件の如し、

文永八年九月十三日

相模守時宗在判

連署 政村在判

阿多北方地頭殿

という、島津文書に残る、蒙古襲来に対する戦争用意の命令書を出しておるのである。

大聖人に対して「この人はとがなき人なり」との立文が、その日の夕方、依智の屋敷に到着したのは実に当然なのである。

大聖人こそ文応元年より十二か年の間、蒙古襲来を唱えておった人であり、そのために、伊豆の伊東に三か年の流罪生活も送り、そのために、竜の口に斬首されようとした人である。いかに過酷な政府当局といえども、それを無にして、蒙古襲来の戦争準備が出来る筈がないではないか。時宗は大聖人を許すように決心したのである。

だが、依智におること二十八日間、十月の十日には依智を立てて佐渡に向ったのは何故であるか。時宗の意見が通らなかつたのと、大聖人のあずかり人となつた武蔵守宣時の策動が効を奏したのである。

宣時は、鎌倉中に放火殺人等の騒乱を起こさせ、大聖人の弟子檀那二百六十余人の名をつらねて、斬首、流罪、追放等の処置に出ようとしたことは、前に一寸ふれておいたところである。

これでは、時宗も大聖人を許すことは出来ない。ついに佐渡に大聖人は流罪となったのである。

だが、依智に二十八日間も大聖人がおったのはいかなる故か、恐らく、評定衆でも、すぐ大聖人を佐渡に流すことが決定しなかつたとみえる。

大聖人が、依智にあづけられてから、一週間目の九月の十九日には、蒙古からの第三回目使者である、趙良弼が筑前の今津に文官二十四人の家来をつれて上陸したのである。趙良弼は前二回の使者が、反牒もなく追いかえされているのにこりて、国書を唐櫃に納めてその上を金鎖でしばりつけていた。

そして太宰府の役人にだんことしていい放つたのである。

「この国書は、蒙古王から帝王にたてまつれ、それが駄目なら時の將軍に直々渡せ、しからざれば、そのまま、もって帰れとの嚴命を受けてきたのである」

大宰府の役人は

「異国の人が、朝廷に参上したためしは、日本国には全然ない。国書の趣きを承け給わりたい」とこれも頑として応対した。

趙良弼も仕方がなくその写しを渡したので、太宰府の手を経て、第三回目の国書の写しが、京都についたのが、十月の二十三日であった。大聖人の依智出発は前述のごとく十月の十日であ

る。趙良弼のてんまつについては後述するが、蒙古の第三回目の使者はくる、応戦の準備はするという世情である。大聖人に対する処分は、評定衆でなかなかきまらなかつたのは当然であるが、その反面、武蔵守宣時の策動が効を奏して大聖人は流罪ということに決定したのである。

さて依智についてはもう一つ述べねばならぬことがあるが、それは種々御振舞御言にくわしいから、それを引用する。

「その夜は十三日（九月十三夜で、後の名月の夜である）兵士ども数十人、坊のあたり、ならびに、大庭にならび居て候ひき、九月十三日の夜なれば、月おういにはれてありしに、夜中に大庭にたち出でて、月に向い奉りて、自我渴少々よみ奉つり、諸宗の勝劣、法華経の文あら申して、抑も、今の月天は法華経の御座につらなりまします名月天子ぞかし、宝搭品にして仏勅を受け、囑累品にして仏にいただきなでられまいらせ「世尊の勅の如く当に奉行すべし」と誓状を立てし天ぞかし（月天子は名月天子として、昔、釈尊の法華経説法の座につらたつて、釈尊の滅後、此の娑婆世界で法華経を弘めよ、もし自分が弘めることが出来なければ、法華経の行者を守護せよと、三度も仏勅をうけ、囑累品では釈尊から三度まで、頭をなでられて「釈尊の仰せの如く、末法に於いて、法華経の行者を守護致しますと誓いを立てた。月天子ではないか。」仏前の誓は、日蓮なくば、むなしくてこそおはすべけれ。今かかる事、出来せば（大聖人の竜の口法難のことをさす）急ぎ、悦びをなして、法華経の行者にもかはり、仏勅をも果たして、誓言のしる

しをばとげさせ給うべし。いかに、今しるしのなきは、不思議に候ものかな、いかなる事も、国になくしては、鎌倉へも帰らんとも思わず。しるしこそなくとも、嬉し顔にて澄み渡らせ給うはいかに。大集経には「日月明を現せず」と説かれ、仁王経には「日月度を失う」とかかれ、最勝王経には「三十三天各々瞋恨を生ず」とこそみえはべるにいかに月天いかに月天と責めしかば、そのしるしにや、天より明星の如くなる大星下りて、前の梅の木の枝にかかりてありしかば、兵士ども、皆えんよりとびおり、或は大庭にひれ伏し、或は家のうしろに逃げぬ。やがて、即ちそら、かきくもりて大風ふききたりて、江の島のなるとて（江の島の海なる音）空のひびくこと、大いなる鼓を打つが如し……………」（全集九一五ページ）

寺 泊 り

文永八年十月十日、大聖人は佐渡に向つて神奈川県の依智を出発した。

では、竜口法難の翌日たる九月十三日の午後、北条時宗から「この人はとがなき人なり、今しばらくありて、ゆるさせ給うべし。あやまちしては後悔あるべし」との至急使が、わざわざ鎌倉幕府から届いたにもかかわらず、何故この処置となつたのであろうか。

時宗は文永五年十八歳で執権職となり、この年二十一歳であつた。九月十三日の立文から判断すれば、北条時宗が、大聖人に好意を持ったことは事実である。なにはともあれ、大聖人の予言のごとく国情が動き、大聖人の予言のごとく、蒙古襲来は事実となり、ただいつのいつかに襲来するかの問題となつたのである。

念仏宗禅宗を支持する方面からの意見をいれて、竜の口の処刑を黙許してみても、これが斬首出来ぬという不思議な僧侶である。時宗の心中は動揺したに違いない。しかもその目、大聖人の予言を裏づけるかのごとく、時宗は九州に、蒙古征伐の軍勢を動かしておるのである。

これでは、青年宰相としての正義感から、「この人はとがなき人なり、今しばらくありてゆるさせ給うべし」という立文を出さざるを得なかったであろう。時宗が大聖人を尊敬しておったことは後年、大聖人が佐渡赦免となったとき、道中の町重なる警護や、三月に赦免して鎌倉に到着すると、早々の四月八日の日に、大聖人を幕府に召して、蒙古襲来についての意見をきいたことによっても証明せられるのである。だが、時宗は大聖人を遇するにかくのごとくであつたのに、何故辺地佐渡の流罪となつたのであろうか。

先ず第一に考えられるのは、大聖人の預り人となつた武蔵守宣時である。この時、宣時は三十歳歳の働き盛りである。

この人は後年連署にもなつた程の人であるから、北条家における勢力の程も察せられる。しかも宣時は父子して、良観の師匠である叡尊から、戒を授けられた程の良観びいきである。なんで大聖人を許す筈があろう。大聖人が佐渡在島中には、三度も、偽りの命令書御教書を発して大聖人を苦しめたのも、この宣時であることを思えば充分にうなずけるのである。

次ぎは大聖人を召し捕りに向つた平左衛門尉頼綱である。頼綱は、大聖人より「貴殿は天下の棟梁、万民の手足たり」と評されたくらいに権勢の人、執権職の執事である。事実その権力は政治司法の政所執事二階堂氏や、問註所の執事太田氏よりは強大であつた北条氏の執事として兵馬警察の権を司つていたのである。頼綱は、時頼、時宗、貞時三代、三十余年執事の職にあつて、

終りには、自分の子供を將軍にしようとまでのぼりつめ、遂に貞時に父子とも誅せられたのは有名な話である。まあそのくらい権勢のある頼綱である。時宗が出した大聖人の赦免をとり消すぐらいのことはしたであろう。

第三には時宗の母である。時頼の奥方であつたに違いない。時宗の母は良親が住職しておるところの極楽寺を建立した北条重時の娘であることを忘れてはならない。北条重時は、その子の長時とともに、大聖人を伊豆の伊東に流罪した張本人であることを忘れてはならない。大聖人が竜の口において処刑になる理由の一つに、北条時頼が地獄に堕ちておるといふことを問註所において取り消さなかつたことにもよるのである。大聖人は問註所において四箇の格言を取り消さなかつた。時頼が地獄に堕ちておるといふことは、時頼が死んでからいつたのではなく、生きておるうちから申し上げましたとさえ、問註所で申し述べられておるのである。このことを聴いて、時頼の夫人たる時宗の母がだまつておる筈がないのである。時宗が、いかに大聖人の蒙古襲来の予言は、事実は的中しておるのです、大聖人の言葉の通り、ただ今、軍勢は九州に向つて出兵しております。世にも不思議な仏力をそなえた日蓮聖人ですと、母に申し上げても、おそらく、それとこれとは話が違ふ。父が地獄におちているといわれて、ほつておく程あなたは親不孝かと、母からいわれたならば、時宗も抗弁のしようがなかつたであろう。

ここで一寸鎌倉時代の女性というものにふれておいても無駄ではない。大聖人の流罪死罪等に

ついでどの伝記も、北条家の奥方が、念仏禪宗等々の僧侶に加担して大聖人を処罰するということが書かれてあるが、事実であつたらうか。それについては、鎌倉時代の女性は有名な尼將軍、北条政子が範をたれたごとく、女性の地位は思つたよりも高く、男となら異なることがなかつたことを知らねばならない。娘も兄弟とともに父の財産相続をうけ、娘は結婚のときもその財産をもつて行くことができた。ただし娘の所領は本人かぎり死ねば生家にとりもどされはしたが、今から考えると江戸時代と大變に違ふのである。所領をもつた女性は、男子同様に幕府の地頭、御家人として武士の待遇を受けるとともに、兵役にも従つた。木曾義仲の愛人巴御前や板額武勇伝は有名な話である。阿仏尼は四か年も鎌倉に滞在して、土地の争いの訴訟をした。また結婚も離別も比較的自由であつたといふことで、なかなか、女権の強い時代で、女人入眼の世と批評された時代である。以上のような時代であつたから、時宗の母たる最明寺の後家尼御前の、わが子時宗に対する威圧はなみなみならぬものがあつたと察せられるのである。

以上の三人に関連したのは、もちろん、良観を始めとする鎌倉寺々の僧侶であり、念仏、禪宗等々の信者が、大聖人さまの死罪、流罪の猛運動をしたことはうなずける。

時宗の胆、甕のごとしとは詩吟の文句であるが、こと大聖人に関しては、やはり、時宗も側近の言葉に支配されざるを得なかつた。

十月十日依智を立つて、佐渡に向われた日に大聖人は、故郷の清澄山の昔の兄弟弟子に手紙を

書かれて、その決心の程を示されておる。

「九月十二日に御勘氣を蒙て、今年十月十日佐渡の国へゆきます。学問するということは、仏教をきわめて仏になり、恩ある人を助けんとすることです。その仏になる道は、必ず身命をすてる程のことがあつて、はじめて仏になると考えられます。経文には「悪口罵詈される。刀杖の難に逢う。他人から瓦や石を投げられる。度々所を追われる」と説かれてありますが、日蓮はそのような難にあつたので、自分こそ法華経を身に読むものと、いよいよ信心もおこり、後生もたのもしく、死んだ後には必ず各々を助けてあげます。インドでは師子尊者と申す人はダンミラ王に頸をはねられ、提婆菩薩は外道につきころされ、支那では竺道生と申す人は蘇山に流され、法道三蔵は顔に焼印をおされて、江南というところに流されましたが、これは皆法華経のためであり、仏法のためであります。日蓮は日本国東条安房国の海辺の漁師の子であります。いたずらに死に果てる身を、法華経のためにすてることは、石と黄金とをかえるようなものでありますから、清澄山の人々はなげかないで下さい。私の師匠の道善房にも以上のように申しあげて下さい。日蓮の両鋸が世話になつた東条の領主の後家尼にも手紙を差し上げようと思つたが、佐渡に流されるというような身の上であるから、格別なつかしいとも思つてはくれないであらうと申しとおつたと、ついでに、あなた方からお伝え下さい。」

遠隔の地に旅立つ時、誰しも故郷を思わぬ者はおるまい。大聖人さまが佐渡流罪ときまり、そ

の出発の日に、故郷、清澄寺の人々にお手紙をした御心境は充分にうなずけられるものがある。この文中の後家尼というのは大聖人さまが佐渡から赦免になると、又信心するといった型の人である。後年信心を再び始め、大聖人さまに御本尊の下附をお願いしたが「日蓮が重恩の人なれば、たすけたてまつらなために、この御本尊わたし奉つるならば、十羅刹さだめて、へんばの法師とおぼしめされなん」といつて、この後家尼には御本尊下附を、大聖人はなされなかつた。十月十日は埼玉県の久米河、十一日は新倉、十三日児玉、十四日上野栗津等々、信濃路をへて十月二十一日、越後の寺泊りに着かれた。

寺泊りまでは、大聖人を見送る人が七、八人おつた。その中に富木入道の家臣で、心ききたる入道が大聖人のお伴をした。その入道が帰る時、富木入道にあてたのが、寺泊御書である。

その寺泊御書は

「今月（十月）十日相州愛甲郡依智の郷をたつて、武蔵国久目河につき、十二日の旅をして、越後の国寺泊りの港についた。これより大海を渡つて佐渡の国に行こうというのだが、順風が定まらず、いつ渡海という日もさだまらないままに寺泊に逗留しておる。相州の依智からここ寺泊迄の道中は、想像も及ばない程の困難な旅であつて、とても筆にすることが出来ないから、御推量にまかせる。然し乍ら、何事も元より覚悟の上のことなので、今更歎くべきではないからやめておく……」（全集九五ページ）

と始まつて、直ちに御法門に入つて、最後に折伏の正義を述べられておる。その文中に、

「或る人、日蓮を難じて曰く、機を知らずしてあらぎを立て難にあうと」

——日蓮は相手の理解もかまわず、あらあらしく折伏をするから余計な難に逢うのである——

「或る人曰く、勸持品の如きは、深位の菩薩の義なり、安樂行品に違すと」

——日蓮は法華經の勸持品を行ずるといつておるが、觀持品に説くところの折伏の修行は位の進んだ菩薩のすることで日蓮のような修行の浅い初心の者は、法華經を修行するというても、安樂行品に説かれてある、消極的な布教方法即ち撰受の修行をすべきであるのに、日蓮はそのことを知らない——

「或る人曰く、我れ此の義を存すれども言わずと云々」

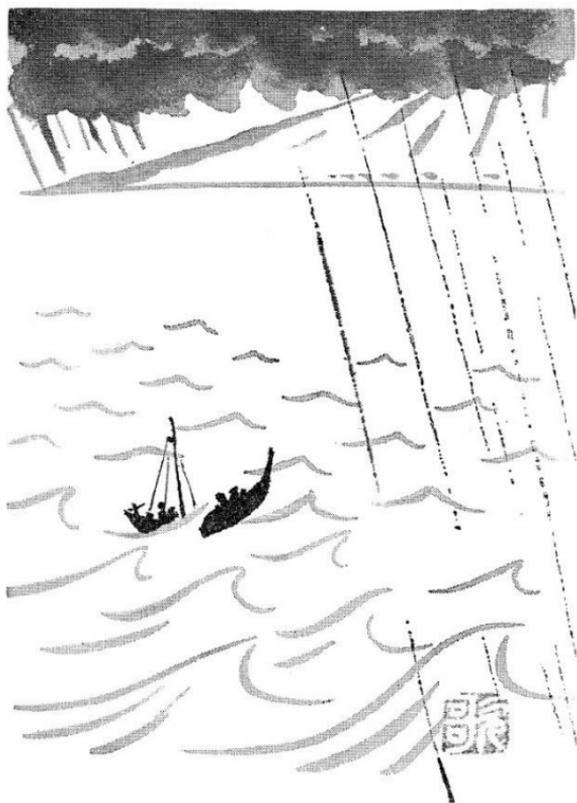
——第三の人はいう、自分も内心では、折伏の義は知っておるけれど、いわないのである——

「或る人曰く、唯教門ばかりなりと」

——第四の人は、日蓮の折伏の法門は、ただ教相の差別の一面のみにとらわれて、觀心門の平等という面からみれば、最後の悟りは同一であるということに無知だと非難する——

と四種類の大聖人への非難をあげておるがその非難を、大聖人は、法華經の行者として、勸持品に曰く「諸々の無智の人あつて、悪口罵詈す」日蓮この經文に当れり、及び刀杖を加うる者あらん日蓮この經文を読めり、「悪口してひんしゆくし、しばしば擯出せられん。数々とは度々なり、日蓮擯出度々、流罪は二度なり」といつて大聖人の心境を語られておるのである。

大聖人が佐渡に着かれたのは十二月二十八日であつた。



塚原

一

これから、佐渡の大聖人を書くつもりでおるが、まだ、佐渡に行ったことのない人のために、佐渡の島の話をしてみたいと思う。

佐渡の島と言えば、およそ、大聖人の門下を以って任ずる人ならば、一生のうちに、一度はいつてみたいと誰しも思う所である。だから、日蓮門下の人々で佐渡に行く人は多いと思い、佐渡に行く人は、必らず、日蓮門下の人だろうと錯覚するが、これは本当に錯覚であつて、一般の観光客と日蓮門下の比率は十分の一といつてよいと思う。最近の統計でも佐渡の観光客は年間二十万人と言われ、島の重要資源となつている。これにつけて皮肉にも思い出されることがある。

それは、佐渡の帰りの観光バスで、いよいよ港に近くなつた時である。バスガールが最終的挨拶をした後で、「皆様方いよいよ両津港から、御乗船でございますが、船中の安全をお祈願致し

まして、当観光バスより、御守り札を差し上げます……」云々と言って、乗客に御守り札を無料で分けていた。私は勿論必要がないから、拒否したが、隣の人が貰った御札をみたら、それが真言宗で発行したお守り札であったのには、思わず、うーむとびっくりした。

この観光バスの旅程中でも、三か処程、大聖人ゆかりの地に案内して、大聖人の佐渡の御苦勞をバスガールが説明しておるのである。だから御守り札は、それらの寺の中から発行したものである。思うのが普通だが、なんと、それが観光の日程にはない真言宗の発行の御札だから驚いたのである。

きいてみると、佐渡では日蓮宗の寺よりも真言、念仏等の寺々が未だに多いそうである。日蓮正宗の寺はまだ一軒もない。(註一) こう、思うと、われわれは大聖人さまが、御苦勞した佐渡の島を、いまだに、大聖人を苦しめた宗派の人々にまかせておるのである。先ず發奮しなければならぬ。

こんな風だから、佐渡に行く人々全部が、日蓮大聖人の信者だなどと思つたら大間違いである。新潟、長野、富山、石川あたりの商店街の招待旅行は先ず観光の島佐渡と相場がきまつておる程だ。佐渡は今、日本でも有数の観光地となつておる。

或る日蓮門下の旅行で佐渡靈跡参拝に行った時の話である。帰りの船の中で、待合の女将らしいのが引卒者の僧侶に「お祖師様も、なんか悪いことをしたのですか、佐渡なんか流される

なんて……」と質問したそうである。さすがに引卒者の僧侶も驚ろいて、「あんたは、何んの目的でこの旅行会に加わったのですか」と聞いた。すると、女将は平然として言った。「わたしは佐渡で、岡本文蔵さんの本場のおけさ節をきいて、帰りには、東山温泉で、会津磐梯山は宝の山よのほんものをきくために来たんですよ」と云った。それ程佐渡は「おけさ」と観光の島であり、詩と夢の国と今はなっているのである。私の親戚の者が、盛んに佐渡に行った話をしているので私は佐渡にいったのだなあ感心なことだと喜んで、聞いておつたが、一向に大聖人の靈跡の話が出ないので不思議に思つて聞いてみたら、実は佐渡に米の買出しにいった話なので驚ろいたことがある。

佐渡の国中平野をバスが通る時、ガイドが説明する「佐渡は二十六万石の米を産出致します。人口は十二万二千ですから、約十三万石の米の輸出国でございます。私共は、ここに生れてここに育ちましたので、佐渡を島だとは思っておりません。皆様、ここが国中平野の真中でございますが、まことに、この広々とした水田、誰がここを島だと思ひましょうか」印象に残つた説明であつた。

荒海に春きにけり新潟の

寄居（よりのい）の浜に佐渡の島みゆ

広 澄

佐渡というと、頭の中に小さな島が浮かんでくるがとんでもない話で、新潟の浜でみる佐渡は実に大きなものである。佐渡は四十九里波の上というのは、能登半島からの距離であるという。新潟からは十一里強であり、大聖人が佐渡に出帆した寺泊からは僅かに八里である。私は快晴に恵まれた日に新潟の寄居浜から、佐渡の島を望見することが出来たが、余りにも島が大きく見えるので、最初は佐渡の島だと信ずることが出来なかつた程である。丁度浜を漁師の人が通つたので、あの島は何処の島ですか、（自分の地理音痴を告白しておくようで申訳がないですが、実は余り大きいので能登半島かと思つたのだ）ときくと、佐渡の島ですと言うのである。へえと言つても、余り大きく友えるので、佐渡の島はあれではないですかと、粟島あむしまを指したものである。粟島は新潟県岩船郡に属し海岸より二十八軒の海上にあつて、東西約二軒、南北四軒の島である。さすがに、その漁師は私の言葉をきくと、気狂いとも思つたのであろう、黙つて行つてしまつた。後で、地図をみて、私は自分の間違いに啞然としたものである。

行かない人は佐渡は小さいと思うが、行った人々には佐渡はなかなか大きな島である。

改めて、地図をみたら、佐渡は周囲二百七十七軒、面積八百五十七平方軒、人口は十二万二千の日本列島第五の島であつて、新潟港を出た佐渡汽船の定期便は、約二時間半で佐渡の両津港に入ると書いてあつた。

大聖人は文永八年十一月一日、佐渡の守護職である本間六郎左衛門の家のうしろの一軒の御堂に入った。堂とは名のみで、四方の壁はとつくにおちて、床の間のすきまからは縁の下に積った雪がみえる。最初の間は寝ることもならず、床の間に、敷き皮をして雪が遠慮なく吹き込んでくるので、蓑を着て坐っておるといふ有様であった。杉や松の大本が多いので、堂には陽の光りはささなかつた。夜になると、雪や雹にまじって、雷鳴がきこえて、時々稲妻の光りが、御堂の中の大聖人をうつし出すのであった。大聖人自らも、「心ぼそかるべき住居なり」とおっしゃっておる程である。

しかも、御堂の場所は塚原といつて、死人の埋葬地であり牛や馬の死骸を捨てる所でもあった。

だが、外観は斯くの如くみすばらしかつたが、大聖人の心中は天地雲泥の相違であった。それを種々御振舞御書から引用してみる。

「あらうれしや、昔檀王は阿私仙人の下に法を求めて、千年の苦行を積んで、法華経の功德を得られた。不軽菩薩は、増上慢の人々から杖でうたれたが、法華経の行者となつた。今日蓮は末法の世に生れて、妙法蓮華経を弘めんがために、このような責めにあつた。仏の滅後二千二百余年の間、法華経を弘めた天台大師といえども「世間にあだするものが多くて信じ難い」といふ、法

華經の文を身を以つて讀まれてはおられない。「法華經の為に度々追放される」という法華經の明文を、身を以つて讀んだのは、日蓮ただ一人である。仏は法華經の一句一偈を修行しても、皆成仏の保証をあたえると説かれたが、その功德を受けるのは日蓮である。法華經を修行して仏になることは疑のないことである。斯く考えると、日蓮を流罪に処した北条時宗は、日蓮がために善知識である。竜の口に、日蓮を斬首しようとした、平左衛門こそ、釈尊におけるダイバダツタみたいなものである。斯く考えると釈尊の生存時代が、今の世に再現したのである。在世は今にあり、今は在世である。法華經では、この事を諸法実相と説かれ、又本末究竟等ともとかれて、善悪ともにすべて意味があり、仏の不思議の力の現われであるということである。天台大師は「摩訶止観」の第五に「修行と智恵が進めば、三障（一、罪障―過去の因業によつて生ずる罪障。二、業障―現在の行為より生ずる罪障。三、煩惱障―現在の煩惱より起こる罪障）四魔（一、五陰魔、身心和合せざる所に起る魔。二、煩惱魔、煩惱より生ずる魔。三、死魔、死をおそれ又は死をこのましむる魔。四、天子魔、第六天の魔王が、仏道を破壊するの魔）ふんぜんとして競い起る」とある（中略）若し僧侶があつて、善根を積んで念仏、真言、禪、律等々の修行をして、法華經を修行しなければ、第六天の魔王は、その僧に対して、親の如き想いをかけたり、多くの人々にみいつてその僧をもてなしたり供養せしめたりするのは、世の人々にその僧を眞の僧と思わせる為である。たとえば、国主が尊敬する僧は、人々も供養するようなものであり、その

反対に、国主が仇敵とする、この日蓮は、正法を行ずるものである。

積尊の為には、ダイバダッタは第一の善知識である。世間の例をみても、味方より敵の方が人をよくするものである。只今北条一門の繁栄は、北条氏を亡ぼさんとした和田義盛と後鳥羽法皇があつたからである。もし、これらの人々がいなかったら、北条氏が今日の如く日本の主となつてはおらなかつたであらう。だから、北条氏一門の為には、法皇や義盛のような人々が、味方のようなものである。

日蓮が仏になる第一の味方の人々は、一番始めに、日蓮を殺害しようとした東条景信、平左衛門頼綱、北条時宗等々、僧侶では良観、道隆、道阿弥陀仏等々であつて、このような人がいなかったならば、日蓮はどうして、法華経の行者になることが出来たであらうか」(全集九十六ページ)

(註一) 此の項の執筆は昭和三十五年七月であり、その当時の佐渡には日蓮正宗の寺院はまだなかった。

しかし現在は妙護寺が建立されている。

一一

「何処に行かれますか」

「おやつ、そなたは御僧侶ではないか、何故、私の行き先を尋ねられる」

「この先には人家はありません。それを行かれるので、尋ねたのです」

「ううむ、……して、貴公はこの路ばたでなにをなさっておるのか、それをききたい」

「愚僧はここで修行をしております」

「修行と言われるか、見受ける所、袈裟法衣の形から、真言か律宗の僧と思うが、その僧侶が、雪中にたたずんで、人を伺う容子、如何なる修行をなさっておるか、伺いたいものでござる…

…」

こう言われると僧侶はぐいとつまった。折柄から風がさつと吹いて、頭上の杉の小枝の雪が、両人の間にどさつと落ちたので、思わず、二人とも飛びすさつて、顔を見合せた。

二人ともけわしい顔付きである。一人は鳥帽子直垂を下に着て、上に蓑をきている相当老年の武士であり、一人は合羽を羽折つた僧侶であった。ここは大聖人のいます、塚原の三昧堂に通ずるちいさな路上であった。

時折り雪がふぶいてくると、二人の影がみえなくなる程の雪である、が、十二月という、今頃の季節になれば、この佐渡の島では当然のことであった。山鳩がバタバタと大きな羽音をたててすぎさつていった。これをきつかけに再び問答が交わされた。

「なんと申せ、ここを通つて塚原に行くことはなりません」

「どうしてもか……」

「左様、どうしても」

武士は刀に手を掛けた。

「これでもか……」

「そうなれば、愚僧御相手するだけ」

「ううむ、貴僧は日蓮とやらの弟子か」

「違います」

「なんじや……」

「その反対の者です」

「それをきいて安心した。それならここを通しなさい」

「何故でございますか」

「その仔細は、儂を通せば、一刻もしたなら訳が分かるう」

「それはどういうことですか」

「分からぬ御僧侶だなあ、これだ、これだ」

その武士は太刀の柄（つか）を叩いてみせた。

「ええつ、それでは」

僧侶は首をすくめて驚ろいた表情をした。

「驚ろくには及ばぬこと、おそらく、貴僧もそれを願っておる筈であらう、が……」

武士はにこつと笑つてみせた。

「素性を言わねばわがらぬが、それがしは遠藤為盛というもと北面の武士で、順徳上皇様が承久三年佐渡におうつりになつた時、妻と共に随行して参つた者だ。上皇様に給仕御奉公すること二十四年、上皇様は恨みをのんでついに仁治三年、佐渡の土となられた」

「では、あのこの島で有名な阿仏房殿か」

「左様その阿仏房じゃ、上皇様の真野の御陵のほとりに、草庵を構えて、丁度今年で三十年、毎朝毎晩、念仏を唱えて上皇様の御冥福を祈りつづけてきた者じゃ、それ故に、いっとなく阿仏房と名づけてくれた」

「左様でございますか、愚僧はお顔をみるは今日始めてでございますが、阿仏房さまの御名前は、この島の名物とみえて島につくと早々に伺つておりました。でも、その御方が雪のふるこの夕方、こんな所に……」

「それは、先程、貴僧に言つた」

「……では、日蓮法師をあやめに……」

「日蓮が首を斬らねば、この阿仏房が、毎朝毎晩、安心して御陵の前で、念仏を唱えておることが出来ぬのだ」

「それは一体どういう訳でしょうか」

あたりは夕方だというのに、雪のために明るく杉小立の間からみえる空が、ただ墨のように暗いだけであつた。

阿仏房は続けて語つた。

「三十年も唱えつづけてきた念仏が、無益であつたら、この阿仏房はなんとしたらよいか。きけば、日蓮という法師は、念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊と言つておるとか、外のことはどうでもよいが、念仏無間だけは言わせておけぬ。もつたいなくも、順徳上皇さまは、真野真輪寺の阿弥陀堂にて崩御されたお方である。故にそれがし夫婦で称名念仏すること三十年。一日一万辺として一年に三百六十五万辺三十年で一千九百五十万辺、これが無駄であつてたまるものか。念仏の故に地獄に行くなぞもつての外である、鎌倉はいざ知らず、この佐渡では、日蓮とやらは生かしておけぬ。さあ、これなら通してよからう」

「わかりました。わかりました」

僧がこう答えた時、杉木立の中から、同じ様な僧侶が二人路傍にとび出してきて、

「善観殿、御苦勞、御苦勞」

「さあ、吾等が交代じゃ」

と言つた。

「交代とは何んじや」

阿仏房が問うた。

善観と言う僧侶が黙っておると、交代にきた僧侶がこともなげに言つてのけた。

「吾等はなあ、ここにもうかれこれ一月になるであらうか。塚原の日蓮坊を飢え死さすためにここでこうやって見張っておるのが役目の者じや」

「それは、誰に頼まれて……」

「それは、この佐渡の御領主さまである武蔵守宣時さまと、鎌倉の極楽寺の良観さまの御二人からの御命令だ」

「そうだそうだが、吾等は兄弟子道観さまやこの善観さまと、鎌倉から佐渡の島に、日蓮法師の後をつけて来た者じや、念仏の仏敵をほうむるために態々やつてきたもの」

善観と言われた僧侶が、つけ加えた。

「阿仏房様も我等の味方であるから申しますか、佐渡の念仏宗の唯阿房様、生喻房様、印性房さま慈道房様、いや、佐渡の島中の念仏宗、禅宗、真言宗、律宗の御僧侶は皆な我等の味方です。

仏敵日蓮をほうむらんがため、日蓮がすむ塚原の四方の路は、全部我等が手で固めてある。通路通路に、このように見張りをたてて、昼夜監視を厳にして、一粒の米も一滴の水もおさぬ様に見張りしておる所です。間亀なく日蓮は飢え死する筈です」

「日蓮を飢え死させては遠藤為盛、武士が立ちません。仔細は、後刻、御免つ」
老人とは思えぬ勢いで、ふり始めた雪の中に消えて行けば、残された、三人の僧侶は、顔見合せて、にっこり笑うだけだった。

夜も昼も雪ばかりふりつづいて、昼夜の差別はつきかねるが、雪の中に雹がまじり、稲妻の光るのが夜であり、風が、ありもしない壁をゆすって敷板の下の板間から吹き上げてくるのが昼であつた。勿論日の光は一向にみえない。

大きな杉や松が、塚原の三昧堂におしかぶさっていた。ここは死人を埋める所であり、牛馬の死骸を埋める所であつた。訪ずれるものは松籟の音と、時折、枝からおちる雪の音だけであつた。

今は時折、稲妻が光るのでたしかに夜に違いない時刻であつた。

大聖人は、夕の読経であろうか。

自我得仏来、所経諸劫数

無量百千万、億載阿僧祇

.....

と経をつづけて、

一心欲見仏、不自惜身命

と読誦していた時である。すうつと後から刀が大聖人の頬にせまつた。

時我及衆僧 俱出靈鷲山

……………

依然として読経する大聖人……

「やめぬか目蓮坊、経をやめやめやめつ」

堂の中に入って抜刀を大聖人につきつけたのは、遠藤為盛である。

大聖人は静かに、読経をやめると、向きを変えて、為盛と向いあつた。正座する大聖人の前に

土足抜刀の為盛がいた。

「何の用か……」

「汝の首を所望じゃ」

傲然と言い放つ為盛だつた。

「日蓮は竜の口でこの首を所望されたが、再び今宵は、佐渡において所望されたか。だが、何

故、日蓮の首を所望するのか」

「仏法の為じゃ」

「なに、仏法の為と言うか、仏法の為と言うのなら潔よく首をさし上げよう」

「呉れるか」

「差し上げるぞ」

「おうっ」

為盛は威勢よく太刀を振りかぶった。

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

大聖人は何時もと変わることなく、静かに唱題された。唱題をみとどけた為盛は、にっこり笑って、もう一段と太刀をふりあげた。折から枝が折れたか、どどつと雪の落ちる音が三昧堂の背後にして、ぴかっと光った稲妻に、二人の姿がうきぼりにされた瞬間である。

「ううむ…」

うなつた為盛は、

「斬れぬ……残念っ」

と言ったかと思うと、強く刀を大聖人ならぬ板の間にふりおろし、堂とばかりに尻もちをついてしまった。

「仏敵が、斬れぬ筈がない。今日本中の人々が仏敵としておる、この日蓮が何故斬れぬ、不思議だ、不思議だ」

とつぶやきながら、残念そうに大聖人の顔をみるのみであった。

為盛は刀を鞘におさめると、大聖人の前に正座した。そして暫く言葉もなく大聖人を茫然と眺めるのみであった。

「日蓮坊なぜ膿が、斬れぬか、訳を話してきかせてくれ、秘法をつかうと他人からきいたが、本当か……」

「はあ、はっはっ……」

三昧堂の名ばかりの壁が落ちる程大聖人は笑われた。啞然とした為盛……

「この日蓮が秘法を使うと言われるか、それは面白い、使うかもしれないぞ」

「では、噂の通りか……」

「まだ合点が早い、日蓮が使う秘法は、教主釈尊がこの末代吾等衆生の為に、残された法華経という秘法だ、法華経こそ一切衆生をたばらかす秘法なりとの言葉もある」

「その秘法とか言う、法華経と言うものはどんなものじゃ、教えてくれぬか」

「抜刀をして、破れたりと雖もこの三昧堂に土足で上つてきて、その果ては教を請うつもりの人、何処の何んと言う人か」

大聖人の威勢に打たれて、遠藤為盛は思わずはあつとなつて身をしりぞけると、思わず町重な礼をするのであつた。

「私こそは遠藤為盛と申すもので、順徳上皇の御陵を夫婦して守ること三十年、この佐渡の島に在ること実に五十一年の者にございます。三十年来念仏を唱えて御陵を御守護しておりますのに、念仏の悪口を言う日蓮と言う僧が、この三昧堂に近頃おるときき、あわよくば、それをしめて、仏恩を報ぜんものをと、今宵まかり越したものでございますが、何故か、防ぐ術もなき御僧が、斬れませぬ。この不思議さは何処からくるのか、とまどうばかりでございます」

「それは、日蓮が身によむところの法華経の真文の致すところと言う外はない。日蓮が只今この佐渡において身に読むところの法華経とは、これを説かれたる釈尊御自身も未だ読まぬところの法華経であつて、末代に出生したる法華経に言うところの斯の人たる者が読むべき法華経である。仏滅後二千二百二十余年いまだ嘗て、誰人もよむところなき法華経の真文に外ならないのである。斯かる不思議な法華経を身に行ずる日蓮を、念仏修行三十年と言えどなんでされるものであろうか」

「御身が法華経を行ずる不思議な身であることはわかつて、何故念仏の悪口を言うのか、これがわからぬ、いずれも同じ仏説ではないか。譬えば、木に松柏の別あつても、誰しもあなどらず、華に梅桜の区別あつても何人も悪口を言う仁はおらない。然るに仏説にだけ、これを是とし他を非とするの掟てがあらうとは、これ仏説とは思えず、ただ我田引水の小意見としか受けとれぬ

が、これは如何なものであろうか」

為盛は意気ごんで、大聖人に問うのであった。大聖人はえたりと、につこり微笑されて答へられた。

「左様々々、日蓮もさもやと思えたのである。南無妙法蓮華經と唱える口で南無阿弥陀仏と唱えても、同じ仏説なればよからうと思つたのである。ところが法華經にはただ大乘經典を受持することを願つて、余經の一偈をも受けずとある。法華經を行ずる人が一口は南無妙法蓮華經、一口は南無阿弥陀仏など唱うるのは、飯に糞をまじえ沙石を入れたようなものである。たとえば、皇后（きさき）が大王の種をはらんでも、民にとつげば王種と民種とまじつて、天の加護と氏神とに捨てられてその国を破るの縁となる。父二人出来れば、王にもあらず民にも非ず人非人となるのである。貴殿が三十年も順徳帝の御陵に、念仏申し上げたのは何の為か」

「言わずと知れたこと、先帝様の御冥福を祈り、成仏を願えばこそである…」

「噫呼悲しき言葉を眼前にきくもの哉、昼夜朝暮に弥陀念仏を申す人は、薬はめでたしとほめて朝夕毒を服する者である。しかも念仏は成仏の種とならず、何百万返唱えても、南無阿弥陀仏ではおぼつかない、その証拠は、貴殿が毎朝毎晩に読まれる阿弥陀經の中にある。阿弥陀經の中で、舍利弗舍利弗と三十八回も、名前を呼ばれたる舍利弗尊者は、阿弥陀經では成仏せずして、法華經において華光如来という仏さまになつておる。阿弥陀仏も、その昔は法蔵比丘と言つたお

方であったが長いこと法華経を修行して、始めて阿弥陀仏という仏になられたのである。故に阿弥陀仏は、第十八の願に、法華経を誹謗するものは救われないと言われておるのである…」

為盛の意外と言う顔付は、漸次に心服という顔色に変わって行くのであった。

「遠藤為盛と言われたなあ…」

「はいっ」

為盛の返事はすなおであった。

「貴殿は貴殿が五十一年も御奉公申し上げた順徳帝が、一天万乗の大君にましましながら、何故、この辺土の地におうつしされたか、その理由を考えたことがあるか。本朝開闢以来叛逆のもの総じて二十六人、第一は大山王子第二は大石山丸、乃至第二十五人は頼朝、第二十六人目は権太夫北条義時である。古来王法に敵して亡びざるものなしと言うに、何故北条義時は亡びずして、後鳥羽上皇は隱岐の島に、順徳上皇はこの佐渡島に、土御門上皇は謀議に加わらずして自ら土佐に配流を願われ、雅成親王は但馬に、頼仁親王は備前にと各々配流という、この七華人裂の最後は如何なる宿因によるものであるか、その原因を考えられたことがあるか、如何じゃ」

「……………」

為盛は只々黙念とするのみであった。

「然るに日本国中これを不思議と思う者が一人もない。すめら御国のみかどとなられる御方様は、仏法上では五戒十善の君と申し、また天照太神の御霊のおんかわらせ給う御方と申し上げるのに、何故臣下の謀叛に破ぶられたのか、日蓮は：為盛殿、実はこの事を不思議と思つて出家得道したのだ」

大聖人は思はず言葉をきつた。

思い出したように、雪は三昧堂の四辺にふりつづけていた。為盛は姿勢をただすと、きつと大聖人を仰ぎみるのであつた。

「…結句は、仏法は体の如し、世間は影の如し、体曲がれば影ななめなりとの結論に達したのである。正統な仏教が忘れられて、邪法邪宗の邪義が世に行なわれて、人心をまどわすから、政道も人の道も人々の生活もいや天地の運行すら、時を以つてめぐらずとなるのだ。譬えば二仏並存の真言の思想は一國に二王の争いとなり、弥陀を以つて釈尊よりすぐれりとする念仏の考えは、臣下を以つて王よりすぐれたりとの下剋上の考えとなるのである、恐ろしいことではないか。人王八十一代をば安徳天皇と申す、父は高倉院の長子、母は大政入道の娘建礼門院なり、この王は元暦元年三月二十四日八島にて海中に崩御遊ばされた。この王は源頼朝將軍にせめられて、海中のいろくずのえじきとなり給う。入王八十二代は隱岐の法皇と申す、高倉の第三王子、八十三代は

阿波の院、隱岐法皇の第一の王子、八十四代は佐渡の院、隱岐法皇第二の王子、承久三年二月二十六日、王位に即き、同じ七月に佐渡の島に遷され給う。この二三四の三王は父子である。鎌倉の右大将の家人義時に責め落されたのである。そもそも承久三年の四月十九日には、天台の座主慈円僧正を始めとして、仁和寺、三井寺の高僧四十一人を集めて、この法を行なうことは日本に第二度なりという十五壇の秘法を修し、五月二日には如法愛染明王の法を紫宸殿に行ない、六月九日には守護経の修法を行なつて、北条義時を調伏せしめたが、その結果は如何にと言うに、仏法の力もかなわず、王法の威力もかなわず、見るも無残な敗北ではないか。義時の御魂と姓名を、書きつけて、諸仏諸神の御足の下にふませて額に脂汗をながして祈つてはみたが一年も一月ものびず、僅か一日か二日の合戦で、天皇の軍は負けたのである。日蓮は、このことを疑つて、幼少の頃より随分と顕密二道、ならびに諸宗の一切経を或は人に習い、或は我から開見して勘えたるに、その道理が相わかつた。我が面をみることに明鏡による如し、国土の盛衰を計ることは仏鏡にすぐべからずと悟つたのである。即ち今日蓮一代聖教の明鏡をめつて、日本国を浮かべて見るに、この鏡に浮かぶ人々は国敵仏敵たること疑いなし、一代聖教の中に、法華経は明鏡の中の神鏡なり。銅鏡は人の形をば浮かぶれども、いまだ心をば浮かべず。法華経は人の形を浮かぶるのみならず、心をも浮かぶ、心を浮かぶのみならず、先業をも、未来をも、かんがみ給うこと曇もなし。法華経の第七の巻には、如来の滅後に於いて、仏の所説の経の因縁及び次第を知つて、義

に随て実の如く説かん、日月の光明の能く諸々の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅すとある。……」

「わかりました。わかりました」

為盛は悲痛な叫びを上げながら、矢庭に三昧堂から飛びおりると、たすきがけにしていた胸紐をゆるめて、左手に念仏の数珠をとり出し、高くほうったかと思うと、さあつとこれを抜き打ちにした。珠はばらばらと雪上に散った。

「上人、為盛この通りでございます。只今よりは、南無阿弥陀仏ではございません。南無妙法蓮華経と唱えます」

雪の中に身を埋めて、合掌しつつ大聖人を伏し拝むのであった。

「祝着、為盛殿……」

「御上人さま……」

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

折から、激しくなった雪にも負けぬ題目の音が、塚原の山野に響くのであった。

「お婆々、もどつたぞ」

「おやつ、お帰りなさいまし」

為盛は土間で、蓑の雪をうち払いつつ声をかけた。ここは順徳上皇の御陵に近い、遠藤為盛のすまいである。

どつかと、炉辺の前にあぐらをかくと、たきぎを思いきつて火にくべた為盛、赤々と火がもえ上つて、女房と顔を見合せた。

「旦那さま、お忘れものがあるのでは、ありませんか」

女房が声をかけた。

「忘れもの、言うど……別に……」

為盛は、下をうつむいて、もえる火をじつとみるのであった。

「でも、旦那さまは、日蓮坊主の首を引きぬいてきて、順徳上皇の御陵に捧げなければ、これから、朝夕、念仏が唱えられぬと、言いきつて、おでかけてしたが」

「左様、俺も、その時は、そう言ったが」

「言つたがどう致しました」

「……………」

「手ぶらで帰つたところをみれば、負けましたか、ええつ不甲斐のない亭主殿……」

為盛の女房は思わず、炉辺の薪をぎゅつと握りしめて、

「明日から、どんな気持で御陵の前で、念仏を唱えるのでございますか。念仏の悪口雑言を言う、日蓮をこの島に生かせておいて、われ等夫婦は、御陵の前で念仏が唱えられますようか」

「……………」

「あなた様も八十をすぎた老体、口はともかく腕づくでは、日蓮一人あやめる訳にまいますまい。だから、婆々ながらも妾は、北面武士の妻女、妾も力を貸しましょうと、お出掛の時に言つたではございせんか」

「お婆々殿、腕づくで負けたのではない、負けまいと思つていた、口で負けた。明日からこの遠藤為盛は念仏は言わないのだ。御陵の前で南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と唱える決心をしてきたのだ」

「ええつ、そりや、なんと言うことを言われます。念仏を唱えない、南無妙法蓮華経と言うのでございませうか」

女房はのけぞりかえる程にびっくり仰天した。暫し二人とも言葉がなかった。

「では、一体どう言うことが起つたのでございませうか。とくと、妾にきかせて下さい。考え深いあなた様が、本心から言われる様子、夫に従うのは妻の掟でと申しますから、事と次第では、妾も、南無妙法蓮華経と唱えないものでもございませぬ」

「そう言うてくれるか、本当に嬉しいぞ。では塚原の三味堂で、聖人を襲つた時の話をしようか。なぜ、念仏の数珠をきつたか、そのいわれを聞かせようか」

「聞きましょう、お話し下さい」

女房は、炉の中に一段と薪をくべれば、為盛は、女房のくんだ湯をのんで、始めて腹をあたためて、じつと思ひ出すように、天井をながめていたが、やがて、語り出したのである。

「お婆々殿、今年で丁度、三十年、我等は、この佐渡島に順徳上皇様の御陵を御守護しまいたなあ」

「左様でございますとも、上皇様のお伴をして、真野の浜に上つてからは本年で五十一年目になりますぞ。あの時、上皇様のお船がどの浜にも波が荒らく、この真野の浜だけはよせてゆく波のみあつて、返す波がないので、御無事に船がつかしましたが、上皇様は、よせゆく波のみで返す波のないのは、二度と京都に帰えることがないのだと涙の中に御製あそばされたことを今でもおぼえております」

「そうだ、そうだったなあ、崩御されて三十年我等は、ひたすらに御陵を御守護して参つたのだ

が……」

「それが間違っておりましたか、とんと解せぬことでございます」

「簡単に言えば、間違いであつたぞ」

「わけがありましような、わけをおきかせ下さい」

「言わなくて、どうする、お婆々よく聞けよ」

「はい」

「我等は御陵の前に朝夕念仏して三十年まいつたが、未だこれを不思議と考へたことがなかつたなあ、崩御あそばされたから念仏をするのが役目だと思つて、御回向申し上げた。ところがなあ、我等が念仏申し上げるお方は、一体、この国においては如何なるお方様であつたのか……考へたことがあるかなあお婆々殿」

「かたじけなくとも、順徳上皇様は、一天万乗の大君にましましたにも不拘、この辺国佐渡において佐渡の土になられた、もつたいない御不幸なお方様であられました」

「この日本の国の大君となられる御方様は、天照太神の御魂のいりかわらせ給う御方なりと申し、五戒十善の勿体なくもあらひと神と申してもよい御方様ではないか、どうして、そのお方の

軍勢が、臣下の軍勢に負けたのであろうか、開闢以来天子の軍勢が負けたことがないのでどうして負けたのか、どうしてだ……」

「旦那さま、それは御無理でございます。あなた様はいやしくも、天皇を守護する北面の武士ではございませんか。なぜ、承久の乱に順徳様の軍勢が、負けたかは、充分御存知の筈、このお婆々にきく必要はありますまい」

「これは負けた、これは言いすぎた、お婆々あやまるぞ」

「まあ、それはともかく、それが、なぜ、念仏をやめた理由になるのか、それを、おきかせ下さい」

「せくな、せくな、これから話さねば訳が充分にわからぬのじゃ、いいかなあ、我等は念仏は念仏、いくさはいくさと別々に思っておった、ところが、それがそうではないのだ」

「どうそうではないのですか……」

「くどい婆々だなあ、せくなと言っに」

「お手前の口ぐせの婆々がはじまりましたなあ、如何にも妾は婆々でございますが、しかし」

「これこれ、お前の口ぐせの、がしかしが始まると、くどくなる、実は、なあ、膿も今さつき、聖人さまから教わったばかりじゃから、あまりせくと、うまく言えぬのだ」

「ほほほっ……」

女房はくつたくの笑い顔を、炉辺の火にうつした。

「左様でしょう、塚原で教わったのに違いない、お前さまは、今迄そんなことを妾に言ったことがございせんもの」

「言わねばこそ、今迄なんにも知らず、念仏を唱えておったのだ、その念仏を今さつき捨てたところなのだ、お婆々よくきけよ」

「それは、さつき、お前さま、か言つたばかりでございます、もう一杯さ湯でもお上りなさいまし」

女房は釜から、湯をすくうと、炬ぶちにおかれた茶碗に湯をつぐのであった。

「天子真言と言われるくらいで、天子さまはみんな真言宗を御信仰あそばされておる、順徳上皇さまとても御信仰であった。その真言宗を、お聖人さまは、亡国の宗旨ときめつけられておるのだ。何故、真言は亡国かと儂が問うた時にお聖人さまは、証拠をもつて答えられた。承久三年六月十五日に何故天子が負けたかと言うに、天皇方がたのんだ真言三十五壇の秘法が満願の日に、しかも一日で天皇方は負けたのである。相手方の義時の軍勢方はなんの祈禱もしていない。祈禱した軍勢が祈禱しない軍勢に負けた。不思議ではないか。これを誰も不思議と思う者が日本中に一人もいない。お聖人は言われた、日本国中にこれを不思議と思う者なし、日蓮一人不思議と思えり、いやさ、このことを幼少より不思議として、出家得道したと言うのである。日蓮大聖人さま

は実は我等の味方であり、順徳上皇様を心中よりおいたわしいと思っておられる御方であったのだ

「して、それと、念仏無間とは如何なるつながりがあるのでございましょうか」

「まあ待て、お聖人さまは言われた。祈りのかなわざる仏法は眞の仏法ではない。現に天皇方に味方して朝敵伏滅の祈禱をなした高僧四十一人は念仏、眞言、禪、律宗の人々である。今の世に彼等の経々は利益なしと天下に証明したのであると申された。では何故、念禪眞言律の経が利益がないのかと言うと、釈尊の教えにそむいて、時代を忘却し、末世衆生の機根を知らぬからだと言われた。仏の教えに従えば今は、法華経の流布すべき時代であり、仏もそれを法華経に予言されておると言うのだ。法華経に予言された如く、仏滅後二千七百七十一年目にお生れ遊ばされたのが、お聖人さまだ。お婆々殿、私はあのお方様を、刀の下に置いて、真剣に斬ろうとした時、仏さまとは斯かる人と言うのだとはつきりと悟った。斬れなかった。どうしても斬れなかった。あのお方様は、仏さまだ、法華経を世間に行ずる仏さまだ」

「しかし、どうして、仏さまとも思われるそんな尊いお方が、このような流人の島、佐渡においでになられたのでしょうか、不思議でなりません」

「一天万乗の大君と仰がれた、順徳上皇さえも、この佐渡にきて、なくなられておる御時勢だ、仏さまが佐渡にこないでどうしよう。法華経の勸持品には、末世において、法華経を行ずる者

は、もろもろの無智の人より、悪口罵言される、又刀杖を加えられる、これが法華經の行者の姿であるとかかれてある。又悪口されきらわれて、しばしば所を追われると示されておる、今のお聖人の姿がそれである。この為盛は、白刃をかぎして、たしかに、大聖人さまこそ、この日本国を救う、法華經の行者、末法の仏さまと拝んだのだ」

「……………」

「女房、お聖人さまを飢え死にさそうとする念禪真言律の悪侶達は、塚原の四辺をかためて、一滴の水も一粒の米も、お聖人の喉を通すまいと警戒しておる、どうだ、儂の言うことが嘘か、本当か、これから、お聖人に食糧をもつていつて拝んでこい、仏さまだ、今の世の仏さまだ」

「真正直なお手前の言うこと嘘とは思えませぬ、そんなら妾はにがり飯をこしらえて一走りいつて参りましょうか」

「そうしてくれ、そしてこれからは、南無妙法蓮華經と夫婦で唱えることだ……南無妙法蓮華經と唱えなければ、順徳上皇様のみたましいは救われないぞ……」

「とんだ変りようでございますなあ」

「お婆々いそげよ、幸にこの夜更け、もう見張りも、おそらく手うすになったであろう、お聖人さまに、もつたいないがひもじい思いをさせておるのだ」

「承知承知、早速致します」為盛の女房は元氣よく炉辺から立ち上った。

富 士（第三卷）

印刷 昭和四十九年五月七日

発行 昭和四十九年五月十六日

著者 柿 沼 日 明

発行者 岩 井 福 次 郎

発行所 法華講連合会 大白法編集室

東京都墨田区吾妻橋一―四―一一

TEL 〇三(62) 五六四三

装幀・挿絵 落 合 歌 二 郎

地図作画 小 山 康 夫